

173
263

日本歷史問答全



特61

193

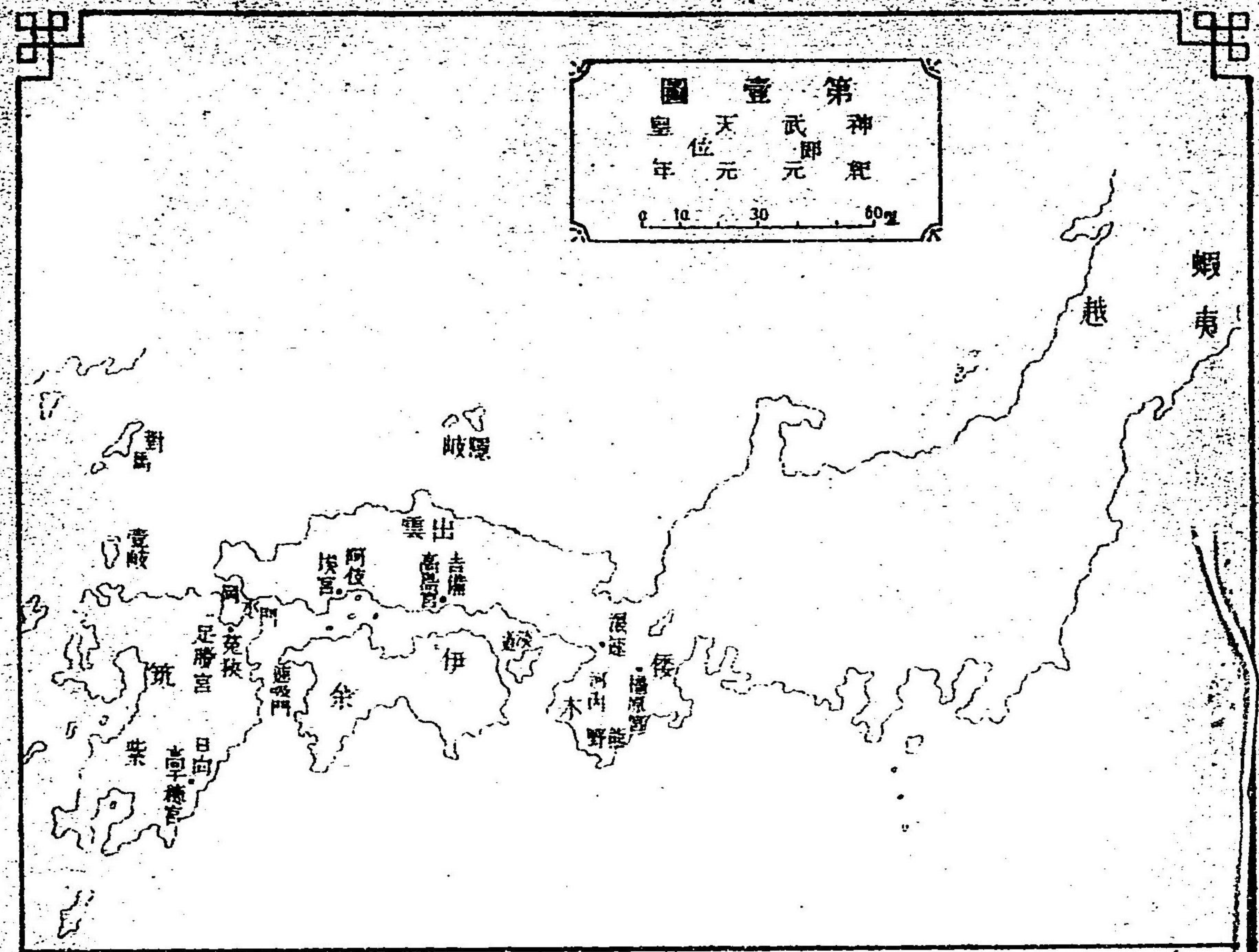
富山房編輯所編纂

日本歷史問答
全

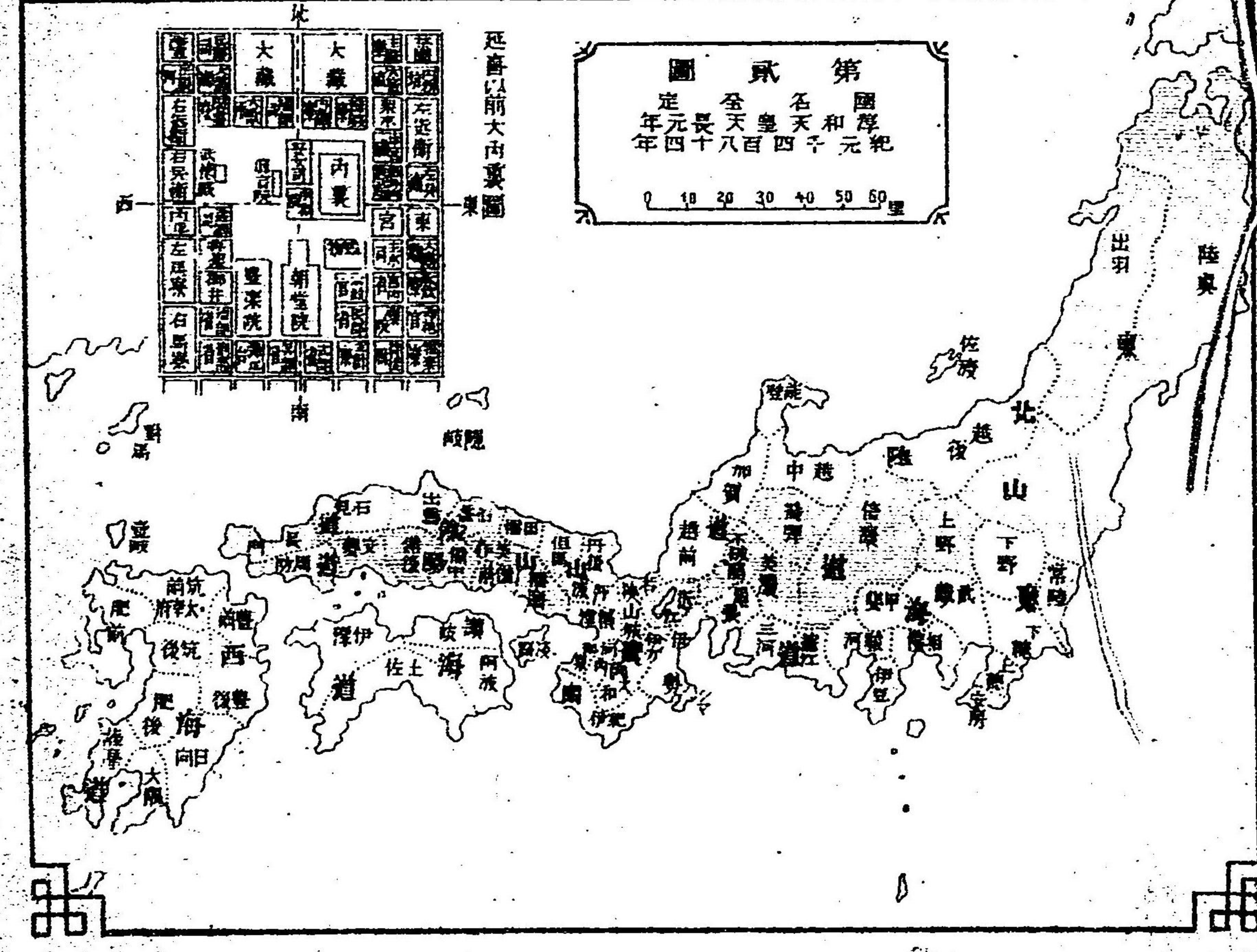
東京

富山房藏版

第一圖
神武天皇
元元元年
10 30 60里



第二圖
聖德太子
元長天皇
元元四年
10 20 30 40 50 60里

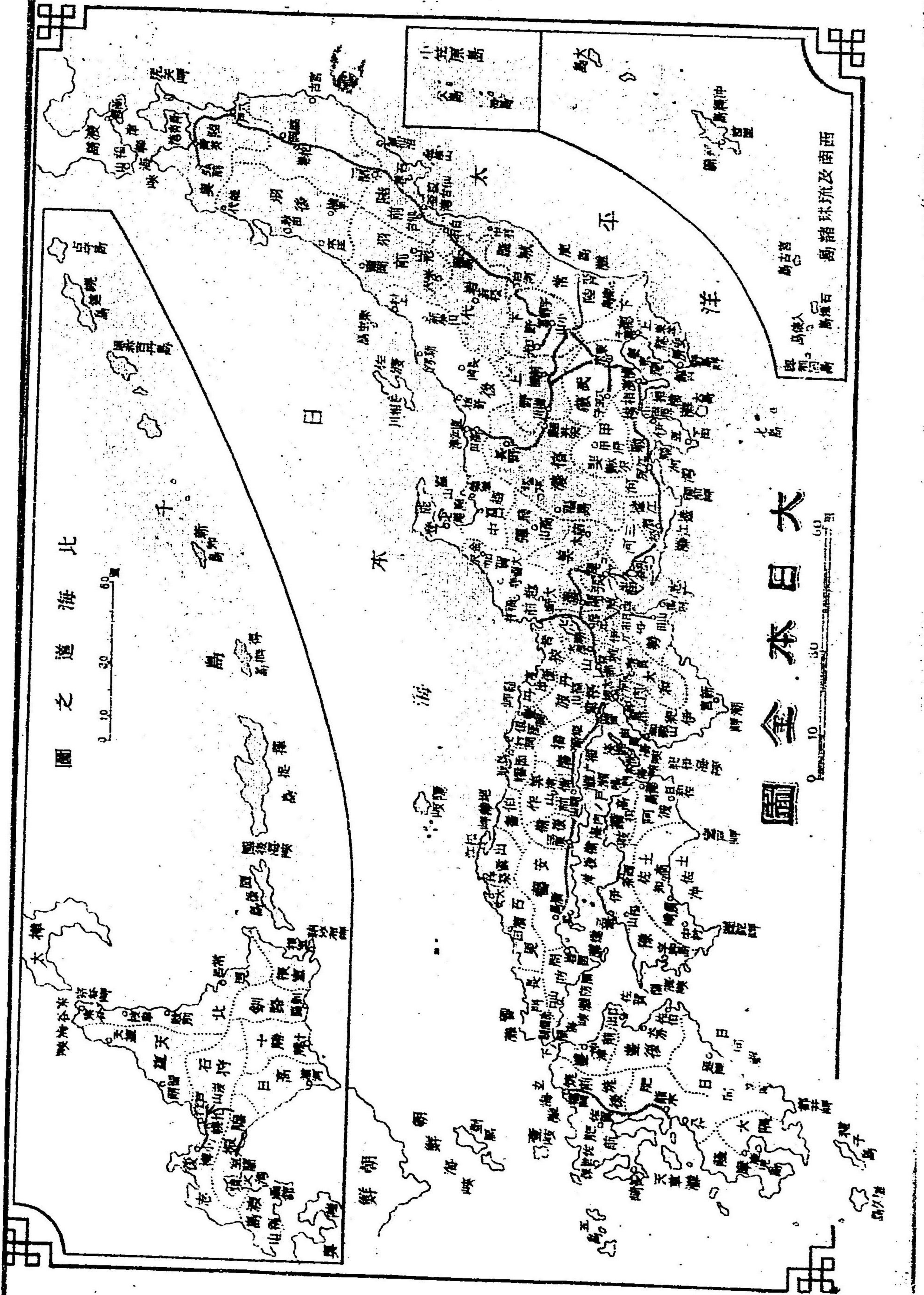


日本歷史問答目次

第一 王朝時代 自上古至鎌倉

(1)

- 日本帝國ノ位置面積人口地勢等ヲ略說セヨ ●日本帝國古來政變ノ大略ヲ述ベヨ ●神代ノ頃我カ國開化ノ狀態如何 ●三種ノ神器ノ御由來ヲ問フ ●神武天皇ノ東征ヨリ御即位マテヲ略記セヨ ●神武天皇建國ノ制度ハ如何 ●手研耳命ノ叛亂ヲ記セ ●將軍職ノ起源ヲ問フ ●外國人ノ入貢歸化及ビ本邦人ト結婚ノ始如何 ●崇神天皇ヲ御肇國天皇ト稱シ奉リシ所以如何 ●狹穗彥ノ變 ●殉死禁制ノ次第ヲ問フ ●相撲ノ濫觴ヲ舉ゲヨ ●日本武尊ノ武功 ●古代ノ政治組織及ビ租税法如何 ●神功皇后ノ三韓征伐ヲ舉ゲヨ ●神功皇后ノ三韓征服ハ我國ニ如何ナル影響ヲ及ボシ、カ ●武内宿禰ノ事蹟ヲ舉ゲヨ ●任那日本府ノ興廢ヲ述ベヨ ●佛教傳來ノ始如何 ●上古ノ文字及ビ史官ノ起源ヲ問フ ●稚郎子ノ讓位ノ次第ヲ叙セヨ ●仁德天皇ノ仁德ヲ述ベヨ ●允恭天皇姓氏ノ審判ヲナシ、所以如何 ●氏族三別ノ制如何 ●眉輪王弒逆ノ顛末如何 ●清寧天皇ノ億計・弘計・二皇子ヲ迎ヘタル次第ヲ記セ ●佛教渡來ノ次第 ●佛教以前ノ宗教ハ如何 ●馬子ノ弒逆 ●冠位及憲法制定ノ起源如何 ●蘇我氏ノ專横ナリシ所以如何 ●外國通信ノ始ヲ舉ゲヨ ●海外留學生ノ起源 ●入鹿ノ伏誅ヲ略記セヨ ●調伊企難ノ節ヲ記セ ●我が國古代ノ服裝如何 ●古代頭髮ハ如何ニセシカ ●古代ノ家屋ハ如何 ●大化改革ノ大略ヲ舉ゲヨ ●大化革新以後鎌倉時代ニ至ルマテ政權ノ所在



如何●藤原鎌足ノ略傳ヲ舉ゲヨ●壬申ノ亂ノ顛末如何●大化革新以後律令ノ制定如何●
 王朝時代軍制ノ一斑ヲ舉ゲヨ●貨幣鑄造ノ始メ、及ビ其以前ノ賣買方ヲ問フ●天智帝ヨ
 リ淳仁帝ニ至ル迄ノ學校制度如何●國史ヲ編修セシ初ハ如何●廣嗣ノ亂ノ顛末如何●押
 勝ノ謀叛ヲ略記セヨ●道鏡ノ非望●和氣清盛ノ事跡ヲ問フ●平城ノ朝トハ何帝ノ時代ナ
 ルカ●桓武帝ノ御遷都●阿部比羅夫ノ東夷征伐ヨリ田村麿ノ凱旋ニ至ルマテ東夷叛服如
 何●弘仁ノ變トハ如何●王朝時代佛教隆盛ノ狀ヲ記セヨ●印板ノ起源如何●平假字ノ發
 明如何●承和ノ變トハ如何●惟仁親王ノ冊立及ビ藤氏攝政ノ次第●藤原氏專權ノ由來如
 何●基經ノ廢立ヲ叙セヨ●關白職ノ起源●道眞ノ貶謫セラレタル次第ヲ述ベヨ●清行ノ
 封事トハ如何●延喜ノ治如何●格式ノ意義如何●天慶ノ亂●天曆ノ治●兼通兼家ノ爭●
 華山ノ遜位●道長ノ事跡ヲ問フ●前九年ノ役ヲ舉ゲヨ●後三條ノ政治及ビ藤氏ノ勢力如
 何●王朝時代有名ノ學者ヲ舉ゲヨ●院宣ノ政トハ如何●後三年ノ役トハ如何●藤原氏ノ
 勢ヲ失ヒタル次第ヲ叙セヨ●保元ノ亂トハ如何●平治ノ亂トハ如何●賴朝ノ死ヲ免レタ
 ル次第ヲ叙セヨ●平氏ノ權ヲ得タル次第ヲ問フ●清盛法皇ヲ幽シタル顛末●以仁王舉兵
 ノ次第如何●福原ノ遷都

第二 鎌倉時代

(八四)

●賴朝ノ舉兵ヨリ富士河ノ戰ニ至ルマテ略記セヨ●義經が賴朝ニ再會スルマデノ略歷
 ヲ問フ●義仲ノ舉兵及ビ礪波山ノ戰爭ヲ記セヨ●清盛ノ薨去ノ狀ヲ記セ●義仲ノ暴逆ヲ

ル事蹟ヲ問フ●一ノ谷ノ戰如何●逆櫓ノ議及ビ檀浦ノ戰如何●賴朝ノ義經ヲ討チタル所
 以及ビ奥羽征伐ヲ述ベヨ●賴朝ガ兵食ノ大權ヲ握リタル次第如何●賴朝ノ範賴ヲ殺シタ
 ル次第●北條時政ノ賴家ヲ殺シタル次第●時政北條ニ幽セラレタル所以●義盛ノ北條氏
 ヲ謀リタル所以及ビ其結果如何●鶴岡ノ變トハ如何●源氏ノ興亡●承久ノ變ヲ略記セヨ
 ●兩六波羅府創立ノ深意如何●泰時ノ政●時賴ノ政治ヲ述ベヨ●青砥藤綱ノ事跡ヲ舉ゲ
 ヲ●三浦泰村族滅ノ顛末ヲ記セ●元兵來寇ノ顛末ヲ記セ●鎌倉時代ノ佛教ハ如何●龜山
 上皇誓書ヲ貞時ニ賜ヒシ次第●兩統更立ノ策●無禮講及ビ其結果ハ如何●元弘ノ亂及北
 條氏ノ滅亡ヲ記セ●建武ノ中興ヲ略記セヨ●鎌倉時代武家屋敷ノ体裁如何、又支關・床ノ
 起源如何●茶及ビ葡萄ヲ初メテ植エシ時代并ニ茶會ノ初ヲ問フ

第三 南北朝時代

(一一三)

●南北朝分立●後醍醐帝以後、後深草・龜山・兩統迭立ノ次第ヲ圖示セヨ●大塔宮ノ略傳
 ●尊氏義貞ノ功勞及ビ賞賜ノ差等如何●尊氏ノ叛●楠正成ノ事跡ヲ舉ゲヨ●新田義貞ノ
 事跡ヲ問フ●楠正行ノ事跡●明德ノ役トハ如何●南北朝ノ合一

第四 足利時代

(一一六)

●足利幕府ガ鎌倉管領ヲ置キタル所以及ビ其結果如何●應永ノ役トハ如何●足利氏國體
 ヲ辨シメタル事柄ヲ問フ●關東管領足利氏ノ亡滅●嘉吉ノ亂●應仁ノ亂ノ顛末ヲ記セ●

第五 豊臣時代

(一四八)

足利時代文學ノ有様ヲ問フ ● 足利時代ノ徳政トハ如何ナルコトゾ ● 我が國耶蘇教ノ起原如何 ● 足利時代家屋ノ構造如何 ● 上下ノ起原如何 ● 衣服ニ附スル紋章ノ起原如何 ● 後北條氏ノ興亡 ● 河中島ノ戦如何 ● 殿島ノ戦ヲ舉ゲヨ ● 桶峽ノ戦 ● 三形原ノ戦 ● 本能寺ノ變トハ如何 ● 羽柴毛利和親ノ顛末ヲ問フ ● 銃砲ノ傳來 ● 山崎ノ戦トハ如何 ● 賤岳戦争ノ顛末ヲ記セ

● 豊臣秀吉ノ幼時ヨリ海内統一マデノ略歴ヲ舉ゲヨ ● 豊臣氏第一回朝鮮征伐ノ顛末如何 ● 淺野長政ガ秀吉ノ親ヲ海ヲ渡リテ外征セントセシヲ諫メタル次第ヲ問フ ● 第二回朝鮮征伐ノ顛末如何 ● 關ヶ原合戦ノ顛末如何 ● 豊臣時代ノ外交如何 ● 豊臣氏ノ改定シタル田制如何 ● 豊臣時代ノ建築術ハ如何 ● 月代ノ起原如何

第六 徳川時代

(一六〇)

● 徳川家康ノ略傳ヲ舉ゲヨ ● 家康大坂城ノ富實ヲ憂ヘテ如何ナル計ヲ案出セシカ ● 方廣寺鐘銘事件ノ大略ヲ問フ ● 鐘銘事件ノ起リシハ且元カ立テタル三策ヲ舉ゲヨ ● 大坂冬陣トハ如何 ● 大坂夏陣トハ如何 ● 家康ノ東本願寺ヲ立テタル深意如何 ● 江戸ノ參勤交代トハ如何 ● 島津家久ノ琉球ヲ征シタル顛末ヲ記セ ● 我が國人ノ地球ヲ一周シタル始ヲ問フ ● 徳川時代儒學勃興ノ次第 ● 日光廟修築ノ次第ヲ問フ ● 將軍家光ガ幕府ト諸侯トノ關係

第六 王政維新

(一九二)

ナシテ君臣ノ如クナラシメタル次第ヲ問フ ● 寛永ノ三輔トハ誰ナルカ ● 徳川氏ノ錢制ヲ一定セシ次第ヲ記セ ● 天草一揆 ● 正雪ノ亂 ● 徳川綱吉ヲ犬公方ト稱スル所以ヲ舉ゲヨ ● 赤穂義士ノ變トハ如何 ● 享保寛政ノ治トハ如何 ● 徳川氏極盛ノ時代 ● 回向院ヲ立テタル所以如何 ● 徳川光圀ノ略傳ヲ舉ゲヨ ● 山田長正ノ事跡ヲ問フ ● 濱田彌兵衛ノ事跡ヲ舉ゲヨ ● 我が國人ノ海外ニ渡航スルモノ全ク中絶シテ長ク鎖國トナリシ所以如何 ● 宗門帳トハ如何ナルモノゾ ● 後光明天皇ノ御事跡ヲ舉ゲヨ ● 那波道圓ガ徳川頼宣ヲ諫メタルコトヲ舉ゲヨ ● 備前侯池田光政ノ事跡ヲ問フ ● 徳川氏ノ諸侯排置方及ビ其旨意ヲ問フ ● 徳川氏ノ頭將軍大名ノ鹵簿ハ如何 ● 武士ノ特權如何 ● 徳川吉宗ノ大岡忠相ヲ登用セシ所以如何 ● 大鹽ノ亂 ● 徳川氏ノ王室ニ對スル政略ハ如何 ● 慶長元和以降男女外出ノ并ノ風俗如何 ● 慶長前後ノ夜具如何 ● 絹木綿ノ足袋ハ何時頃ヨリ出來シカ ● 徳川吉宗ノ治績如何 ● 徳川中興ノ際諸藩ノ治績アルモノヲ舉ゲヨ ● 我が國洋學傳來ノ次第ヲ問フ ● 寛政ノ政トハ如何 ● 寛政ノ三助トハ誰ナルカ ● 國學復興ノ次第ヲ叙セヨ ● 林子平ノ略傳ヲ舉ゲヨ ● 高山彦九郎ノ事跡ヲ問フ ● 幕末ニ攘夷論ノ盛ナリシ所以如何 ● 米使ノ來朝及ビ假條約 ● 日章ヲ以テ日本船艦ノ旗號トセシ始ヲ問フ ● 櫻田ノ變ヲ舉ゲヨ ● 生麥事件トハ何ゾ ● 天忠黨 ● 赤間關ノ價金トハ如何 ● 長州討伐

● 王政維新トハ如何 ● 伏見ノ戦トハ如何 ● 東北ノ役ヲ述ベヨ ● 函館ノ役 ● 五條ノ御誓文

トハ如何●藩藉奉還ノ次第如何●廢藩置縣ノ次第ヲ記セ●征韓論ノ起原●佐賀ノ亂トハ如何●臺灣征伐ノ顛末及ビ當時我國ノ國情如何●臺灣征伐ニ關シ清國ニ對スル交渉事件ノ顛末ヲ問フ●朝鮮江華灣事件トハ如何●西郷隆盛退官後ノ動靜如何●西南戰爭ノ顛末ヲ略叙セヨ●琉球ノ廢藩置縣ノ顛末ヲ問フ●琉球王ヲ封シテ藩主トナスニ當リ清國トノ交渉如何●國會開設ノ大詔發布ニ至リタル略歴●明治十四五年ノ頃政界ノ狀況如何●明治十四年朝鮮ノ變トハ如何●天津條約ヲ結ビタル所以如何●明治十八年官制改革ノ大要ヲ問フ●憲法發布ノ盛典及帝國議會ノ開設●日清戰爭ノ原因如何

歷代帝王表……………(二一四)

武家世系……………(二二六)

日本歷史問答目次 終

日本歷史問答



雷山房 編纂



正朝時代

日本帝國、面積廣大、地勢等ヲ略說セヨ、

我が日本帝國ハ西細亞州ノ東方ナル太平洋中ノ島國ニシテ、北緯五十度五十六分ニ達シ、經度ハ東經百二十

一度四十五分ニ起リ、南緯百五十六度三十二分ノ間ニアリ、土地全ク温帶

氣候温和ニシテ善ク人体ニ適セリ、全國四大島

無數ノ小島トヨリ成リ、面積凡ソ二萬四千七百九十四方里アリ、山脈域内ニ連亘シ無數ノ河川其間ニ發シテ海ニ注グリ、故ニ灌溉運輸ノ便ニ富ミ地味膏腴ニシテ百穀繁生セザルナシ、沿岸出入極

(二)

メテ多ク隨ヒテ良港ニ富ミ、海運ノ便云フベカラズ、故ニ人口夙ニ繁殖シ之ヲ最近ノ統計ニ徵スルニ四千零四十五萬人ノ多キニ達セリ、

日本帝國古來政變ノ大略ヲ述ベヨ、

我が日本帝國ハ萬古一系ノ皇帝ノ統治シ玉フ所ニシテ古來未ダ嘗テ王統ノ變更ヲ見ズ是レ我國體ノ萬國ニ冠絶スル所ナリ、然レモ天皇親ラ政ヲ聽キ玉フコトアリ、聽キ玉ハザルコトアリテ其變化一ナラズ、今其大要ヲ略叙センニ、神武天皇東征シテ中原ヲ定メ、大和橿原ニ都シ玉フニ及ビ、國造縣主ヲ置キテ政令ヲ布キ、列聖相繼ギテ其職ヲ世襲セシメタルヲ以テ、漸ク封建ノ勢ヲナシ、ガ、其後千三百餘年ヲ經テ孝德天皇ノ朝ニ至リ、其封建ノ制ヲ改メテ盡ク郡縣ノ治トナセリ、是ヲ大化ノ革新ト云フ、其後許多ノ變遷ヲ經テ政權漸ク武門ニ歸シ、五百餘年ノ後、源賴朝幕府ヲ鎌倉ニ

(三)

神代ノ頃我カ國開化ノ狀態如何、

神代ノ事ハ邈トシテ今日其詳ヲ知ルニ由ナシト雖モ、古史ニ散見スル所ニヨリテ之ヲ考フルニ政治組織モ略整頓シ邑ニ長アリ國ニ君アリ更ニ之ヲ統轄スル所ノ中央政府アリタルコト誠ニ明ナリ、當時既ニ網罟ヲ結ビテ佃漁ヲ營ムアリ、舟楫ヲ作りテ河川ヲ濟ルアリ、其他田畝ヲ耕シテ米穀ヲ收メ、布帛ヲ織リテ衣服ヲ製シ、金

立テ、天下ニ號令シ家臣ヲ封シテ列侯トナスニ及ビ、純然タル封建制度トナリ、國內ノ諸侯各自ニ政事ヲナスコト凡ソ六百餘年ナリシガ、徳川幕府ノ上表シテ大政ヲ奉還スルニ及ビテ政權再ヒ皇室ニ歸セリ、是ヲ明治維新ト云フ、尋ギテ諸侯ヲ廢シテ郡縣ノ制ヲ布キ、明治二十三年全國ノ代議士ヲ召集シテ帝國議會ヲ開設スルニ及ビ儼然タル立憲帝政ヲ見ルニ至レリ、是レ我カ國古來政變ノ大略ナリ、

屬ヲ鍛鍊シテ刀劍ヲ造リタル等ノ事跡歷々之ヲ史乘ニ徵スベシ、然ラバ則チ當時既ニ原人時代ノ狀態ヲ脱シテ遙ニ文明ニ進ミタルヤ明ナリ、

(四)

三種ノ神器ノ御由來ヲ問フ、

三種ノ神器トハ八咫鏡・草薙劍・八坂瓊曲玉ノ三寶ヲ云フナリ、初メ天照大神・皇孫瓊々杵尊ヲ下シテ此國ヲ治セシメントシ玉ヒシキ、三種ノ神器ヲ授ケテ勅シテ宣ハク、豐葦原瑞穗國ハ我ガ子孫王タルベキノ地ナリ、爾行キテ之ヲ治メヨ寶祚ノ隆ナランコト天壤ト與ニ窮リナカルベシト、爾後歷世相傳ヘテ天位繼承ノ寶璽トナシ玉ヒス、今之ヲ史乘ニ徵スルニ八咫鏡ハ天照大神ノ天岩窟ニ隱レ玉ヒシキ、石凝姥命イシノコリドメノ造リシモノ、曲玉ハ同時ニ玉祖命タマノミノ造リシモノニシテ、草薙劍ハ素盞鳴尊ノ八岐大蛇ヤマタノオホナヲ斬リテ獲玉ヒタルモノナリ、

(五)

神武天皇ノ東征ヨリ御即位マデヲ略記セヨ

神武天皇ハ天照大神五世ノ孫ニシテ、皇祖瓊々杵尊ヨリ四世西邊ノ一處ナル高千穗峯ニ居玉ヘリ、天資智勇絶倫、皇兄皇子等ト謀リテ曰ク、此國ハ天神ノ我祖ニ賜ヒシ者ナルガ、曾祖以來唯西偏ニノミ居リシヲ以テ、東方未タ王澤ニ沾ハス、處々ノ酋長疆土ヲ守リテ各相陵轢シ、能ク之ヲ統一スルナシ、吾レ聞ク東方ニ美地アリト移リテ以テ之ヲ治メント、紀元前七年遂ニ日向ヲ發シ、皇兄五瀨命ト共ニ師ヲ率キ、珍彥ヲ以テ嚮導トシ、豐前ノ菟狹ニ至リ進ミテ大和ニ入ル時ニ長髓彥ハ膽駒山ノ險ヲ阨シ其勢強盛ナリ、皇兄五瀨命矢ニ當リテ薨ス、是ヨリ道ヲ轉シテ名草戸畔菟田縣主兄猾ヲ誅シ、吉野ニ入りテ八十梟帥ヲ破リ、兄磯城ヲ斫リ、背後ヨリ長髓彥ヲ攻メテ卒ニ之ヲ滅シ、又兵ヲ分チテ諸ノ土蜘蛛ヲ誅シ、盡ク大和ヲ定メタリ、是ニ於テ都ヲ橿原ニ奠メ帝位ニ即キ萬世不朽

(六)

ノ基業ヲ啓キ玉ヘリ、此年ヲ以テ我國ノ紀元元年トス、
神武天皇建國ノ制度ハ如何、

神武天皇既ニ中原ヲ平定シテ帝位ニ即カセ玉フニ及ビ功ヲ論ジ賞
ヲ行ヒ、宇麻志麻治命・道臣命・武功最モ多キヲ以テ二人ヲシテ兵事
ヲ掌ラシメ、天種子命・天富命ヲシテ左右ニ侍シテ祀政ヲ輔佐セシ
メ、其他ノ諸功臣ヲ封シテ國造縣主トナシ、地方ノ政務ニ當ラシ
メタリ、是レ其制度ノ大略ナリ、

(七)

手研耳命ノ叛亂ヲ記セ、

綏靖天皇初メ庶兄手研耳命ヲシテ庶政ヲ司ラシメシニ、之ヲ久ウ
シテ手研耳遂ニ不軌ヲ圖リケレバ、帝乃チ母兄神八井耳命ト謀
リ、其困臥スルヲ窺ヒ、神八井耳命ヲシテ之ヲ射殺セシメントセシ
ニ、命戰慄シテ矢ヲ發スルコト能ハズ、帝乃チ其弓矢ヲ奪ヒテ手
研耳ヲ射殺シ玉ヘリ、

(八)

將軍職ノ起源ヲ問フ、

紀元五百七十三年崇神天皇ノ十年、帝僻遠ノ地王化ニ霑ハサルヲ
憂ヒ、朝臣ヲ撰ミテ將軍ニ任ジ、四方ヲ巡按セシメ、命ニ順ハザ
ル者ハ兵ヲ舉ゲテ之ヲ討ゼシメント欲シ、大彥命ヲ北陸ニ、武渟
川別カスツネヲ東海ニ、吉備津彥ヲ西海ニ、丹波道主命ニハノミチノシヲ丹波ニ遣ハセリ、
之ヲ我國將軍職ノ始トス、

(九)

外國人ノ入貢歸化及ビ本邦人ト結婚ノ始如何、

紀元六百二十八年崇神天皇ノ四十五年任那(朝鮮ノ西南部)入貢ス、是レ外
國交通ノ始ナリ、其後紀元六百二十四年垂仁天皇ノ三年新羅(朝鮮ノ東部)
王ノ子天日槍來リ歸化セリ、之ヨリ來朝スル者甚々多シ又紀
元九百年代神功皇后ノ時ニハ外國人ト結婚セシ者サヘアリキト
云フ、

(一〇)

崇神天皇ヲ御肇國天皇ト稱シ奉リシ所以如何

(二)

狹穗彦ノ變

崇神天皇、心ヲ治民ニ用井玉ヒ、神祇ヲ敬ヒ仁恤ヲ施シ、又船舶ヲ作リテ漕運ニ便シ池溝ヲ開キテ水利ヲ通シ玉ヒシカバ、國大ニ治リ百姓其惠ニ浴セリ故ニ稱シテ御肇國天皇トナシ、ナリ、

紀元六百三十六年垂仁天皇ノ五年、皇后ノ兄ニ狹穗彦ト云フ者アリ、一日后ニ問ヒテ曰ク、汝夫ト兄ト孰レチカ最モ親愛スルト、皇后素ヨリ親ニ篤キヲ以テ答フ、狹穗彦是ニ於テ已ノ非望ヲ語リ、ヒ首ヲ皇后ニ授ケテ帝ヲ刺サンコトヲ求ム、一日帝皇后ノ膝ヲ枕ニシテ寢ネシニ、皇后兄ノ言ヲ思ヒ轉々悲哀ニ堪ヘズ、淚垂レテ龍顏ヲ濕セリ帝醒メテ之ヲ覺リ言ヲ妖夢ニ託シ之ヲ后ニ糺セリ、皇后實ヲ以テ告ゲ、レバ、帝即チ兵ヲ出シテ狹穗彦ヲ討シム、皇后曰ク吾兄ヲ失ハ、何ノ面目アリテ復々天下ニ莅マント、皇子ヲ抱キテ狹穗彦ノ營ニ投セリ、帝八綱田ヲシテ火ヲ營ニ放タシメケ

(三)

殉死禁制ノ次第ヲ問フ、

レバ、皇后皇子ヲ營外ニ送り出シテ曰ク、妾カ皇子ヲ奉シテ此ニ在ル者ハ兄ノ誅ヲ寬クセンヲ欲スレバナリ、今ハ則チ得ズ因リテ之ヲ奉還スト、遂ニ兄ト共ニ焚死セリ、

古代ハ殉死トテ死人ヲ葬ルトキ其生前親近ナリシ者ヲモ併セ埋ムル習アリシガ、紀元六百五十九年垂仁天皇ノ御弟倭彦命薨去アリシ時、其習ニ從ヒテ近臣數十人ヲ併セ葬リシニ數日ノ間死セズシテ呻吟スル聲絶エザリシカバ、天皇大ニ之ヲ憐ミ、翌年皇后日葉酸媛崩御ノ際ニハ、天皇群臣ヲシテ之ヲ議セシメシニ、野見宿禰埴輪(埴土ヲ以テ人馬ノ形ヲ作レル者)ヲ以テ之ニ代ヘント請フ帝大ニ之ヲ嘉ミシ立テ、永制トナス、

(三)

相撲ノ濫賜ヲ舉ゲヨ、

紀元六百年代垂仁天皇ノ時大和當麻^{タヘマ}ノ邑ニ當麻^{タヘマ}蹶速ト云フ者ア

リ、常ニ其勇ヲ誇リ以爲ラク天下膂力己ニ比スル者ナシト、朝廷廣ク其對手ヲ求メテ出雲ニ野見宿禰ヲ得タリ乃チ御前ニ相撲タシム、宿禰踢テ蹶速ノ肋骨ヲ折キ之ヲ斃セリ、之ヲ相撲ノ技ノ始トス、

(四) 日本武尊ノ武功、

紀元七百年代ノ頃熊襲(今ノ大隅薩摩邊ノ地ナリ)猖獗屢々亂ヲ起ス、景行帝皇子小碓尊ニ命ジテ之ヲ討タシム、尊女装シテ匕首ヲ懷ニシ、交ツテ婢妾ノ中ニ入ル、賊魁取石鹿文見トリヌカヤテ之ヲ悦ビ、延テ座側ニ置キ杯ヲ舉ゲテ戯狎ス、夜闌ニシテ賊魁醉臥ス、尊乃チ劍ヲ拔キ之ヲ刺ス、賊魁驚キ其勇ヲ嘆賞シテ曰ク、吾嘗テ強勇ナル者ヲ見シニ未ダ皇子ノ若キ者アラス、吾賤陋ト雖モ謹ミテ嘉號ヲ奉リ、日本武尊ト申サント、尊時ニ年十六、之ヨリ稱シテ日本武尊ト云フ、後東夷又反シタル時、尊又將軍ノ任ヲ帶ビ、伊勢ヲ經テ神宮ニ謁シ、

(五) 古代ノ政治組織及ビ租税法如何、

古代ノ政治ハ極メテ簡ニシテ所謂無爲ニシテ而シテ化ストイフ有様ニシテ、神武天皇ノ時ニハ、國造縣主ヲ置キ、以テ地方ノ政務ヲ司リ、朝廷ニハ臣連等ヲ置キテ萬機ヲ補弼セシム、而シテ其國縣分界ノ形狀今知ルベカラズ、紀元七百九十五年成務天皇詔シ

叢雲劍及ヒ燧袋ヲ得テ駿河ニ至リシニ、土賊伴リ降りテ尊ヲ遊獵ニ誘ヒ、火ヲ放チテ原野ヲ燒キケレバ、尊乃チ劍ヲ拔キテ草ヲ薙ギ鑽リ之ヲ逆ヘ燒キテ悉ク賊徒ヲ誅滅セリ、是ヨリ叢雲劍ヲ改メテ草薙劍ト云フ、尊更ニ進ミテ相摸ヨリ上總ニ至リ、陸奥ノ境ニ入ル、皇軍向フ所土賊皆風ヲ望ミテ歸降シ、東北悉ク平グ、即チ上野信濃等ノ諸酋ヲ巡撫シ碓氷嶺ヲ越エテ尾張ニ至リ、居ルトコ踰月、膽吹山ノ賊ヲ討チテ疾ヲ得、伊勢ノ能褒野ニ薨ゼリ、時ニ年三十二、

テ山河ヲ界シ國縣ヲ分チ、阡陌ニ隨ヒテ邑里ヲ定メ、全國ヲ百二十餘國、千二百餘邑ニ分チ、一國毎ニ一人ノ國造ヲ置キ、一邑毎ニ一人ノ稻置ヲ置ケリ、一人ノ稻置ハ民戶ノ八十ヲ治メ、一人ノ國造ハ一人ノ稻置ヲ督シ、以テ地方ノ政務ヲ處理セシメタリ、又古代ハ或ハ池ヲ堀リ或ハ溝ヲ鑿チ、朝廷大ニ農業ヲ勸メ原野ノ開墾ヲ獎勵シタリ、貢租ハ崇神帝ノ時ヨリ早ク其制行ハレ、男ニハユハツ弭ミツギノ調、女ニハタナス手末ノ調ト稱シテ、獸角布帛ノ類ヲ獻セシメタリ、

(六)

神功皇后ノ三韓征伐ヲ舉ゲヨ、仲哀天皇ノ時熊襲復々叛ス、天皇皇后ト共ニ親テ軍ヲ帥ヰテ之ヲ征シ、半途ニシテ筑紫ノ香椎宮ニ崩セリ、是ニ於テ(紀元八百五十九年)皇后喪ヲ秘シ、男裝シテ新羅ニ航シ、更ニ高麗・百濟ヲ征服シ、朝貢ヲ約シテ歸リ玉ヘリ、抑モ皇后ノ新羅ヲ征スルヤ、其

(七)

神功皇后ノ三韓征服ハ我國ニ如何ナル影響ヲ及ボシ、カ、神功皇后ノ三韓征服以前ニアリテハ熊襲ノ輻強制シ難キアリ、東夷ノ叛服常ナキアリテ、隨ツテ中央政府ノ權力モ未ダ遠キニ及バザリシガ、三韓征服以降ニ至リテハ、熊襲ハ其後援ヲ失ヒタルヲ以テ復叛スルコト能ハズ、爲メニ中央政府漸ク鞏固ニシテ大ニ施政上ノ便益ヲ増セリ、是レ其結果ナリ、三韓征服以前ニアリテハ我が國ノ文化尙ホ未ダ開ケザリシガ、一旦交通ノ道開カレテヨリ、應神天皇ノ朝論語千字文ノ貢獻アリ我が國ノ文教是ヨリ開ケタリ、其他陰ニ陽ニ彼ノ文化(工藝技術)ヲ輸入シ來リテ我が國ノ裨益ヲナシタルコト蓋シ鮮少ナラザルベシ、是レ皆征服ノ結果ニ

(元)

アラザルハナシ、

武内宿禰ノ事蹟ヲ舉ゲヨ、

武内宿禰ハ屋主忍男武雄心命ノ子ナリ、景行天皇ノ内命ヲ奉ジ

テ單身東北地方ヲ跋涉シ、其風土ヲ視察シテ東夷ノ征討スベキコ

トヲ奏セリ、天皇乃チ皇子日本武尊ヲシテ東夷ヲ征セシメタリ、

仲哀天皇ノ内隨ツテ熊襲ヲ征シ、帝ノ崩ズルニ及ビ、神功皇后ニ

隨ツテ三韓ヲ征シ、功最モ多シ應神天皇ノ内勅ヲ奉ジテ筑紫ヲ監

察セシニ、弟甘美ノ讒スル所トナリ、殆ント誅戮セラレントセシ

ガ、壹岐眞根子ト云フモノ、容貌甚々宿禰ニ類シ、宿禰ノ罪ナ

クシテ誅セラル、チ悲ミ、自殺シテ天使ヲ欺キ、以テ宿禰ヲ救ヒ

シカバ宿禰竊ニ逃レテ闕ニ詣リ其冤ヲ訴ヘタリ、是ニ於テ甘美ノ

罪暴露シ宿禰ノ忠誠益顯ハレタリ、宿禰ハ景行・成務・仲哀・神功

應神・仁徳ノ六期ニ歴事シテ國家ノ重事ニ任ジ、三百餘歳ノ壽ヲ

保チテ薨ゼリト云フ、

(元)

任那日本府ノ興廢ヲ述ベヨ、

神后皇后己ニ三韓ヲ征服シテ之ヲ内屬セシメタリト雖モ彼地ハ洋

海渺茫ノ外ニ在リテ交通便ナラズ、故ニ韓地ニハ官家ト云ヘル者

ヲ置キ、任那ニハ日本府ト云ヘルヲ開キ國司ヲ置ケリ、然モ彼特

ニ我國ニ恩ヲ蒙ルニアラズ、唯一時力足ラザルヲ以テ伴リ降リ

タルノミ、故ニ其後未ダ幾クナラズシテ謀叛相繼ギ、雄略天皇ノ

時ニハ任那ノ國司タリシ田狹其土ニ據リテ叛シ、新羅高麗ノ二國

モ亦之ニ乘ジテ亂ヲ作セリ、下リテ紀元一千二百二十二年欽明天

皇ノ時ニハ二國相連リテ百濟ヲ攻メ、任那ニ來リテ官府ヲ毀テリ、

是ヨリ韓地殆ント我國ノ羈絆ヲ脱セルガ如シ、

(三)

儒教傳來ノ始如何、

紀元九百四十五年應神天皇ノ時、百濟ノ使阿直岐、易經・論語・山

(三)

海經等ヲ貢ス、阿直岐能ク經典ニ通シケレバ帝皇子稚郎子ワカイヲツコナシテ之ヲ師トシ學ハシメタリ、帝之ニ問ウテ曰ク、汝カ國ノ博士ニ汝ニ勝レル者アリヤト、阿直岐王仁ワニヲ以テ對フ乃チ之ヲ召ス、明年王仁論語及ヒ千字文ヲ以テ來ル、辰孫王亦至ル辰孫王ハ又文學ヲ以テ名アリ、帝並ニ以テ皇子ノ師トス、此ヨリ我國文教興ル、上古ノ文字及ビ史官ノ起源ヲ問フ、

古語拾遺等ニ依レバ、我カ國太古文字ナシト云フヲ是トス蓋シ一般通用ノ文字アルハ、應仁天皇ノ朝百濟ヨリ經書等ヲ齎シタル片ニ始リシナリ、其後紀元一千六十三年履仲天皇四年諸國ニ史官ヲ置キ紀錄ヲ掌ラシムルノ記事アリ、是レ史官ノ始ナリ

(三)

稚郎子ノ讓位ノ次第ヲ叙セヨ、

應神天皇季子稚郎子ヲ愛スルノ故ヲ以テ、特ニ之ヲ立テ、皇太子トナシ、長子大鷦鷯オホササギ大山守ヲシテ之ヲ輔ケシメタリ、然ルニ應神

天皇崩ズルニ及ンデ(元九百七十年)皇子大山守謀反セシカバ大鷦鷯密ニ太子ニ告ゲテ之ヲ誅セシメタリ、斯クテ皇太子稚郎子ハ大山守ヲ誅シテ後、自ラ避ケテ菟道ニ之キ、位ヲ大鷦鷯ニ讓リテ曰ク、皇兄仁孝遠ク聞ユ、宜シク天下ノ君タルヘシ、且ツ昆ハ上ニシテ弟ハ下、聖ハ君ニシテ愚ハ臣、古今ノ常ナリト、大鷦鷯辭シテ曰ク、先帝謂ヘラク天位ハ一日モ空ウスベカラズ、故ニ預メ明德ヲ選ミ之ヲ定メ給ヘリ、我レ不敏ト雖モ何ソ先帝ノ命ニ違ハンヤト、互ニ相讓リテ位ヲ空ウスルコト二年、(紀元九百七十一年ヨリ全九百七十二年マテ)民ノ貢獻スル者適歸スル所ヲ知ラズ、大鷦鷯志ヲ執ル益々確シ、稚郎子其奪フベカラザルヲ知リテ遂ニ自殺シタリ、大鷦鷯馳セ至リテ慟哭シ、猶ホ帝位ニ即カザリシカバ、王仁梅花ノ歌ヲ作り諷シテ曰ク、浪花津にさくやこの花冬こもり、今を春べと咲くやこのはなト、大鷦鷯遂ニ位ニ即ク、是レ仁

德天皇ナリ、

(三) 仁德天皇ノ仁德ヲ述ベヨ、

仁德天皇難波ノ高津宮ニアリ、一日高樓ニ登リ四方ヲ望ンテ人烟ノ疎ナルヲ見テ以爲ラク民皆貧ナリト、即チ課稅ヲ蠲シコト六年、宮垣壞敗スレテ修メズ、屋簷穿漏スレテ葺カズ、爾再來風雨時ニ順ヒ、五穀豐饒百姓殷富ナリ、天皇復タ高樓ニ登リ人烟ノ盛ニ起ルヲ見テ喜ビテ曰ク、朕已ニ富メリト、是ヨリ先キ人民屢、宮殿ヲ修理セント請ヒシニ、皆許サマリシガ、是ニ至リテ之ヲ許シケレバ、老幼男女集リ來リテ材ヲ運ビ土ヲ擔ヒ、日ナラズシテ工ヲ竣ヘタリ、後藤原時平其德ヲ贊シテ、たかきやに登りて見ればけむりたつ、民のかまどは賑ひにけりト歌ヘリ、

(四) 允恭天皇姓氏ノ審判ナナシ、所以如何、

允恭天皇ノ朝、姓氏ヲ詐冒スルモノ多ク、從ツテ其爭訟モ頻繁ナ

リシカバ、天皇乃チ味樞丘ニ諸族ヲ集メテ神ニ盟ヒ、探湯トテ熱湯ヲ探ラシメ、其傷ツクト否ラザルトニヨリテ眞偽曲直ヲ審判セリ、(探湯ハ當時行ハレシ裁判法)而シテ其斯ク姓氏ヲ詐ル所以ハ、神武天皇中國ヲ平定シ功臣ヲ賞セシヨリ、後チ孝德天皇ノ大化改革マデ凡ソ一千三百年間ハ、所謂封建政治ニ似テ、上ハ中央政府ノ官職タル臣連ヨリ、下ハ地方官タル國造縣主ニ至ルマデ、皆各居地ヲ定メ官職ヲ世々ニセリ、故ニ中臣連ナカトミノムラジ(中臣ハ氏ニシテ代々祭祀ノ事ヲ掌ル、連ハ姓ナリ)カミ大伴連オホトモ(大伴ハ氏代々武官ニ任セラシメ、連ハ其姓ナリ)カシハチノオミ膳臣カシハチノオミ(膳ハ氏代々帝ノ御食膳ヲ司ル、臣ハ其姓)サカベノキミ酒部公サカベノキミ(酒部ハ氏代々天皇供御ノ酒ヲ作ル、公ハ姓ナリ)フミンノオホト文首フミンノオホト(文ハ氏ナリ、代々朝廷ノ記録ヲ掌ル、首ハ其姓)等ノ姓氏アリテ、職即チ姓、姓即チ職トナリ、甲職甲姓ナラザルベカラズ、乙姓ノ乙職ニ任セラルト云フ有様ナルヲ以テ、姓ヲ争フハ是レ職權ヲ

(五)

氏族三別ノ制如何、
爭フナリ、故ニ互ニ姓氏ヲ詐冒スルニ至ルハ亦自然ノ勢ナリトス、
是レ姓氏ノ詐冒ヲ正サマルベカラザル所以ナリ、

(六)

古代ニハ神別・皇別・蕃別トテ氏族ヲ三ツニ區別シ、人皆家系ヲ重シ
シタリ、而シテ神別トハ神代諸神ノ裔ヲ云ヒ、皇別トハ神武天皇
以下歷代諸帝ノ皇族ニシテ、蕃別トハ外國歸化人ノ子孫ナリ、
肩輪王弒逆ノ顛末如何、

紀元一千百十六年安康天皇ノ三年肩輪王帝ヲ弒セリ、初メ帝大草
香皇子ノ妹幡梭ハハヒヲ聘シテ皇弟大泊瀬オホハツセノ妃トナサント欲セシニ、使
者詐リテ大草香命ヲ奉ゼスト告ゲ、レバ、帝大ニ怒リ直ニ兵ヲ遣
ハシテ之ヲ殺シ、乃チ幡梭ヲ取リテ大泊瀬ノ妃トナシ、且ツ大草
香ノ妃ヲ納レテ遂ニ皇后トナセリ、后嘗テ大草香ノ家ニアル時、
肩輪ヲ生メリ、故ニ之ヲ宮中ニ養ヒヌ、帝一日山宮ニ幸セシ時、

(七)

窃ニ后ニ語リテ曰ク、朕甚ダ汝ヲ愛スト雖凡心常ニ肩輪ヲ畏ルト、
肩輪王時ニ年七歳、樓下ニ此言ヲ聞キ、帝ノ醉臥ヲ伺ヒ刺シテ之
弒セリ、皇弟大泊瀬變ヲ聞キ、兵ヲ率ヰテ來リシカバ、肩輪遁レ
テ大臣圓ツツラノ家ニ匿レ皇弟ニ謂テ曰ク、反ニアラズ父ノ讎ヲ復シタ
ルノミト、皇弟圍ミテ其弟ヲ燒キ肩輪及ビ圓等ヲ殺シ帝位ニ即ク、
是チ雄略天皇トナス、

清寧天皇ノ億計ホケチケ・弘計チケケニ皇子ヲ迎ヘタル次第ヲ記セ、

清寧天皇即位ノ三年、億計王ヲ立テ、皇太子トナシ、弘計王ヲ以
テ皇子トナシ玉ヒヌ、二王ハ履仲天皇ノ孫ニシテ、市邊押磐皇子イチノベオシハ
ノ子ナリ、初メ雄略天皇ノ押磐皇子ヲ殺スヤ、二王難ヲ播磨ニ避
ケ縮見屯倉首忍海部細目シヅミノミヤケンオヒトオシミベノホツメノ家僮トナル會々播磨ノ國守來目部小
楯事タテアリテ郡ニ至リ細目ノ家ニ宴セリ、弘計乃チ億計ニ告ゲテ
曰ク我等二人難ヲ避ケ潛匿スルコト已ニ久シ今當ニ告グルニ情實

(六)

佛教渡來ノ次第、

佛教ノ始メテ我國ニ渡來シタルハ、紀元一千八百八十一年梁人司馬達等ノ歸化セシ時ニアリト云フ、然レモ未ダ充分盛運ニ向ハズ、然ルニ紀元一千二百十二年欽明天皇ノ時ニ及ンテ、百濟・釋迦佛ノ金像及ヒ經論幡蓋等ヲ獻シ、附表シテ盛ニ佛ノ功德ヲ稱讚シテ曰

ク、是法諸法ノ中ニ於テ最モ殊勝ナリ、且ツ解シ難ク入り難クシテ周公孔子ト雖モ尙知ル能ハズ、此法能ク無量無邊ノ福德果報ヲ生ズ、祈願請ニ依テ乏缺スル所ナシト、帝廟議ニ附シ其信ズベキヤ否ヤヲ諮フ、蘇我稻目ノ西方諸國(支那印度地方ヲ指ス也)皆之ヲ信ズルノ故ヲ以テ亦之ヲ禮セント乞フ、物部尾輿・中臣勝海之ニ反シテ曰ク我が國古來社稷ノ神アリ、今又蕃神ヲ禮セバ必ス國神ノ譴怒ヲ蒙ラント、帝之ヲ可トシ、佛像ヲ稻目ニ賜フ、稻目向原寺(稻目カ邸ナリシヲ伽藍ニ改築セシ者)ニ之ヲ奉ズ、是歲諸國大ニ疫シケレバ、尾輿勝海等是レ國神ノ祟タル所トナシ、奏シテ佛像ヲ浪速ノ堀江ニ投シ、且ツ向原寺ヲ燒棄セリ、次ニ紀元一千二百三十七年敏達天皇ノ時、百濟王佛經若干卷、律師、禪師、比丘尼、咒禁師、造寺匠、佛工ヲ獻ズ、其後七年ヲ經テ稻目ノ子馬子復タ百濟ノ佛像二軀ヲ得、殿ヲ造リテ之ヲ安ゾズ、明年又大ニ

(元)

佛教以前ノ宗教ハ如何、

我國ニハ古來神ヲ信ズルコト甚シク、凡テ神ニ乞ヒテ幸福ヲ求メ神ニ祈リテ禍害ヲ禳ヒ、探湯トテ裁判ヲ神威ニ托スルニ至レリ、應仁天皇ノ朝ニ及ビ、漢學傳來セシヨリ儒教主義稍行ハレタリ、然ルニ共ニ君臣ノ分ヲ明ニシ忠厚ヲ重ンジタリシガ、佛教ハ一切

瘦シケレバ、尾興ノ子守屋奏シテ佛寺ヲ毀テ佛像ヲ江ニ投シ僧尼

ヲ還俗セシメタリ、馬子復タ強請シテ我病佛ニ祈ラズバ癒エヌト

云フ、帝乃チ曰ク汝獨リ之ヲ爲セ、他人ヲ惑ハスヲ勿レト、馬子

乃チ盛ニ寺院ヲ起シ之ヲ禮ス、之ヨリ用明天皇ノ時(紀元一千二

百四十七年)馬子帝ノ病ヲ佛ニ祈ラント請フ、守屋復タ之ヲ阻ム、

時ニ厩戸皇子アリ佛ヲ信シ馬子ヲ助ケシカバ、馬子共ニ謀リテ遂

ニ守屋勝海ヲ殺セリ是ヨリ推古帝ノ時ニ至リテ寺四十六所、僧八

百十六人、尼五百十九人アリ、佛教大ニ行ハル、

(三)

馬子ノ弑逆、

平等主 ヲ唱ヘ未來ノ快樂ヲ説クヲ以テ稍其体面ヲ更メタリ、

紀元一千二百年代馬子既ニ、物部守屋・中臣勝海等ヲ殺シテヨリ、

下ニ佛ヲ非トスル者ナク、上ニハ厩戸皇子ノ之ヲ輔クルアリテ威

權甚タ盛ニ毫モ憚ル所ナシ、崇峻天皇甚タ之ヲ惡ミ、常ニ之ヲ除

カンコトヲ謀リ玉ヘリ、或時山猪ヲ獻スル者アリケレバ帝之ヲ覽

テ曰ク、何ノ時カ此猪ノ如ク朕カ惡ム所ノ者ノ頸ヲ刎ント、馬子之

ヲ聞キ、東漢直駒アツマンノアキノアヘコトヲ遣シ帝ヲ内寢ニ刺サシメ、大ニ之ヲ賞セ

リ、厩戸皇子之ヲ知り、敢テ咎メズシテ曰ク、是レ過去ノ報ナリ、

吾嘗テ傷害ノ相アルヲ見奉レリト、後事アリテ馬子自ラ駒ヲ射殺

セリ、

(三)

冠位及憲法制定ノ起原如何、

紀元一千四百六十三年推古天皇ノ時、冠位ヲ定メテ大德・小德・大

(三)

仁・小仁・大禮・小禮・大信・小信・大義・小義・大智・小智ノ十二階トナシ、並ニ當色ノ絶チ以テ之ヲ繼ヒ、頂ハ撮ツテ總テ袋ノ如クシ、各縁ヲ着ク、元日ハ特ニ髻華ヲ著ケテ入朝ス、(當色トハ如何ナル色カ今知ルベカラズ、一説ニ紫赤青紺黒綠ヲ深淺十二等ニ分チシナラント云フ、又推古天皇十九年五月ノ制ニ、髻華ハ大徳小徳並ニ金大仁小仁ハ豹尾大禮以下ハ鳥尾ヲ用ウベシトアリ) 上古已ニ冠ヲ用ウト雖凡之ニ依テ官位ヲ區別スルハ蓋シ之ヲ始トス、其明年憲法十七條ヲ定ム聖徳太子(厩戸皇子)ノ撰スル所ナリ、是レヲ本邦制法ノ起源トス、

蘇我氏ノ專横ナリシ所以如何、

蘇我氏ノ遠祖ヲ武内宿禰トナス、武内ノ三子蘇我石河督始テ蘇我ヲ稱ス、世々朝政ニ與レリ、然凡稍政權ヲ專ニスルニ至リシハ稻目ヲ始トス、稻目ハ宣化欽明ノ二朝ニ仕ヘテ大臣トナリ、其子馬子

(三)

之ニ嗣ギ、敏達帝ニ仕ヘタリシガ、用明天皇ニ至リテハ己レ外戚(帝ノ母ハ稻目ノ女)タルノ故ヲ以テ益々驕傲ナリ、然凡物部氏アリ猶ホ意ヲ擅ニスルコト能ハザルヲ以テ遂ニ之ヲ亡シ、崇峻天皇ノ已チ疾ムヲ聞クヤ直ニ之ヲ弑シ、其姪推古天皇ヲ擁立シテ自黨ノ厩戸皇子ヲ太子トシ、政ヲ攝セシメ、太子薨シテヨリ政ヲ專ニス、而テ其子蝦夷之ニ嗣ギ、舒明皇極兩皇ヲ擁立シ自ラ皇帝ニ擬シ、僭越度ナシ、入鹿代リテ職ヲ襲ギ皇極ノ皇孫山背王ノ威名ヲ忌ミ之ヲ弑センコトヲ謀リ、遂ニ王ヲシテ縊死セシムルニ至ル、蘇我氏ノ暴横此ニ至レルハ、遠祖以來ノ權勢ヲ恃ムニ依ルト雖モ、亦幾分カ一切平等ノ主義ヲ教ウル佛教ヲ頼ムニ依ラズンバアラザルナリ、

外國通信ノ始ヲ舉ゲヨ、

紀元一千二百六十七年推古天皇ノ十五年七月、大禮小野妹子ヲシ

(四)

海外留學生ノ起源、

テ國書ヲ齎ラシ隋國ニ使セシム、其辭ニ曰ク日出處天子書ヲ日沒處天子ニ致ス恙ナキヤト、隋人妹子ヲ呼テ蘇因高ト云フ蓋シ此行ヲ以テ我邦支那ニ通信スルノ始トス、

紀元一千二百六十八年推古天皇ノ十六年八月、小野妹子ヲ大使トシ、難波雄成ヲ以テ小使トシ、鞍作ノ福利ヲ通辭トシテ隋使斐世清等ヲ送ラシム、學生等八人之ニ從フ、紀元一千二百八十二年同天皇ノ三十年七月、學僧惠齊等新羅使ニ從ウテ唐ヨリ還リ奏シテ曰ク、學生ノ唐ニ在ル者皆己ニ器トナレリ、願クハコレヲ召シ還セト、爾來學生ノ唐ニ行ク者甚タ多ク、大ニ我國ノ文明ヲ進メ風俗ヲ改メタリ、

(五)

入鹿ノ伏誅ヲ略記セヨ、

皇極天皇ノ時中臣鎌子ト云フ者アリ、蘇我氏ノ專横ヲ見ルニ忍ビ

ズ、常ニ以爲ラク入鹿ノ心ハ路人モ之ヲ知ルト、乃チ圖リテ之ヲ誅セント欲シ、皇弟輕ニ結ビ、皇子中大兄ニ謀ラント欲セシガ、未ダ其機ヲ得ズ、會法興寺ニ蹴鞠アリ、皇子靴脫セシヲ、鎌子捧ゲテ皇子ニ上リ因リテ相親近スルヲ得、常ニ言ヲ就學ニ託シ、車中ニ相密議シ、皇子ヲシテ蘇我石川麿ト婚ヲ結バシメ、又佐伯子麿等ヲ薦ム、同帝四年三韓ノ入貢スルアリ、皇子等以爲ラク好機會ナリト、即チ謀ヲ定メ石川麿ヲシテ入りテ表文ヲ讀マシメ、皇子親ラ長槍ヲ執リテ殿側ニ立チ、鎌子弓矢ヲ持チテ之ニ侍ス、石川麿將ニ表文ヲ讀盡サントスルモ、子麿畏縮シテ發セズ、石川麿モ亦手戰キ聲顛ヘリ、入鹿怪ミテ之ヲ問フ、石川麿曰ク天威咫尺覺エズ乃チ爾リト、皇子其機ヲ失ハンコトヲ恐レ、直ニ入りテ入鹿ヲ斫ル、子麿等之ニ應シテ進ミ、遂ニ之ヲ大極殿ニ誅ス、皇子乃チ又巨勢德太古ヲ遣シ、蝦夷等ヲ誅セシメ蘇我氏亡ブ、

(三)

調伊企難ノ節ヲ記セ、

欽明天皇ノ二十三年新羅・任那ヲ侵シテ我が官府ヲ毀チシカバ大將軍紀男麻呂・副將軍河邊瓊岳^ニ遣ハシテ新羅ヲ討タシメタリ、時ニ我が軍利アラズ、軍人伊企難・敵ノ爲メニ生擒セラレ勸誘ヲ受クルモ拒絶シテ降ラザリシカバ敵乃チ刀ヲ拔キテ之ニ逼リ、日本ノ將我が脛肉ヲ斃ヘト云ヘト、命ジケレバ、伊企難大ニ呼ビテ曰ク新羅王我が脛肉ヲ斃ヘト、終ニ敵ノ殺ス所トナリヌ、

(三)

我が國古代ノ服裝如何、

我が國古代ノ服裝ハ今之ヲ詳ニシ難シト雖モ衣服ハ筒袖ニシテ其長サ膝ニ達シ、其下ニハはかまト稱シテ股引ノ如キモノヲ穿チ、帶ヲ以テ其上ヲ結び、左衽ナシタルモノ、如シ、又其裝飾ニハ曲玉・管玉ノ類ヲ貫キテ之ヲ胸部ニ繫ケタリ、應神天皇ノ頃ヨリからころもト稱シテ袖ヤ、廣キ衣服先ヅ貴族間ニ行ハレ、漸ク一

(三)

古代頭髮ハ如何ニセシカ、

般人民ノ間ニ行ハレ、今日現存スル日本服ノ根本トナレリ、古代男子ノ髮ハ之ヲ分チテ二束トナシ頭ノ兩側ニ輪ヲ作りテ之ヲみづらト云ヒ、女子ノ髮ハ之ヲ結ブコトナク皆長ク背後ニ垂レタリ、當時ハ頭髮ヲ截リ鬚髻ヲ剃ルコトナカリシト云フ、

(三)

古代ノ家屋ハ如何、

極メテ上代ノ頃ニアリテハ家屋ト云フモノナク大抵穴居ノ生活ヲ營ミシナラント雖モ其後民衆ノ増スニ隨ヒテ人造ノ家屋出テ來レリ(神代ノ頃既ニ高貴ノ人ハ人造ノ家屋ニ住メリ)其制地ヲ堀リテ柱ヲ樹テ、棟桁ヲ葛藤等ヲ以テ結び固メ、屋根ハ萱ニテ葺キ、其上ニかつをぎト稱スル木ヲ併べ兩端ニひぎト稱スル交叉セル木片ヲ置キテ屋根ノ破損ヲ防ゲリ、此制今ハ神社ニ殘レリ、應神天皇以後外國(朝鮮)ノ交通頻繁ナルニ及ビ海外ノ建築法ヲ用井柱ヲ土

(四)

中ニ埋メズシテ土臺石ノ上ニ置キ屋根ヲ葺クニ瓦ヲ用ウルコト始マレリ、

大化改革ノ大略ヲ舉ゲヨ、

紀元一千三百五年孝德天皇即位ノ元年、始メテ元ヲ建テ、大化ト云ヒ、唐國ノ制度ヲ摸倣シテ新政ヲ行ハント欲シ、先ツ鐘匱ヲ朝ニ設ケ、民ノ冤枉アル者ヲシテ牒ヲ投シ鐘ヲ撞カシメ以テ訟ヲ直ウシ、使ヲ諸國ニ遣ハシテ戶口ヲ調査シ以テ兼併ノ路ヲ杜カシメ、又郡國ノ兵器ヲ收メシメタリ、而シテ大化二年ニ至リ令ヲ發シ前代傳フル所ノ標代ノ民(標代ノ民トハ天皇ノ名ヲ後世ニ傳ヘン爲メ其名ヲ與ヘラレタル一部ノ民)處々ノ屯倉ヲ廢シ、臣連國造・稻置等有スル所ノ部曲ノ民(部曲ノ民トハ即チ臣連等ノ家人ナリ)ヲ收メ、大夫以上ニハ食封ヲ給ヒ、官人百姓ニハ布帛ヲ賜ヒ、全國ヲ六百餘國六十餘郡一萬三千餘鄉ニ分チ、一鄉ノ民

戶ハ之ヲ五十戸ト定メ、郡ヲ大中小ニ分チ、大領・小領・主政・主張ヲ置キ、鄉ニ鄉長一人郡ニ郡司一人國ニ國司一人ヲ任シ、郡ハ鄉ヲ統ベ國ハ郡ヲ統ヘ、以テ各其政ヲナサシメ、朝廷ニハ臣連等ノ職ヲ廢シテ新ニ左右大臣内臣ヲ置キ以テ中央ノ政務ヲ執ラシメタリ、斯クテ全國ヲ公民公地トナシ、男子ニハ二段ノ田地、女子ニハ其三分ニ給シテ、毎年一段毎ニ二束二把(大凡二十五分一ノ租)ノ租ヲ收メ、尙調トテ絹施貲布鹽油麻蓼鹿角烏羽魚介菜藻等ヲ徵集シ、兵役ニハ全國ノ壯丁(二十一歳ヨリ六十歳)三分一ヲ年二十日ト定メテ之ヲ出サシメ、關塞斥候防人等ノ職ニ充テ、若シ出ヅル能ハザル者ニハ布ヲ出サシメ、又庸ノ一種トシテ郡司ノ姉妹子女ヲ納レテ采女女官トナス、又大化五年(紀元一千三百九年)ニハ中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮内ノ八省神祇官・太政官ノ二廳ヲ置キ、冠位ノ制ヲ改定セリ、是レ非常ノ大改革ニシ

(四)

テ其旨トスル所ハ中央集權ノ制ヲ布キテ全國畫一ノ政ヲ施シ門閥
封建ノ弊制ヲ打破スルニアリ、

大化革新以後鎌倉時代ニ至ルマデ政權ノ所在如何、

大化革新ノ當時ニ在リテハ紀綱大ニ振ヒ政權全ク皇室ニアリシト
雖モ、藤原氏ノ權ヲ專ラニスルニ及ビテハ政令地方ニ行ハレズ、
地方ノ豪族各々權ヲ恣ニシ在朝ノ官人ハ只尸位ニ坐スルノミ、斯
クテ政權漸ク武人ニ歸シ、藤原氏皇室ト共ニ衰ヘ源賴朝、府ヲ鎌
倉ニ開キテ天下ニ號令スルニ及ビテハ政權ノ名實共ニ武門ノ有ニ
歸セリ、

(三)

藤原鎌足ノ略傳ヲ擧ゲヨ、

藤原鎌足ハ天兒屋根命ノ後裔ニシテ藤原氏ノ祖ナリ、鎌足・蘇我
蝦夷父子ノ專横ヲ見テ慨然トシテ匡濟ノ意アリ、竊ニ宗室諸皇子
ヲ見ルニ中大兄皇子(天智天皇)ニ如クモノナシ、乃チ其志ヲ告ゲ

(四)

壬申ノ亂ノ顛末如何、

紀元一千三百三十一年九月天智天皇不豫ナリ、天皇皇弟大海人
皇子ヲ召シテ後事ヲ囑ス、大海人帝ノ大友皇子ヲ愛スルヲ知ルヲ
以テ固辭シテ僧トナリ吉野ニ入ル、時人曰ク是レ虎ヲ野ニ放ツナ

ント欲スルモ間ヲ得ズ、一日與ニ鞠ヲ法興寺ニ蹴シニ、會々皇子
ノ靴脫セシカバ鎌足跪キテ之ヲ奉リ、皇子モ亦跪キテ之ヲ受ケ、
是ヨリ親近スルヲ得テ肺肝ヲ吐露セリ、然レモ深ク外議ヲ恐レ、
學ヲ南淵先生ニ受クルニ託シテ車中ニ密議ヲ凝ラシ、蘇我石川
磨佐伯子磨等ヲ以テ援トナシ、三韓進貢ノ機ニ乘ジテ遂ニ蝦夷
父子ヲ斃シテ蘇我氏ヲ亡シ、寶祚ヲ富岳ノ安キニ置キ奉レリ鎌足
マダ中大兄ト議シテ大化ノ新政ヲ斷行シ功ヲ以テ大織冠ニ叙セラ
レヌ、天智天皇即位ノ二年十月鎌足病ミテ薨ズ、薨ズルニ望ミテ
大織冠ニ叙シ姓藤原ヲ賜ハル、

リト、同十月帝大友皇子ヲ立テ、皇太子トス、同十二月帝崩シ皇太子立ツ、是レ弘文天皇ナリ、同天皇即位ノ元年帝大海人皇子潜ニ覬覦ヲ抱クヲ聞キテ大ニ驚キ窃ニ之カ備ヲナサシム、大海人之ヲ知リテ曰ク、我カ世ヲ遁ル、ハ命ヲ全ウセンガ爲メノミ、今何ソ帝ノ我ヲ疑フコト此ノ如ク深キヤ、我豈ニ坐シテ徒ニ死ヲ俟マシヤト、乃チ村國男依等ヲシテ急ニ不破道ヲ塞カシメ、大分惠尺等ヲシテ高市大津ノ二皇子ヲ召サシム、時ニ國司等多ク心ヲ大海人ニ屬シ、天皇ノ召ニ應ズル者少シ、遂ニ兩軍勢田川ヲ挾ミテ陣ス、官軍ノ先鋒智尊能ク戰フ、然ル軍利アラズ、衆潰ヘ大臣等亦逃ケ去ル、天皇乃チ躬ヲ縊レテ崩ズ、明年二月大海人大和ニ入テ即位ス是ヲ天武天皇トス

(四)

大化革新以後律令ノ制定如何、

大化改革ニ依テ既ニ地方分權ノ弊ヲ改メ、中央集權ノ實ヲ舉ケタ

(五)

王朝時代軍制ノ一斑ヲ舉ゲヨ、

大寶令ニ次テ發布サレタル軍隊ノ制ハ養老年間ニ至リテ大ニ完備セリ、抑モ當時ノ徵兵法ハ、適齡者ヲ二十一歳以上六十歳以下ト定メ、全國ノ適齡者三分一ヲ點シ、其國土ノ軍團ニ編入シ、軍團ヨリ交番ニ邊境ヲ守ル者ヲ防人ト稱シ禁門ヲ護ル者ヲ衛士ト稱ス、

リト雖ル、當時事創業ニ屬シ尙未ダ完備セザル所多キヲ以テ、天智天皇ノ時ニハ中臣鎌足等ニ命ジ、專ラ意ヲ用ヰテ之レガ修正ヲ謀ラシム、近江令是ナリ、天武天皇ノ時ニ之ヲ修正セシガ持統天皇ノ三年ニ至リテ之ヲ發布シ、文武天皇大寶元年更ニ唐代ノ制度ヲ參酌シテ新ニ律令ヲ撰定セシメ之ヲ大寶令ト云フ、其律六卷令十一卷アリ、元正天皇ノ養老二年更ニ之ヲ修正シ、律令各十卷トナス、養老令是ナリ依リテ之ヲ稱シテ新律令ト云ヒ、大寶令ヲ舊律令ト云フ、今日傳フル所ハ即チ此新律令ナリ、

(四)

其服役ノ期限ハ衛士一年防人三年トシ、歸休後衛士ハ一年防人ハ三年・國內ノ番役ヲ免カル、但シ軍國ニアルノ兵士ハ唯兵勞ニ
 ノミ從事スルニアラズシテ傍ラ農事ヲ執ルヲ得ルノ制ナリ、又軍
 團ニハ大中小ノ三別アリ、要害ノ地方ニハ大軍團ヲ置ク、大軍團
 ノ兵士ハ千人、中ナル者ハ六百人以上、小ナル者ハ五百人以下ト
 ス、

貨幣鑄造ノ始メ、及び其以前ノ賣買方ヲ問フ、

何レノ國モ皆古代ハ通用貨幣トテハナク、僅ニ隣郷近村ト相往來
 シテ、稻粟ハ魚介ニ易ヘ、獸皮獸角ハ木綿絹布ニ易フル等ノ類ノ
 ミ、我國ニ於テモ古代ハ交易ノ媒トシテ稻或ハ布ヲ用ヰタリト云
 フ、而シテ貨幣鑄造ノ始ハ紀元一千三百六十八年元明天皇和銅元
 年ニアリ、是歲武藏國ヨリ銅ヲ獻シタルヲ以テ鑄錢司ヲ置キ和銅
 開珎ト云フ錢ヲ鑄シメタルナリ、然ルニ是ヨリ先キ顯宗天皇ノ時

ニ米一斛ノ直銀錢一文トアルハ、恐ラクハ韓國ノ貨幣ヲ以テ云ヒ
 シナラン、

(四)

天智帝ヨリ淳仁帝ニ至ル迄ノ學校制度如何、

紀元一千三百三十年天智天皇始メテ學校ヲ建テ、百濟人ヲ聘シテ
 博士學生等ヲ置キ學業ヲ教授セシム、又紀元一千三百三十五年天
 武天皇占星臺ヲ起シ、天文博士・天文學生ヲ置キ、大學ニハ音博
 士・書博士等ヲ置ケリ、然レ學制未ダ備ハラズ、紀元一千三百八
 十年元正天皇養老年間ニハ、大學ノ外諸國ニ國學ト云フヲ設ケ經
 書及ヒ普通科ヲ授ケシメ、大學ハ專ラ專門科ヲ修ムルノ處トセリ、
 之ヨリ學制略ホ整ヒ卒業生登用法モ定メラレタリ、後千紀元一千
 四百十八年淳仁天皇ノ時ニハ、大學生ノ貧困ニシテ廢學スル者多
 キヲ憂ヒ、勸學田ト云フヲ定メ學生ノ供給ニ充テ、盛ニ學業ヲ獎
 勵セラレシカバ漸々文學隆盛ノ運ニ向ヘリ、

(四)

國史ヲ編修セシ初ハ如何、

紀元一千二百八十年推古天皇ノ二十八年、厩戸皇子蘇我馬子ト共ニ天皇記國記等ヲ編成セシガ是我國歴史ノ始ナレドモ今傳ハラズ、或ハ舊事本紀ヲ以テ此書ナリトモ云ヘリ、又紀元一千三百七十一年元明天皇和銅四年、太朝臣安曆ニ勅シテ國史ヲ撰録セシメ同五年正月ニ至テ成ル、古事記(三卷)是レナリ、又紀元一千三百八十年元正天皇養老四年、舍人親王太朝臣安曆等ノ撰修セシ日本記(三十卷)成ル、是レ天武天皇ノ時ヨリ着手セシ者ナルガ、此時ニ至リテ漸ク完成セルナリ、此等歴史編制前ニハ、歷朝ノ事蹟悉ク口碑ニヨリテ傳ヘラレタリト云フ、

(四九)

廣嗣ノ亂ノ顛末如何、

聖武天皇ノ天平十二年、藤原廣嗣反ス、此時大内裏ニ佛教盛ニ行ハレ、僧玄昉ト云フ者内道場ニ居リ、屢說法ト稱シテ皇后ニ近侍

シ頗ル醜聞アリ、故ニ廣嗣上書シテ玄昉ノ罪ヲ鳴ラシ、併セテ吉備眞備ヲ斥ケンヲ乞フ、納レラレズ、却リテ太宰少貳ニ貶セラレ、妻ヲ京ニ留メテ獨リ任地ニ赴キシニ玄昉又其妻ヲ姦セントス、廣嗣聞キテ益憤怒シ、再ビ上書シテ玄昉等ヲ除カント乞フ、復々容レラレズ、是ニ於テ廣嗣兵弩ヲ設ケ、烽火ヲ舉ゲ國中ノ兵ヲ徵ス、朝議以テ謀反ヲ起スナリトシ、大野東人ヲ大將軍ニ任ジ、五道ノ兵一萬七千人ヲ發シ之ヲ討セシム、廣嗣之ヲ聞キテ筑紫ノ兵一萬五千人ヲ引率シテ官軍ヲ拒グ、官軍先鋒ノ將ニ佐伯常人アリ、進ミ大呼シテ曰ク廣嗣ハ叛人ナリ、廣嗣ニ與スル者ハ罪三族ニ及バント、是ニ於テ廣嗣ノ兵敢テ箭ヲ放タズ、廣嗣驚キ馬ヨリ下リ出デ、再拜シテ曰ク、廣嗣朝廷ニ叛クニアラズ、但朝廷ノニ姦臣ヲ除カント欲スルノミト、常人曰ク然ラバ何ノ故ニ兵ヲ舉グルヤト、廣嗣辭塞カリ馬ニ上リテ軍中ニ入ル、筑紫ノ兵多ク降リ、

(五)

廣嗣海ニ航シテ遁レントス、暴風ニ遇ヒテ果タサズ、官軍ノ虜トナリ、肥前松浦ニ斬ラル、玄昉モ後筑紫ニ流サレテ死ス、押勝ノ謀叛ヲ略記セヨ、

淳仁天皇ノ天平寶字八年、惠美押勝叛ス、初メ押勝太上皇孝謙天皇ノ寵ヲ受ケ專横ナリシガ、弓削道鏡新ニ寵幸セラレテ少僧都トナリ、日夜内殿ニ伺候シ、己レ稍ヤ寵ヲ失ヘルヲ怨ミ、窃ニ道鏡ヲ除カント欲シ、太上皇ニ諷シテ都督兵事使トナリ、諸國ノ兵ヲ都督衛ニ集メ、言ヲ檢閲ニ托シ窃ニ其數ヲ増ス、然ルニ謀泄レ、太上皇急ニ山村王ヲ遣ハシテ乾政官(時ニ太政官ヲ改メテ乾政官トス)ノ鈴印ヲ押收セシメ、押勝ノ官位ヲ停メ、兵ヲ發シテ三關ヲ守ラシム、押勝其夜直ニ黨與ヲ率ヰテ宇治ヨリ近江ニ走リシガ、官軍既ニ勢多橋ヲ燒ケルヲ見テ、途ヲ轉シテ高島郡ニ入り、氷上鹽燒王ヲ立テ、帝トナシ、近郡ノ兵ヲ發シテ官軍ト戦フ、敗

(五)

道鏡ノ非望、
レテ海路遁レ走ラントス、暴風ノ爲メニ其意ヲ果ス能ハズ再ビ高島郡ニ官軍ト戦ヒ、再ヒ走ラントシテ官軍ノ追撃スル所トナリ遂ニ斬ラル、朝廷又鹽燒ヲ殺ス、

稱徳天皇ノ天平神護元年、道鏡ヲ拜シテ太政大臣禪師トナシ文武百官ニ勅シテ拜賀セシム、同一年又法王位ヲ賜ヒ法王宮職ヲ置ク、是ニ於テ道鏡ノ威權日ニ盛ニ、出ヅルニハ鸞輿ニ乘リ、服食一ニ供御ニ擬ス、然ルヲ道鏡尙足レリトセズ、同三年ニハ太宰ノ神官阿曾齋ヲシテ八幡大神ノ託宣ナリト詐リ、道鏡ヲシテ天位ニ即カシメバ天下太平ナラント奏セシム、天皇乃チ和氣清齋ヲ宇佐ニ遣ハシ、神託ヲ聞カシム、出ヅルニ臨ミテ道鏡劍ヲ接シ清齋ヲ脅嚇シテ曰ク、汝能ク神託ヲ受ケテ我ニ志ヲ得シメハ、必ズ太政大臣ニ擧ゲテ之ヲ報ゼント、清齋還リ奏シテ曰ク我國開闢以來君臣

(五)

和氣清磨ノ事跡ヲ問フ、

稱徳天皇ノ朝ニ當リ奸僧弓削道鏡帝寵ヲ辱クシ敢テ天位ヲ窺竈スルニ當リ、在廷ノ臣僚皆等シク道鏡ニ媚ビ、毅然トシテ之ニ反抗スルモノ更ニ無カリシニ、清磨獨リ之ニ屈セズ、宇佐八幡ニ使シテ神託ヲ直言シ、爲メニ妖僧ノ肝膽ヲ破リ、遂ニ其志ヲ成サシメズ其誠忠日月ト光ヲ争フト云フモ可ナリ、清磨爲メニ道鏡ノ怒ヲ招キ大隅ノ國ニ配流セラレ、途ニシテ殆ント殺サレントセシガ

(五)

平城ノ朝トハ何帝ノ時代ナルカ、

平城トハ大和國ノ奈良ノ地ナリ、元明天皇ノ和銅三年初メテ茲ニ都ヲ遷シ、左京右京ヲ分チ帝都ノ規模ヲ恢ニセリ、之ヲ平城ノ朝ト云フ、爾來元正・聖武・孝謙・淳仁・稱徳・光仁・桓武ノ八代八十五年間ノ帝京ナリ、桓武天皇ノ延暦十三年都ヲ山城ニ遷シテヨリ廢都トナリヌ、

(五)

桓武帝ノ御遷都、

桓武天皇ノ延暦三年都ヲ山城ニ遷シテ萬世不易ノ帝都トナス初メ

非常ノ英斷ヲ以テ、奈良ノ京ヲ廢シ都ヲ山城國葛野郡ニ遷サント欲シ、諸國ニ課シテ宮城ヲ築カシメ、之ヲ平安城ト稱ス、其京地ノ廣袤南北三十八町、之ヲ九條ニ分チ、東西三十二町トス、大内裏ハ十七殿(紫震・仁壽・承香・常寧・貞觀・春興・室陽・綾綺・温明・麗景・宣耀・安福・校書・清涼・後涼・弘徽・登花)十二門(陽明・待賢・郁芳・美福・朱雀皇嘉・談天・藻壁・殷富・安嘉・偉鑿・達智)ヲ有シ京ノ北端ニ在リ南ニ面シ一條二條ノ間ニ跨ル、諸官廳亦其内ニ在リ、而シテ皇城ノ正門ヲ朱雀門ト云ヒ、朝堂ノ門ヲ應天門ト云ヒ、外廓ノ門ヲ羅城門ト云ヒ、之ヲ三大門ト稱ス、又朱雀門ヨリ羅城門ニ通スル皇城前中央ノ大路ヲ朱雀大路ト云ヒ、其東方ヲ左京西方ヲ右京トス、各町六百八保五十防二十六アリ、市宅三十二戸チ一町トシ、四町チ一保トシ、四保チ一防トシ、四防チ一條トス、故ニ一條ノ戸數千四十八戸ナリ、左右兩京ニ各京職ヲ置キ、一防ニ長一人一條ニ

令一人ヲ置テ之ヲ管治セシム、(現今ノ京都ハ此左京ノミ)

(五)

阿部比羅夫ノ東夷征伐ヨリ田村ノ膺凱旋ニ至ルマデ東夷叛服如何、我邦東北ノ蝦夷ハ王化ニ服セザルコト久シク、邊境ヲ騷カシ良民ヲ若シムルコト屢ナリ、是ヲ以テ朝廷或ハ軍人ヲ遣ハシ、或ハ法師ヲ派シ、百方之カ治定ヲ謀リタレモ未ダ其績ナク、已ニ齊明天皇ノ四年、阿部比羅夫ニ命シテ^{アキタマシロ}鱒田淳代ノ二郡ヲ討セシメ、其地ノ酋長^{ナムカ}恩荷ヲ以テ淳代津經二郡ノ郡司ニ任ズ、又紀元一千三百六十九年元明天皇和銅二年ニハ、東北ノ蝦夷叛キ、元正天皇ノ養老四年ニハ、陸奥ノ蝦夷按察使ヲ殺セリ、故ニ多治比縣守ヲシテ之ヲ征セシム、聖武天皇ノ神龜元年ニモ大掾ヲ殺シタリ、即チ藤原宇合ヲシテ征討セシメ大野東人ヲ以テ鎮守府將軍トス、東人ハ多賀城ヲ築キ夷地ニ入りテ百六十里ノ地ヲ開キ、孝謙天皇ノ天平寶字二年ニハ、蝦夷ノ男女千六百九十餘人ヲ編籍シ、淳仁天皇ノ天平

寶字六年ニハ、藤原朝フサカリ獨更ニ多賀城ヲ修造シ、碑ヲ建テ蝦夷國境ノ道程里數ヲ記ス、光仁天皇ノ寶龜五年、東國ノ蝦夷大ニ叛キ、時ノ鎮守府將軍大伴駿河督援ヲ朝廷ニ乞ヒ、朝廷坂東八國ニ命シ兵ヲ發シテ救ハシム、同十一年ニモ蝦夷ノ種族ニテ上治郡ノ大領伊治イチノアサヒ皆督アサヒ叛ク、藤原繼繩ヲ征東使藤原小黑督ヲ持節征東大使トシ之ヲ平ゲシム、同天皇天應元年諸軍悉ク多賀城ニ會シ賊地ニ入ル、兵備完マカラスシテ止ム、然ルヲ桓武天皇ノ延曆二十年、坂上田村督ニ命シテ征夷大將軍トシ、大ニ蝦夷ヲ征セシム、是ニ於テ陸奥悉ク平キ、田村督更ニ膽澤志波ノ二城ヲ築キ、東邊ノ備トナシ以テ凱旋ス、是レ東夷叛服ノ大略ナリ、

(五)

弘仁ノ變トハ如何、

天皇ノ弘仁元年・上皇(平城天皇)ノ寵姫藥子其兄仲成ト謀リ、上皇ニ重祚ヲ勸メ、已后位ニ即カント欲シ、又命ヲ矯メテ都ヲ奈良ニ

遷サントス、帝大ニ驚キ仲成ヲ收メテ之ヲ誅シ、詔ヲ下シテ藥子ノ罪ヲ數ヘ、其官位ヲ奪ヒ宮外ニ擯ク、上皇大ニ怒リテ兵ヲ發シ、藥子ト興ヲ同ウシテ東ス、然ル帝已ニ田村督ニ命シテ諸路ノ要害ヲ塞カシメタルヲ以テ、進ムコトヲ得ズ宮ニ遷リテ薙髮シ、藥子毒ヲ服シテ自殺シ事平ク、

(五)

王朝時代佛教隆盛ノ狀ヲ記セヨ、

佛教ハ紀元一千四百年代ヨリ愈ヨ隆盛ニ趣キ、有識ノ僧侶輩出シ、玄昉ハ唐ヨリ歸リテ法相宗(又唯識宗ト云)ヲ弘メ、鑑真和尚唐ヨリ歸化シテ律宗ヲ傳ヘ、其他華嚴(又賢首宗ト云)唐ノ歸化僧道璿之ヲ傳フ(俱舍・三論・成實等種々ノ宗門アリ、後桓武天皇ノ時ニ至リテハ僧最澄唐ヨリ歸朝シテ天台宗ヲ起シ、延曆寺ヲ比叡山ニ建テ、嵯峨天皇ノ代ニハ、僧空海又唐ヨリ還リテ高野山ヲ開キ、金剛峯寺ヲ建テ眞言宗ヲ弘ム、當時法師ハ常ニ宮中ニ出入シ、親

王等ノ薨去ニハ七日毎ニ百人宛參内シテ佛齋ヲ行ヒ、凡テ古來ハ天事人事ノ吉凶皆之ヲ神ニ祈リシガ、一變シテ佛事ヲ修ムルノ風行ハレ、神道殆ント滅シ、唯祈年祭・鎮火祭・大忌祭・大祓・等ヲ存スルノミ、又諸國ニ文珠會國分寺等ヲ興シ、僧正僧都ノ職ヲ置キ、法師モ漸次勢ヲ得テ、僧正ハ五人ノ從僧四人ノ沙彌八人ノ童子ヲ從ヘ、僧都ハ四人ノ從僧三人ノ沙彌ト六人ノ童子トヲ從ヘテ往來セリ、當時ノ帝ハ皆大ニ佛教ヲ信ゼラレ、殊ニ聖武天皇ノ如キハ、崇佛ノ餘自ラ三寶奴ト稱シ、光仁天皇モ深ク佛教ヲ信シ、疫癘流行ノ時ハ佛語ヲ唱ヘ禳フヘシトテ、天下ノ老幼男女ニ摩訶般若波羅密ヲ起居行歩ノ間ニモ唱ヘシメ、文武百官參朝ノ途次、公務ノ餘暇ニ念誦セシム、斯ク佛教ハ行ル、ニ付キ、非常ノ騷亂ヲ惹起シ、コトハ、前條ニ述ブルカ如クナリ雖トモ、亦之カ爲メ偉大ノ文明ヲ誘起シタルコトアリ、乞フ之ヲ後條ニ舉ケン、

(五)

印板ノ起源如何、

斯ク佛教ノ勢盛ナルヲ以テ、彼ノ歸化僧鑒真和尚ハ、紀元一千四百年代奈良朝時代(元明天皇ヨリ光仁天皇ニ至ル奈良ニ在京ノ間ヲ云フ)ニ律二大部ヲ印行セリ、之ヲ我邦印板ノ始メトス、是レヨリ續々諸佛書ノ印行及ヒ文學書ノ出版アリ、

(五)

平假字ノ發明如何、

紀元一千五百五十年ノ頃(光孝天皇ノ頃)歌道大ニ行ハレ、歌ヲ書キ詞ヲ綴ル、ニハ漢字ノ不適當ナルヲ以テ、已ニ傍假字ノ發明アリシニ拘ラス、更ニ平假字ヲ作りテ其便ヲ通シ、難波津(なには)つにさくや此花冬こもり今を春べと咲や此花(淺香山(あさか山)かげさへ見ゆる山の井の淺くは人を我か思はなくに)等ノ歌ヲ書シ、以テ習字ノ初歩ニ用井、空海(弘法大師)ハ佛說ノいろは歌ヲ作レリ、其他葺手書水手書等ノ戲書流行セリト云フ、

(六)

承和ノ變トハ如何、

仁明天皇ノ皇太子ヲ恒貞親王ト云フ、皇太子常ニ以爲ラシ身藤原氏ノ出ニアラズシテ儲宮ニ居リ、異日兩上皇(嵯峨・淳和)晏駕セバ禍機測リ難カラント、屢表ヲ上リ位ヲ去ラシコトヲ請フ、許サレズ、後紀元一千五百年仁明天皇ノ承和七年、淳和上皇崩シ、同九年嵯峨上皇崩セシカバ、東宮ノ帶刀伴健岑及ビ橘逸勢等、陰ニ嵯峨帝ノ喪ニ乗シ、帝ヲ廢シテ太子ヲ立テシコトヲ謀レリ、謀漏ル、ニ及ビ、天皇震怒シテ太子ヲ廢シ健岑逸勢等ヲ流シ皇子道康親王ヲ立テ、儲貳トナセリ、之ヲ承和ノ變ト云フ、道康ノ母ハ藤原冬嗣ノ女ナリ、

(六)

惟仁親王ノ册立及ビ藤氏攝政ノ次第、

紀元一千五百十八年文德天皇崩シ、皇太子惟仁親王立ツ是ヲ清和天皇トナス、初メ文德天皇長子惟喬ノ令聞アルヲ愛シ、之ヲ立テ

太子トナサント欲ス、然レモ惟喬ハ藤氏ノ出ニ非ザルヲ以テ天皇良房ノ意ヲ憚リ、枉ゲテ幼冲ノ惟仁親王ヲ立ツ、惟仁親王ノ母ハ染殿皇后藤原明子ニシテ、外祖太政大臣良房ノ邸ニ生レ、即位ノ時尚ホ九歳ナルヲ以テ、良房萬機ヲ攝行セリ藤原氏ノ權ニ至リテ極レリト云フベシ、夫レ太政大臣ハ最モ貴キ職ニシテ、古來此職ニ就キシ者、唯僅ニ大友・高市・押勝・道鏡ノ四人アリシノミ、然ルヲ良房之ヲ得テヨリ藤原氏世々此職ヲ襲ヒ、大政ヲ攝行スルニ至レリ、

(三)

藤原氏專權ノ由來如何、

藤原氏ノ斯ク大權ヲ擅ニスルニ至リタルハ、其由來スル所甚ダ遠シ、藤原氏ノ先ヲ中臣鎌子ト云フ、鎌子中大兄皇子(天智帝)ト共ニ蘇我氏ヲ亡シ、中興ノ業ヲ佐ケ、中大兄位ニ即クニ及ビテ大織冠内大臣ニ任セラレ藤原ノ姓ヲ賜ハル、其子不比等ハ持統・文

(三)

基經ノ廢立ヲ叙セヨ、

武元明元正ノ四朝ニ歷事シ、律令ヲ撰定シ、官太政大臣ニ拜セラ
ル、ニ至ル、然レ辭シテ遂ニ受ケズ、之ヨリ其子孫南家(武智磨
ヲ祖トス)北家(房前ヲ祖トス)京家(麻呂ヲ祖トス)式家(宇合ヲ祖
トス)ノ四流ニ分レ、皆祖宗ノ勳勞ニ依リテ重職ヲ占メ、殊ニ北
家最モ盛ニシテ、世々左右ノ大臣或ハ内大臣トナリ、是ヨリ又藤
原氏ノ子女多ク皇妃トナリシヲ以テ、外戚ハ自家ノ特權ナリト信
ジ、又權力ハ世間ヲ統御スルニ充分ナリトシ、他家ノ皇妃ニ立ツ
ヲ拒ミ、己レ外舅ノ故ヲ以テ權ヲ專ニセント欲セリ、然レ正當時
ノ諸帝ハ皆年長シテ位ニ即キ、政ヲ親セラレタルヲ以テ、未タ其
專橫ヲ逞ウスルニ至ラザリシガ、清和天皇幼ニシテ位ニ即クニ及
ビテ其積勢俄ニ發セリ、之ヲ藤原氏專權ノ由來トス、

陽成天皇ノ元慶八年攝政藤原基經天皇ヲ廢シテ時康親王ヲ立ツ、

之ヲ光孝天皇トナス、初メ陽成天皇游嬉度ナク、遂ニ狂疾ヲ發シ、
旨ニ逆フモノアレバ則チ劔ヲ拔キテ之ヲ追ヒ、屢不辜ヲ殺戮スル
ニ至ル、基經之ヲ憂ヘ連ニ諫ムレモ聽カズ、躁暴益甚シ、基經
以爲ラシ是レ人君ノ器ニアラズト、則チ廢立ヲ行ハンコトヲ欲セ
リ、時ニ廢太子恒貞素ヨリ賢名アリ、基經之ヲ擁立セント欲シ、
密ニ其意ヲ告グ、恒貞(時ニ己ニ薙髮シテ佛ニ歸ス)流涕シテ曰ク
身己ニ沙門ニ入ル、焉ソ帝位ニ登ルコトヲセント、基經強フルコ
能ハズ、時ニ仁明天皇ノ皇子時康親王聰明寬厚能ク人ヲ愛シ、
人主ノ度アリ、基經謁見シテ推戴ノ意ヲ陳ベ親王ノ許諾ヲ得依リ
テ公卿ヲ會シテ之ヲ議セシニ、衆論百出未ダ決セズ、藤原諸葛眼
ヲ瞋ラシ劔ヲ按シ叱シテ曰ク、今日誰カ攝政ノ處分ヲ受ケザルト
議乃チ定ル、期日ニ及ヒ帝ヲ誘ヒテ陽成院ニ遷シ、奏シテ曰ク陛
下狂虐ニシテ君德欠クル所アリ、臣等社稷ノ爲ニ計リ乘輿ヲ此ニ

(四)

遷スト、是ニ於テ親王公卿神璽劍鏡ヲ時康親王ニ奉シテ之ヲ立ツ
是レヲ光孝天皇ト云フ、
關白職ノ起源、

光孝天皇ハ斯ク藤原基經ニ立テラレタルヲ以テ基經ヲ憚リテ敢テ
親ヲ太子ヲ立テ玉ハズ、仁和三年帝不豫ナルヲ以テ基經臥内ニ入
リ奏シテ曰ク、陛下萬歲ノ後神器將ニ誰ニ附セント、帝曰ク唯公
ノ擇ブ所ニ從ハント、蓋シ帝基經ヲ憚リテナリ基經曰ク臣カ見ル
所ヲ以テスレバ其惟王侍從カト、王侍從トハ皇子定省ナリ、帝大
ニ喜ビテ定省ヲ召シ、右ニ其手ヲ執リ左ニ基經ノ手ヲ執リテ泣キ
テ曰ク、大臣ノ功大ナリ、慎ミテ忘ル、勿レト、乃チ立テ、皇太
子トス、皇太子位ニ即クニ及ンテ(宇多天皇是ナリ)萬機皆基經ニ
關白セシメタリ、攝政トハ天皇御幼冲ノ間假リニ政ヲ行フ者ニシ
テ、關白トハ天皇御成人ノ後萬機ヲ主ルモノナリ、而シテ今攝政

(五)

ノ由來ヲ原ヌルニ仲哀天皇崩後神功皇后ノ攝政ヲ始メトシ、推古
天皇ノ朝ニ皇太子廩戸皇子攝政シ、齊明天皇ノ時皇太子中大兄皇
子又攝政シ、未タ嘗テ人臣ニシテ政ヲ攝セシ者アラザリシニ、清
和天皇ノ時ニ藤原良房攝政シ此ニ至リテ藤原氏又關白職ヲ拜ス、
蓋シ關白ノ稱是ヲ以テ始トナス、
道真ノ貶謫セラレタル次第ヲ述ベヨ、

菅原道真ハ參議是善ノ子ナリ、家世々儒者タリ、學識該博治体ニ
通ズ、宇多天皇ノ時舉ゲラレテ遂ニ權大納言トナル、帝大ニ藤原
氏ノ專横ヲ惡ミ、常ニ其權勢ヲ減殺センコトヲ謀リシヲ以テ、位
ヲ醍醐天皇ニ讓ルニ當リ、親シク諭スニ道真ヲ任用スベキコトヲ
以テセリ、醍醐天皇位ニ即クニ及ビテ道真右大臣トナリ、政務ノ
裁決流ル、ガ如シ、時ニ藤原ノ時平左大臣タリ、(基經死シテヨリ
政權帝ニ歸シ、藤原氏又關白職ニ居ラズ)德望多ク道真ニ屬スル

ヲ以テ心窃ニ平ナラズ、會道眞關白ニ任ゼラル、ノ内旨アルヲ聞
キ、妬忌己ム能ハズ、伴リ奏シテ曰ク道眞異圖アリ、陛下ヲ廢シ
其女婚齊世親王ヲ立テ、身國權ヲ專ニセント欲スト、帝年尙壯ナ
リケレバ遂ニ讒ヲ信シ玉ヒテ延喜元年(紀元一千五百六十一年)
道眞ヲ貶シテ太宰權帥ト爲シタリ、宇多上皇大ニ愕キ、親ラ天皇
ニ面シ之ヲ救ハント欲シ玉ヒシニ、時平門ヲ閉ヂテ入レズ、其男
女二十三人皆別處ニ配セラレタリ、道眞配所ニ在リ所懷ヲ吟ジテ
曰ク、去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣猶在此、捧持日
々拜餘香ト

清行ノ封事トハ如何、

(六)

醍醐天皇ノ延喜十四年、帝方ニ精勵治ヲ圖リ、詔シテ直言ヲ求メ
玉ヒキ、是ニ於テ式部大輔三善朝臣清行、意見十二條ヲ上リテ時弊
ヲ痛論セリ、其十二條ニ曰ク、第一祭祀ヲ肅ミ、第二奢侈ヲ禁ジ、

(七)

延喜ノ治如何、

第三兼并ヲ抑ヘ、第四學生ヲ勵シ、第五舞妓ヲ省キ、第六形獄ヲ
慎ミ、第七祿賜ヲ均ウシ、第八牧宰ヲ擇ミ、第九課役ヲ程シ、第
十邊備ヲ嚴ニシ、第十一僧徒ヲ汰シ、第十二津泊ヲ修ムト、
醍醐天皇即位ノ初メ誤リテ讒ヲ信シ、賢臣菅原道眞ヲ貶シ王ヒシ
ガ、後大ニ之ヲ悔ヒ、正一位太政大臣ヲ贈リ玉ヘリ、帝長ズルニ
及ビテ益心ヲ政治ニ用ヰ、在位三十三年ノ間毫モ攝政關白ヲ用ヰ
ズ、下民ノ言路ヲ開キテ時政ノ得失ヲ論ゼシメタリ、是ニ於テカ
三善清行ノ封事アリ、帝嘗テ十二ノ訓誡ヲ作り玉フ、曰ク酒ヲ嗜
ム勿レ、多言スル勿レ、自家ノ事ヲ妄ニ他人ニ語ル勿レ、好テ人
ノ不善ヲ説ク者ヲ避ケヨ、甲乙隙アリテ已レ乙ト善ケレハ進退行
止眼ヲ甲ニ注クヘシ、狂惡ノ徒ヲ友トスル勿レ、大ニ怒ルコト勿
レ、恪謹篤厚ニシテ慢逸ノ心ヲ生スルコト勿レ、車駕衣服華美ヲ

(六)

格式ノ意義如何、

大化改革以後律令ノ制定アリ、其後又格式ノ撰定アリ、此ノ律令・格式・四ツノ者はレ當時治國ノ大本ナリシナリ、格式ハ弘仁・貞觀・延喜ノ三回ニ發布サレシガ、今存シテ傳フル者ハ僅ニ延喜式及ヒ類聚三代格アルノミ、格トハ令ノ制ヲ變更セザルベカラザル時發布スル臨時ノ制定ニシテ、式トハ官吏ノ章程ノ如キ者ナ云フナリ、

(六)

天慶ノ亂、

平將門ハ葛原親王ノ孫ニシテ鎮守府將軍良將ノ子ナリ、壯ニシテ大志アリ、勇悍絶倫騎射ヲ能クス、初メ京師ニ居テ攝政藤原忠平ニ仕ヘ檢非違使タランコトヲ求メシニ、忠平省ミザリケレバ將門怒リテ東國ニ赴キ、其伯父常陸大掾國香ヲ殺シ、又其叔父下總介良兼ヲ滅ボシタリ、其謀主ヲ興世王ト云フ、將門ニ説キテ曰ク、一國ヲ取ルモ誅セラレ、數國ヲ取ルモ誅セラル誅ハ一ナリ、如カズ坂東ヲ併吞シテ天下ヲ謀ランニハト、將門竟ニ朱雀天皇ノ天慶二年(紀元一千五百九十九年)上野下野ヲ平ゲテ、自ラ新皇ト稱シ、偽宮ヲ下總國猿島郡石井郷ニ立テ文武百官ヲ置キ、唯曆博士ヲ欠クノミ、時ニ前伊豫掾藤原純友南海ニ起ル、純友ハ藤原長良ノ曾孫ニシテ太宰少貳良範ノ子ナリ、曾テ將門ト友タリ、一日共ニ比叡山ニ登リ、伏シテ帝城ヲ望ミテ曰ク、大丈夫當ニ此ニ居ル

(吉)

天曆ノ治、

ベシ、我ハ皇族子ハ藤原氏、他日志ヲ得バ以テ我關白トセント、後純友朝命ヲ奉シ南海ノ賊ヲ平ゲテ功アリ任滿ツレモ還ラズ、是ニ至リ兵ヲ集メテ遙ニ將門ニ應ゼリ、朝廷藤原忠文ヲ征東大將軍トシテ將門ヲ討セシメシニ、忠文未ダ至ラザルニ先チ國香ノ子貞盛下野押領使藤原秀郷ト圖リテ、將門ヲ射殺シ悉ク其徒ヲ誅セリ、忠文之ヲ聞キテ途ヨリ歸ル、又南海ニハ右近衛少將小野好古ヲ追捕使長官トナシ、源經基ヲ次官トナシ、船艦二百餘艘ヲ帥シテ純友ヲ征討セシメタルモ未ダ平ガザリシヲ以テ、天慶四年更ニ忠文ヲ征西將軍トナシ赴キテ純友ヲ伐タシメントセシニ、未ダ發セザルニ好古等ノ軍海陸並ビ進ミテ大ニ純友ヲ敗リ之ヲ誅セリ、之ヲ天慶ノ亂ト云フ、

天曆トハ村上天皇ノ年號ナリ、故ニ帝ノ御世ヲ稱シテ天曆ノ治ト

(七)

兼通兼家ノ爭、

云フナリ、帝性寛裕ニシテ温恕ナリ、意ヲ政事ニ止メ民ニ恩惠ヲ布キ玉ヘリ、嘗テ老吏ヲ召シ問ヒテ曰ク、現今ノ治ト延喜ノ政ト何レカ優レルト、老吏恐レテ曰ク異ルナシト、帝切ニ問フ、老吏曰ク賤陋ノ下吏何ヲカ知ソ、止メ主殿寮多ク松明ヲ進メ、率分堂草ヲ生ズルノミト、蓋シ政廳繁忙却テ歳貢少キヲ云フナリ、帝慚ツル色アリ、是ヨリ益精ヲ勵ミ治ヲ求メシカバ國大ニ治マルニ至レリ、後ノ治ヲ言フ者必ズ延喜天曆ヲ並ヘ稱スル亦故アル哉、

兼通兼家ノ爭、
村上天皇ノ時ニハ藤原時平ノ弟忠平太政大臣トナリ、其子實賴師輔左右ノ大臣トナリ、父子相並ビテ朝政ヲ行ヒ冷泉天皇ヲ經テ圓融天皇ノ時ニハ、師輔ノ子伊尹太政大臣トナリ、兼通ハ天延二年(紀元一千六百三十四年)氏ノ長者トナリ遂ニ太政大臣ニ拜シ正二位ニ叙シ、萬機ヲ關白セシメラル時ニ兼通ノ弟ニ兼家ト云フモノ

アリ官右近衛大將タリ、兄弟相喜カラザルヲ以テ貞元二年兼通病ムニ及ビテ俄ニ藤原頼忠ヲ召シテ關白トナシ、兼家ヲ召サズ却リテ其官ヲ奪ヒテ死セリ、今其所以ヲ尋ヌルニ、兼通嘗テ參議ノ職ニ在リケルニ兼家夙ク顯達シテ大納言ニ至リ、右近衛大將ヲ兼テタリ、故ニ兼通之ヲ嫉ミ村上天皇ノ時窃ニ中宮ニ就キ手書セシメテ曰ク後來攝關ノ補闕アラバ、必ス兄弟ノ序ヲ以テ相及フベシト、蓋シ中宮ハ兼通ノ妹ナリ、兼通固ク此書ヲ藏シ、伊尹薨去ノ際窃ニ之ヲ今ノ帝(圖融)ニ上レリ、帝常ニ兼通ヲ忌ムヲ以テ、其來ルヲ見ルヤ忽チ起チテ入ラントス、兼通強イテ之ヲ止メ遂ニ其書ヲ奉レリ、帝故母后ノ手跡ヲ視、遺命違フベカラザルヲ以テ、先ヅ舉ゲテ關白トナセリ是ヨリ二人相好カラズ、兼家兼通ノ病危篤ナルヲ聞キ、直チニ駕ヲ促カシテ出ヅ、兼通ノ家人兼家ノ前驅近クテ見テ兼通ニ報シケレバ、兼通以爲ラク必ズ我病ヲ訪フナラ

ント、席ヲ掃ヒテ之ヲ待チシニ、駕門ヲ過ギテ入ラズ直ニ入朝セリ、兼通大ニ怒リ病ヲカメテ朝ニ詣リ奏シテ曰ク、臣將ニ終ラントス、乞フ最后ノ除目ヲ行ハント、頼忠ヲ關白トナシ、兼家ノ官ヲ奪ヒ、第二還リテ薨セリ、

(七) 華山ノ遜位、

圓融天皇已ニ位ヲ讓リ、花山天皇嗣キ立ツニ及ビテ藤原兼家漸ク復タ顯達シテ右大臣トナル、時ニ藤原義懷外舅ノ故ヲ以テ朝政ニ預リシカバ、兼家之ヲ嫉ミ、帝ヲシテ早ク位ヲ去ラシメンコトヲ希ヘリ、會ニ帝寵姬恒子ヲ失ヒ悲嘆己ム能ハザリシカバ、道兼之ニ乘シ、僧嚴久ト交々入リテ佛經ヲ説キ、帝ヲシテ塵世ヲ厭棄スルノ念ヲ増サシメ、其子道兼ヲシテ帝ニ奏セシメテ曰ク陛下早ク身ヲ捨テヨ、臣モ亦奉從セント、帝遂ニ其誘フ所トナリ、夜潜ニ宮ヲ出ヅ、時ニ月色晴朗帝少ク猶豫セシニ道兼趣シテ曰ク劍璽已ニ

(三)

東宮ニ奉レリ、亦如何トモスルナシト、既ニシテ叢雲月ヲ翳ヘシカバ、帝曰ク我願成レリト、遂ニ華山元慶寺ニ入り落飾シ玉ヒス、道兼給キテ曰ク己ニ聖約ヲ奉セリ、願シハ一度歸リテ父母ニ辭セント、乃チ去リテ復タ來ラズ、帝始メテ其欺カレタルヲ知リ、大ニ悔イ玉フ、時ニ寛和二年ナリ、

道長ノ事跡ヲ問フ、

一條天皇ノ時藤原兼家關白タリシガ長子道隆ニ子道兼五子道長。次第ニ關白トナレリ、殊ニ道長ハ一條三條後一條ノ三朝ニ歷仕シ樞機ヲ掌ルコト三十餘年、其女ハ三朝ノ皇后トナリ、子ハ攝關トナリ、政柄已レニ歸シ、黜陟心ニ任セ、富王室ニ過キ、威權朝廷ヲ凌ゲリ、是ヲ以テ三條帝モ諷セラレテ位ヲ讓リ、後一條帝ノ東宮敦明親王モ危難ヲ避ケテ東宮ヲ辭シ玉ヘリ、道長曾テ其三條ノ第ヲ造營スルヤ、近衛府ノ材木神泉苑乾臨閣ノ石ヲ取リ、

諸國ニ工役ヲ課シ、令シテ曰ク寧ロ公事ヲ後ニスルモ此工事ヲ怠ル勿レト、晩年又法成寺ヲ建ツ、故ニ世之ヲ法成寺關白ト云フ、道長嘗テ詠アリ曰ク、此世をば我世とぞ思ふ望月のかけたる事もなしと思へばト、其驕奢專横以テ見ルベシ、

(四)

前九年ノ役ヲ舉ゲヨ、

後冷泉天皇ノ天喜四年、陸奥ノ土豪安倍頼時亂ヲ起ス、初メ頼時ノ祖世々陸奥ニ在リテ東國ノ酋長タリシガ、頼時ニ及ビテ其權勢益強大トナリ、陸奥六郡ヲ併セ、西ハ白河關ヨリ東ハ率土ヶ濱ニ至ル、百餘里ノ間皆使命ヲ奉ゼザルハナシ、中央衣川ノ地ニ壘柵ヲ築キ、名ケテ衣川關ト云ヒ、之ニ據リテ四方ヲ統御シ、徭役ヲ押ヘ貢賦ヲ納メス、國守之ヲ制スル能ハズ、頻リニ使ヲ馳セテ之ヲ朝廷ニ奏セリ、是ニ於テ源頼義ヲ陸奥守鎮守府將軍ニ任シテ之ヲ征討セシメタリ、頼義ハ經基ノ曾孫ニシテ頼信ノ子ナリ、頼義陸

奥ニ赴クヤ、幾クモナク大赦ニ遭フ、賴時赦サレテ大ニ喜ビ、駿馬金玉等ヲ官軍ニ贈リテ其歡心ヲ求メタリ、然ルニ其子貞任罪ヲ獲テ囚ハル、ニ及ビ復タ衣川關ニ據リテ叛セリ、賴義大ニ怒リ兵ヲ起シテ屢賴時ヲ討ツ、賴時流矢ニ中リテ斃レタレモ貞任等ノ餘黨勢尙強大ニシテ屢官軍ヲ破リ賴義其子義家ト共ニ僅ニ身ヲ以テ免カレタリ、下リテ康平五年(紀元一千七百二十二年)ニ至リ賴義陸奥守再任ノ期己ニ滿チ、高階經重代リ任セラレタレモ、國民賴義ニ服シテ經重ニ從ハザリシカバ、經重竟ニ任ヲ棄テ、逃レタリ、是ヲ以テ賴義志ヲ勵シ、出羽ノ豪族清原武則ヲ諭シテ援兵ヲ出サシメ、進ミテ貞任ヲ討チ、衣川柵ヲ拔キ鳥海柵ヲ陷レ、遂ニ厨川ノ要柵ヲ圍ミ、火ヲ放テ之ヲ燒キ、貞任ノ遁レ出ツルヲ逐ヒテ之ヲ殺シ亂全ク平キヌ、此間前後九年ヲ經タリ、故ニ之ヲ前九年ノ役ト云フ、朝廷功ヲ賞シ賴義ヲ正四位伊豫守ニ任シ、義家ヲ從五位

出羽守ニ任シ、武則ヲ從五位鎮守府將軍ニ任ス、是ヨリ東國ノ武士心ヲ源氏ニ寄スル者多シ、

(七)

後三條ノ政治及ビ藤氏ノ勢力如何、

後三條天皇ハ後朱雀天皇第二ノ皇子ニシテ母ハ三條天皇ノ皇女ナリ、紀元一千七百二十八年位ニ即ケリ、初メ帝七歳ナル時宮ニ入リテ後朱雀ニ謁セシニ、進退度アリ觀者之ヲ異トセリ、後朱雀殊ニ之ヲ愛シ、立テ、後冷泉ノ儲貳トス、東宮ニ壺功劍アリ、モト藤原氏ノ寶劍ナリシガ、基經宇多天皇ニ獻セシヨリ以來東宮ノ相傳トナレリ、然ルニ後三條ノ東宮トナルニ及ビテハ關白賴通特ニ之ヲ上ラズシテ曰ク、藤原氏ノ出ニアラザル者ハ此劍ヲ得ベカラズト、帝聞キテ曰ク我何ソ此一劍ヲ用ユルコトナセンヤト、二十餘年ノ間常ニ藤氏ノ專横ヲ憤リ、即位ノ後直チニ政柄ヲ奪ヒテ、賴通ヲ宇治ニ退居セシメ、其弟教通關白タリト雖モ唯員ニ備フルノミ、

教通嘗テ南圓堂ヲ作ル、時ノ制國司ノ再任ヲ禁ズト雖、教通狂ケテ南圓堂工事監督ノ國司再任ヲ乞フ、帝震怒シテ曰ク、攝關ノ憚ルベキハ只外祖タルヲ以テノミ、朕ハ則畏ル、所ナシト、其奏ヲ納レ玉ハズ、教通翹然トシテ起チ、大呼シテ曰ク、藤原氏ノ卿相悉ク罷メン、春日ノ神威今日盡キタリト、是ニ於テ諸藤成ク起チ、教通ニ隨ヒテ出デシカバ、天皇已ムコトヲ得ス呼ヒ歸シテ其請ヲ許セリ、以テ藤原氏ノ朝廷ニ充滿セシヲ知ルベシ、帝大ニ奢侈ノ風ヲ矯メ、逸遊ヲ正シ、躬ヲ節儉ヲ行ヒ、唯政務ニノミ意ヲ用井、延久元年記録所ヲ太政官ノ朝所ニ置キ、躬ヲ訴訟ヲ裁決シ、同四年ニハ沽價法ヲ定メ斗升ノ法ヲ制シ玉ヘリ、帝嘗テ量制ヲ審ニセント欲シ、新々ニ其器ヲ作ラシムルニ、親ヲ簾竹ヲ抽キ截テ此カ準トナセリ、延久宣旨升ト云フ者是レナリ、惜イ哉帝ノ賢明ニシテ早ク崩シ玉ヒタルコト、

(其)

王朝時代有名ノ學者ヲ舉ゲヨ、

當時ハ文學甚々盛ニシテ、官設諸學校ノ外ニ、菅原清公ノ文章院・藤原冬嗣ノ勸學院・嵯峨皇后橘氏ノ學館院・恒貞親王ノ淳和院・在原行平ノ獎學院等私立ノ學舍從ヒテ起リ、皆甚々盛ナリ、是ヲ以テ從ヒテ文學ノ大家輩出シ、吉備眞備・石上宅嗣・淡海三船ヲ始メトシ、都良香・小野篁・橘廣相・藤原菅根・清原夏野・紀貫之等アリ延喜ノ朝ニ至リテハ菅原道眞・三善清行等ノ大儒輩出セリ又其後ニ於テハ女學者モ多ク現レ赤染衛門・伊勢大輔・和泉式部・紫式部・小式部・清少納言・紀内侍等歌道ヲ以テ名アリ、已ニ當時ハ著書モ稍多カリシト雖、殊ニ紫式部ノ源氏物語ノ如キ、絶世ノ名作奇代ノ大著ナリトス、

(其)

院宣ノ政トハ如何、

白河天皇ノ應德三年、善仁親王ヲ立テ、皇太子トシ、即日位ヲ讓

ル堀河天皇是ナリ、白河天皇剛毅果斷ニシテ政宸衷ヨリ出テ、相門手ヲ斂メ頗ル後三條天皇ノ風アリ、遜位ノ後政ヲ院中ニ聽クコト四十餘年、大臣員ニ備ハリ、天子垂拱シテ成ヲ仰クノミ、凡ソ院宣ヲ以テ天下ニ號令スルコト此ニ始マル、院廳ニハ別當執事・年預判官代・主典代・藏人・廳官等ノ職アリ、又上下北面ノ士アリテ院中ヲ警衛ス、蓋シ院政ノ事タル、後三條天皇ノ素志ナリシカ、早ク崩ゼシヲ以テ發セラレズ、帝ニ至リテ之ヲ始メラレシカ、爾後鳥羽、後白河ノ二法皇モ亦政ヲ院中ニ聽キ玉ヘリ、抑モ院宣トハ如何ナル意義ナルカ、院トハ法皇ノ殿ヲ云ヒ、法皇トハ天皇位ヲ去テ後チ佛ニ歸スルヲ以テ稱スルノ號ナリ、而シテ法皇ノ稱ハ宇多天皇位ヲ酬醒天皇ニ讓リ、薙髮シテ佛ニ歸セシニ始マレリ、宣トハ宣旨ナリ、重キヲ詔勅ト云ヒ、輕キヲ宣旨ト云フ、故ニ院宣トハ猶法皇ノ勅旨ト云フガ如シ、

(六)

後三年ノ役トハ如何、

堀河天皇ノ寛治元年陸奥守源義家・清原家衡・清衡及ヒ武衡ヲ討チテ之ヲ平ク、初メ清原武則・源賴義ニ隨ヒテ功アリ、鎮守府將軍ニ任ゼラル、其二子ヲ武貞・武衡ト云フ、武貞ノ子眞衡ニ至リ、勢威強大ニシテ其族皆之ニ臣事ス、然ルニ眞衡ノ弟家衡・清衡兄ニ叛シテ兵ヲ起シ、叔父武衡亦之ニ與ミセリ、義家當時陸奥守鎮守府將軍トナリテ陸奥ニ在リシヲ以テ、眞衡ヲ助ケテ家衡等ヲ討ツ、家衡等之ヲ聞キ金澤柵ニ據リテ之ニ抗セリ、義家兵數萬騎ヲ以テ之ヲ攻ムレモ固守シテ久シク下ラズ、義家日ニ兵士ノ勇怯ヲ檢シテ其坐ヲ分チ、以テ將士ヲ獎勵セリ、是ヨリ先キ清衡及ヒ其謀主吉彦秀武(出羽ノ酋長)ト共ニ來リ降リシカバ、義家秀武ノ謀ヲ用井日ヲ曠クシテ柵ヲ圍ミシカバ柵中糧盡キ、家衡等柵ヲ燒キテ逃ル、義家ノ兵爭ヒ進ンテ之ヲ擊チ、終ニ武衡家衡ヲ擒ニシ奥羽ノ亂是ニ

(七)

至リテ平ダ、之ヲ後三年ノ役ト云フ、
 藤原氏ノ勢ヲ失ヒタル次第ヲ叙セヨ、
 藤原氏ハ頼通以後頼通ノ子師實・孫師通・曾孫忠實・玄孫忠通等相繼
 ギテ攝關ノ職ニ上リタリト雖モ、毫モ昔時ノ威權ナク、唯徒ニ名ヲ
 存スルノミ、平清盛勢ヲ得ルニ及ビテ全ク其權ヲ失フニ至レリ、夫
 レ藤氏ハ祖先ノ勳勞ニ誇リ、外戚ノ威權ヲ恃ミ、優柔懦弱ニ流レ、
 觀花興月ヲノミ事トシ、歌舞遊樂ヲ擅ニシ、淫酒ニ耽リ、王室ノ
 干城タル武備ハ之ヲ修メズ、武士ヲ見ルコト土芥ノ如シ、故ニ地
 方ノ豪族稍盛ナルニ及ビテハ皆離散シテ藤原氏ヲ顧ミズ、殊ニ源
 平二氏ノ如キハ、功ヲ積ミテ漸ク強大トナリ、天下兵馬ノ大權ヲ
 掌握スルニ至リテハ、老衰腐敗ニ傾クノ藤原氏豈能ク長ク少壯活
 潑ナル源平二氏ヲ制御スルヲ得ヘケンヤ、其權ヲ失フニ至ル素ヨ
 リ自然ノ勢ナリ、

(八)

保元ノ亂トハ如何、
 崇徳天皇ハ鳥羽法皇ノ第一皇子ニシテ保安四年即位セシガ、保延
 五年法皇其寵姫美福門院ノ生ム所ノ體仁親王ヲシテ早ク位ニ登ラ
 シメント欲シ、強テ帝ニ迫リテ位ヲ體仁ニ禪ラシム、之ヲ近衛天
 皇トス、是ヨリ崇徳天皇ヲ新院ト稱ス、而ルニ近衛天皇幾クモナ
 クシテ崩セシカバ、新院ハ乃チ皇子重仁親王ヲ立テソコトヲ希
 ヘリ、時ニ親王重仁夙ニ賢明ノ名アリ、輿望亦之ニ屬セリ、然
 ルニ美福門院ハ近衛天皇ノ早世ヲ以テ新院ノ咒詛ニ出ヅルトナ
 シ法皇ニ勸メテ雅仁親王(法皇ノ第四子)ヲ立テシメタリ之ヲ後白
 河天皇トナス、是ニ至テ新院ノ不平益々甚シ、斯クテ後白河天皇ノ
 保元元年、鳥羽法皇崩ズルニ及ビ美福門院遺詔ト稱シ新院ヲ拒
 ミテ臨御セシメザリシカバ新院大ニ怒リ、竟ニ藤原頼長ト謀リテ
 兵ヲ擧グ、頼長ハ兄忠通ト隙アリシヲ以テ、此舉ニ乘ジテ新院ヲ助

ケ忠通ニ代リテ已レ權ヲ專ニセント欲セシナリ、帝モ亦源義朝等ニ勅シテ禁内ヲ守ラシメ、又清盛等ヲ召セリ、是ニ於テ新院出テ、白河殿ニ入り源爲義平忠正等ヲ召シケレバ、爲義其子爲朝等七人ヲ率ヰテ至ル、爲義乃チ策ヲ獻ジ、新院ノ南都ニ幸シ若シ尙成ラヌンハ遠ク鸞輿ヲ關東ニ奉シ徐ニ之カ謀ヲナサンコトヲ乞フ、賴長聽カズ、爲朝モ亦夜攻ヲ議ス賴長亦用ヰズ、爲朝嘲笑シテ曰ク、咄長袖子何ソ兵機ヲ知ラント、其夜義朝清盛等來リテ白河殿ヲ襲ヒ、火ヲ上風ニ放チシカバ諸將防クヲ能ハズ、新院知足院ニ入りテ薙髮シ、賴長流矢ニ中リテ死セリ、帝乃チ新院ヲ讚岐ニ移シ、忠正爲義等ヲ斬リ爲朝ヲ伊豆ニ流シ亂全ク平ク、之ヲ保元ノ亂ト云フ、

(二)

平治ノ亂トハ如何、

保元ノ亂已ニ平キテ未タ幾クナラズ、二條天皇ノ平治元年ニ至リ

又藤原信賴源義朝等ノ亂アリ、初メ信賴後白河上皇ノ寵ヲ恃ミ、驕恣ノ餘遂ニ大將ヲランコトヲ求メシガ、當時ノ權臣信西(少納言通憲)之ヲ阻ミ、其意ヲ達セシメズ、之ヨリ信賴大ニ信西ト惡シ、源義朝モ亦清盛ノ信西ニ婚ヲ通シ、勢望已レノ上ニ出ヅルヲ見テ心平ナラズ、二人依リテ以テ結托シ、潛ニ時機ノ至ルヲ待テリ、會、清盛熊野ニ詣ルヲ聞キ、遂ニ兵ヲ舉ケテ夜三條殿ヲ襲ヒテ之ヲ燒キ、帝及ヒ上皇ヲ宮中ニ幽シ、信西ヲ斬リテ怨ヲ報ズ、是ニ於テ信賴自ラ大臣大將ト稱シ、義朝等ニ官爵ヲ授ク、清盛變報ヲ得テ走セ歸リ、天皇ヲ六波羅ニ迎へ、上皇ヲ仁和寺ニ遁レシメ、其子重盛ヲシテ大内ヲ襲ハシム、信賴倉邊逃レ去ル、義朝子義平等ト共ニ戰ヒ、義平重盛ヲ逐ウテ七ツヒ櫻橘樹ヲ匝ルニ至ル、然レ衆竟ニ潰散シテ復タ支フベカラス、義朝東國ニ走ントシテ、尾張ニ至リ長田忠致ノ爲ニ其浴室ニ殺サル、義平信賴皆誅ニ伏シ事

平治ノ亂ト云フ、此戰ヤ信賴之カ魁タリト雖モ、其實ハ源平二氏ノ爭權ニ過ギズ、蓋シ源平二氏ノ相仇視スルコト久シク、保元ノ亂後義朝清盛共ニ功ヲ恃ミ隱然兵馬ノ權ヲ相爭ヒシガ、此亂ニ依リテ源氏ノ勢大ニ滅殺セラレ、平氏專ラ權ヲ擅ニスルニ至レリ、

(三)

賴朝ノ死ヲ免レタル次第ヲ叙セヨ、

平治ノ亂ニ源氏ノ軍全ク敗レシキ、源賴朝ハ其兄義平朝長ト共ニ、父義朝ニ從ウテ東走シ、大雪ニ遇ヒテ父兄ト相失セリ、時ニ年十三、流轉シテ東國ニ赴カント欲シ、途ニ尾張守平賴盛ノ家人平宗清ニ捕ヘラレ、六波羅ニ送ラル、清盛命シテ之ヲ宗清ノ家ニ囚ス、宗清之ヲ待スルコト甚タ厚ク、密ニ清盛ノ繼母池尼ニ白シテ曰ク、囚人容止故右馬助ニ似タリト、右馬助トハ池尼ノ子ニシテ早世セシモノナリ、故ニ尼聞キテ之ヲ憫ミ、重盛ヲシテ其死ヲ宥メシメシ

(三)

平氏ノ權ヲ得タル次第ヲ問フ、

平氏ハ桓武天皇ノ皇胤ヨリ出ヅ、平貞盛天慶ノ亂ニ將門ヲ誅滅シテ鎮守府將軍ニ拜セラレシヨリ、世々將臣ニ任セラレ、清盛ノ父

ニ、清盛肯ンセザリケレバ、尼泣キテ重盛ニ謂ツテ曰ク我之カ爲メニ寢食常ヲ失フ、命モ亦久シカラジ、汝能ク我カ爲メニ之ヲ乞ヘト、重盛賴盛ト共ニ復之ヲ請フ、清盛己ムコヲ得ズシテ之ヲ赦シ、遂ニ伊豆ノ蛭カ島ニ竄セリ、義朝ノ舊臣之ヲ聞キ僧タラントヲ勸ムル者多シ、獨リ纈纈盛安耳語シテ曰ク、郎君ノ免ル、ハ神祐ナリ、宜シク形ヲ全フシ時機ヲ待ツベシト、賴朝之ヲ領ス、發スルニ及ンテ士庶聚リ觀テ曰ク、此子風采非常ナリ、之ヲ遠地ニ置クハ猶虎ヲ野ニ放ツカ如シト、賴朝志ヲ得ルノ後チ、毎ニ曰ク吾カ首ヲ斷タレザルハ池尼ノ恩、吾ガ髮ヲ剔ラザルハ盛安ガ忠ナリト、

(公)

清盛法皇ヲ幽シタル顛末、

忠盛(貞盛六世ノ孫)ニ至リ、嘗テ鳥羽上皇ノ微行ニ從ヒ途怪ヲ捉ヘタルノ故ヲ以テ上皇其勇ヲ愛シ、但馬守ヨリ累進シテ刑部卿トナシ、遂ニ昇殿ヲ許スニ至ル、後チ上皇又其姫ヲ賜フ、時ニ姫身メルアリ、約シテ曰ク若シ男ナラハ汝カ子ト爲セト、清盛則チ是ナリ、清盛數度ノ軍功ヲ經テ、從一位太政大臣ニ至リ、其女徳子ヲ高倉天皇ニ納レテ中宮トナシ、其子重盛宗盛等、各大臣大將トナリ、一族六十餘人皆高位顯職ニ登リ、其領スル所天下ニ半セリ、是ニ於テカ天下平氏ニアラサル者人間ニアラスト誇稱スルニ至ル、

清盛ハ人トナリ放恣豪慢、勢ヲ得ルニ從ヒテ益專横ヲ極メ、天下己レヲ謗ル者アルヲ恐レ、三百人ノ童子ヲ禿トナシ、赤色ノ直垂ヲ著ケ梅枝ヲ携ヘシメ、以テ之ヲ洛中洛外ニ散ジ、一言平氏ヲ誹

謗スル者アレバ直チニ六波羅ニ報セシメ、捕ヘテ之ヲ罪セリ、此ヲ以テ途上目シテ以テ相戒ムルニ至ル、後清盛薙髮シテ淨海ト稱シ、尙政權ヲ握リテ下チ虐シ上チ蔑ニセリ、紀元一千八百三十一年高倉天皇ノ治承元年ニ至リテ、藤原成親平康賴等其狂暴ヲ憤リ、後白河法皇ニ密奏シ、僧俊寛カ鹿谷ノ別莊ニ會シ、之ヲ滅サントトテ謀ル、事露レシカバ成親以下其黨與ヲ流シ後又人ヲ遣ハシテ成親ヲ殺サシメ、法皇ヲ鳥羽ニ幽セントセシガ其子重盛切諫シテ之ヲ止メタリ、重盛温厚ニシテ沈毅、常ニ父ノ驕横ヲ憂ヒ、屢之ヲ諫メシチ以テ清盛ノ狂傲モ爲ニ少シク息ミシガ重盛早世ノ後ハ毫モ憚ル所ナク、兵數千ヲ率テ福原ヨリ至リ、關白基房以下三十九人ノ官職ヲ奪ヒテ之ヲ流シ、法皇ヲ鳥羽殿ニ幽シ、膳御ヲ奉スルコト朝夕二回ノミ、人呼ビテ牢御所ト云フ、其暴慢不敬ナル遙ニ藤原氏ニ過ギタリ、院宣ノ政此ニ至リテ全ク衰フ、

(全)

以仁王舉兵ノ次第如何、

平治ノ一敗後、源氏ノ權勢地ニ墮チタリト雖モ、獨リ源賴政宿將
ヲ以テ京師ニ居リ、常ニ清盛ノ狂暴ヲ目撃シテ其專横ヲ憤レリ、
會、賴政ノ子仲綱清盛ノ子宗盛ニ辱メラレシカバ、高倉帝ノ庶兄以
仁王ニ詣リ、説キテ曰ク、大王ハ法皇ノ子ナリ、假ヒ九五ノ位ヲ
履ムモ亦何ノ不可カ之有ン、今英齡三十未タ親王タルヲ得ズ、僕
窃ニ王ノ爲メニ之ヲ憤ル、今清盛凶暴ニシテ至尊ヲ蔑シ朝官ヲ憑
凌シ、神怒リ人怨ム、其亡ブルコト日無ケン、大王上ハ天心ニ應
シ、下ハ人望ニ副ヘ、義ヲ舉ケ逆ヲ誅セハ其レ孰カ之ニ從ハザラ
シ、僕年七旬ヲ踰ニ齒力既ニ衰フト雖モ宗族衆多ナリ、以テ一方
ヲ衛ルニ足ル、在昔源平兩家ノ功勳爵賞相下ラズ、而ルニ今懸隔
雲泥ニシテ禮君臣ノ如ク、源氏ノ支屬多ク編叱トナリ四方ニ流落
セリ、大王一旦令旨ヲ下サバ彼皆踵ヲ繼テ至ラン、平氏ヲ滅サン

(六)

福原ノ遷都

コト掌ヲ纏スガ如シ、時失フベカラズ、願クハ大王之ヲ計レト、
王其言ヲ聞キテ慨然奮起シ、安徳天皇ノ治承四年(紀元一千八百
四十年)竟ニ賴政ト兵ヲ舉ゲ、平氏ノ軍ト宇治橋ニ戰ヒテ利アラ
ズ、賴政流矢ニ中リ、王ヲシテ南都ニ走ラシメ、自ラ平等院ニ入
リテ自殺シ、王モ亦井手ノ渡ニ至リテ流矢ノ爲メニ薨ゼリ、

清盛常ニ平安都城ノ叡山南都ニ隣シ、屢僧徒ノ犯ス所トナルヲ以
テ之ヲ避ケント欲シ、遂ニ安徳天皇ノ治承四年六月都ヲ福原ニ遷
セリ、時ニ宮殿未ダ成ラズ乃テ假リニ弟賴盛ノ別莊ヲ以テ宸居ト
セリ、十一月ニ至リテ宮殿成リシニ人心遷都ヲ懌バズ、物議紛紜
其不便ヲ訴ヘテ己マズ依リテ幾クモナクシテ舊京ニ還ル、是ヨリ
先キ清盛大内裏ヲ新都ニ造ラント欲シ、之ヲ輪田ニ相セシム、規
模廣大ニシテ土地狹隘ナリ、議者或ハ昆陽野ニ營セント欲シ、或

ハ印南野ヲ可ナリトシ議未ダ決セズ、乃チ周防ニ課シテ假ニ皇居
ヲ營セシメ稱シテ里内裏ト云フ、

第一鎌倉時代

(七)

賴朝ノ舉兵ヨリ富士河ノ戰ニ至ルマデヲ略記セヨ、
賴朝平治ノ亂ニ死ヲ免レテ伊豆ニアリシガ、以仁王ノ令ヲ得ルニ
及ビテ、治承四年先ツ伊豆ノ目代平兼隆ヲ殺シ、從兵三百餘人ト
相摸ニ至リ、令旨ヲ旗上ニ繫ケ、進ミテ石橋山ニ陳ス、相摸ノ人
大庭景親兵三千ヲ率ヰテ來リ攻ム、賴朝ノ軍皆殊死シテ戰ヘ凡衆
寡敵セズ、敗レテ杉山ニ逃レ海路安房ニ走ル、關東ノ武士古來源
氏ノ恩威ニ服スルモノ多キヲ以テ、此軍ニ從屬スル者陸續トシテ
至リ、忽ニシテ上總下總武藏相摸ヲ平定シ、居ヲ鎌倉ニ奠メテ
之ニ據リ、上國ノ形勢ヲ窺フ、朝廷平維盛平忠度平知盛等ニ勅

(六)

シテ之ヲ討ケシム、維盛進ミテ富士河ニ軍セシニ、賴朝兵二十萬
ヲ將ヰテ黃瀬川ニ至リシカバ、將士恟懼シテ復々鬪志ナシ一夜水
禽ノ起ツヲ聞キ、敵軍大ニ至ルトナシ、人馬相踏籍シ、器械輜重
ヲ棄テ、走ル、是ニ至リテ賴朝ノ勢益盛ナリ、

義經ガ賴朝ニ再會スルマデノ略歷ヲ問フ、

初源義朝妾常盤ヲ納レテ三子ヲ生ミ、今若乙若牛若ト云フ、平
治ノ敗常盤三子ヲ携ヘテ自ラ六波羅ニ至リ、刑ニ就カント請フ、
清盛其容色ヲ悦ビ遂ニ納レテ妾トナシ其三兒ヲ宥セリ、後今若乙
若ヲシテ僧トナラシメ、牛若ヲ鞍馬寺ノ僧覺日ニ附ス、牛若年甫
メテ十一、適諸家ノ系譜ヲ閱シ、慨然トシテ以爲ラク、我世々將
種ニシテ流落此ニ至ル、若シ長大ニ至ラハ必ズ平氏ヲ翦滅シ以テ
父祖ノ辱ヲ雪カント、專ラ書策武技ヲ習ヒ、覺日剃髮ヲ勸ムルモ
肯ソセズ、後陸奥ニ赴キテ藤原秀衡ニ依リ、其資ヲ籍リテ以テ宿

(八)

志ヲ爲サンコトヲ欲シ、密ニ通レテ近江ニ至リ、自ラ首服ヲ加ヘテ名ヲ義經ト更メ、源九郎ト稱ス、時ニ年十六、遂ニ秀衡ニ依ル、秀衡厚ク之ヲ遇セリ、賴朝兵ヲ擧グルニ及ビテ義經二十餘騎ヲ率井テ賴朝ニ浮島原ニ會ス、賴朝大ニ喜ンテ曰ク、吾レ子ヲ見ルコトヲ得ル猶先君ヲ見ルカ如シト、相對シテ感泣セリトゾ、

義仲ノ擧兵及ビ礪波山ノ戰爭ヲ記セヨ、

源義仲ハ賴朝ノ從弟ニシテ義賢ノ子ナリ、義賢近衛天皇ノ久壽二年姪義平ト武藏國ニ戰ヒテ死ス、義仲時ニ年二歳、乳母ノ夫中原兼遠ノ許ニ養ハレ木曾山中ニ居ル、成長スルニ及ンテ宗族ノ零落ヲ慨キ平氏ノ專横ヲ憤リ、以仁王ノ令旨ヲ得テ治承四年九月遂ニ兵ヲ起シ賴朝ニ應シ、養和元年六月城長茂ヲ破リ越後ノ國府ニ入り、九月又平通盛ヲ越前ニ破リ、北越ノ豪族來リ附スル者多ク、延曆寺ノ僧徒モ亦以仁王ノ王子ヲ送ル、義仲王子ヲ奉シテ北陸宮

(九)

清盛ノ薨去ノ狀ヲ記セ、

建ツ、壽永二年平氏義仲ノ勢盛ナルヲ憂ヒ、維盛等ヲシテ兵十萬ヲ帥井テ礪波山ニ陣セシム、義仲進ミテ維盛ノ軍後ニ出テ、數百ノ牛ヲ捕ヘテ大炬ヲ其角ニ縛リ一時ニ之ヲ放チシカバ、平軍擾亂人馬相踏藉シ、俱利加羅谷ニ陷ル者一萬八千餘人、維盛纒カニ身ヲ以テ免ル、

安徳天皇ノ養和元年閏二月前太政大臣清盛薨ズ、初メ清盛關東ノ兵起ルト聞キ、維盛知盛等ヲシテ之ヲ討タシメシニ、或ハ逗撓シテ進マズ或ハ病ミテ還リ、竟ニ成功ナカリシニ、會ニ清盛疾ニ罹リテ病勢日ニ重シ、妻子其起ツベカラザルヲ知リ言ハント欲スル所ヲ問フ、清盛大息シテ曰ク、我位人臣ヲ極メ、身天皇ノ外祖ト爲ル、復タ何ヲカ求メン、唯恨ムラクハ未ダ賴朝ノ首ヲ見ズシテ瞑スルコト、我子孫タル者宜シク此心ヲ体シ、速ニ彼ノ頭ヲ我墓前ニ供

(九)

セヨト、展轉煩悶七日ニシテ薨ズ、年六十四、
 義仲ノ暴逆ナル事跡ヲ問フ、
 安徳天皇ノ壽永三年、平氏天皇ヲ奉ジテ西國ニ走リシヲ以テ京師
 主ナシ、法皇乃チ高倉帝ノ二皇子ヲ擇立テントシ玉ヒシニ、義
 仲以仁王ノ功ヲ述ベテ其子北陸宮ヲ立テソコトヲ請ヒ、議論久シ
 シ決セザリシガ遂ニ高倉帝ノ第四子尊成親王ヲ立ツルニ至レリ、
 是ヲ後鳥羽天皇トナス、義仲其議ノ行ハレサルヲ以テ大ニ怨恨
 シ、兵ヲ放チテ院ノ御領公卿ノ莊園ヲ掠略シ、洛ノ内外ヲ暴行シ、
 或ハ財物ヲ奪掠シ、或ハ婦女ヲ凌辱シ、暴行至ラザル所ナシ、法皇
 義仲ヲ厭ヒ頼朝ヲ召シテ京師ヲ守衛セシメントス、義仲之ヲ聞キ
 テ大ニ怒リ、天皇及ヒ法皇ヲ幽閉シ、法皇ニ迫リテ頼朝ヲ討スル
 ノ院宣ヲ請ヒ、平軍ト和シテ共ニ頼朝ヲ亡サント欲ス、頼朝之ヲ
 聞キ其弟範頼義經ヲシテ義仲ヲ討マシム、範頼ハ勢田ヨリ義經ハ

(九)

宇治ヨリ道ヲ分チテ進ム、義仲宇治勢田ニ橋ヲ撤シテ之ヲ拒ギシ
 ニ、東軍ノ土佐々木高綱等流ヲ亂シテ進ミ、義經モ亦橘小島ヨリ
 流ヲ横斷シテ其淺所ヲ示シ、衆ヲ麾キテ岸ニ上ラシメ、大ニ戰ヒテ
 北軍ヲ敗リ京師ニ入ル範頼モ亦勢田ノ敵ヲ退ケテ京師ニ入り、軍
 チ合セテ義仲ヲ逐フ、義仲大ニ破レテ粟津ニ至リ、水田ニ陥リテ
 馬進マズ、遂ニ範頼ノ兵ノ射殺スル所トナル、
 一ノ谷ノ戰如何、
 平氏ノ義仲ニ追ハル、ヤ、帝及ビ三種ノ神器ヲ奉ジテ讃岐ニ走リ、
 行宮ヲ屋島ニ造營シ、山陽南海十四州ヲ定メシガ、義仲ノ死ヲ聞
 クニ及ビ進ミテ攝津ニ至リ、一ノ谷ニ城キテ之ニ據リ、生田森ヲ
 東門トナシ、一ノ谷ヲ西門トナス、南ハ海ニ瀕シ北ハ山ヲ負ヒ、
 要害甚タ堅ク兵勢大ニ振フ、法皇範頼義經ニ命シテ之ヲ討マシム、
 時ニ壽永三年ナリ、兩將一ノ谷ニ進ミ、範頼ハ東門ニ向ヒ義經ハ

(三)

西門ニ向フ、義經俄ニ方向ヲ轉シ部將ヲシテ西門ニ向ハシメ、別ニ一軍ヲ率ヰテ城後ノ鵜越ニ出テ、二門戰正ニ酣ナルヲ窺ヒ、不意ニ城中ニ突入シテ火ヲ上風ニ放チ、鼓噪シテ進ミケレバ、平軍三面敵ヲ受ケ、人馬蹈籍シ、重衝虜ヲ就キ、師盛・知章・忠度・經正・經俊・敦盛・通盛・業盛・盛俊等戰死スル者數ヲ知ラズ、皆船ヲ爭ヒテ海ニ泛ヒ、倉皇トシテ再ビ屋島ニ奔ル、之ヲ一ノ谷ノ戰ト云フ、

逆櫓ノ議及ビ檀浦ノ戰如何、
 義經進ミテ屋島ヲ攻メント欲シ、船艦ヲ攝津ノ渡邊ニ修ス、梶原景時、逆櫓ヲ設ケテ進退ヲ便ニセント乞フ、義經可カズシテ曰ク、凡ソ戰ニ臨ム者主將勇銳衆ヲ勵マスモ、衆猶退カンゴトヲ欲ス、況ヤ未ダ戰ハズシテ預メ逃計ヲ設クルヲヤト、景時曰ク、進ムヲ知リテ退クヲ知ラザル是ヲ豨勇ト云フト、義經色ヲ作シテ曰ク、我奮戰死ヲ以テ敵ニ當ランノミ、若シ身命ヲ愛セバ軍ニ臨マザル

(四)

ニ如カズ、卿若シ大將タラバ逆櫓千百ヲ設クルモ亦可ナリ、我則チ敢テセズト、義經將ニ發セントス、時大ニ風吹ク、舟子等之ヲ止ム、義經曰ク今大風ニ乗シテ彼ノ不虞ヲ擊タバ彼レ必ズ敗レシ、敢テ諫ムル者ハ斬ラント、舟子相謂ツテ曰ク發スルモ死シ發セザルモ亦死ス、寧ロ發シテ死スルニ如カズト、直チニ尼子浦ニ至リテ尼子良連ヲ虜ニシ、勝浦ヲ攻メテ尼子良遠ヲ敗リ、勢ニ乘シテ屋島ヲ犯シ、火ヲ放チテ行宮ヲ燒ク、平軍大ニ擾レ、乘輿ヲ奉シテ檀浦ニ逃ル、義經又追ウテ檀浦ニ至リ、遂ニ大ニ海上ニ戰ヒ、建禮門院ヲ奪ヒ、宗盛ヲ虜ニシ、平氏ノ一門ヲ鑿ニス、是ニ於テ二位ノ尼安德帝ヲ抱キ神劍ヲ挾ンデ同ク溺ル、是レ實ニ壽永四年三月ナリ、平氏茲ニ至リテ亡ブ、

賴朝ノ義經ヲ討チタル所以及ビ奥羽征伐ヲ述ベヨ、
 賴朝已ニ平氏ヲ亡シ、大ニ鎌倉幕府ノ基礎ヲ固メント謀リ、心常

(九)

ニ義經ノ功ヲ忌ミ、其嘗テ西海ニ在リテ節度ニ循ハザリシヲ疾ミ、且ツ京ニ入リテ行家ト相往來スルヲ疑ヒ、終ニ梶原景時ノ讒ヲ信シ、密ニ土佐房昌俊ヲ京師ニ遣ハシテ之ヲ除カシメントセリ、義經之ヲ悟リ拒キ戰ウテ昌俊ヲ殺シ、法皇ニ迫リテ賴朝ヲ討スルノ院宣ヲ請フ、賴朝大ニ怒リ諸將ヲ帥ヰテ黃瀬川ニ至ル、義經行家之ヲ聞キ相共ニ鎮西ニ走ラント欲シ、大物浦ニ至リ暴風ニ遭ヒテ相失シ、義經ハ吉野山ニ匿レ後、陸奥ニ赴キテ秀衡ニ依ル、行家ハ後チ和泉ニ漂着シ捕ヘラレテ斬ラル、賴朝義經ノ奥羽ニアルヲ聞キ、曾テ奥羽ヲ平ケントスルノ意アルヲ以テ、秀衡ノ死ニ乘ジ其子泰衡ヲ誘ヒテ義經ヲ圖ラシム、義經其從僕辨慶等ト皆衣川柵ニ自殺ス、後賴朝又泰衡ヲ讓メ、其義經ヲ匿セルヲ名トシ、大軍ヲ率ヰテ遂ニ泰衡ヲ殺シ奥羽二州ヲ平ゲタリ、

賴朝ガ兵食ノ大權ヲ握リタル次第如何、

(十)

賴朝已ニ平氏ヲ亡シ、大江廣元ヲ得テ顧問トナシ、文治元年義經ノ京ヲ逃ル、ヤ、廣元ノ謀ヲ用ヰ、義經ヲ逮捕スルヲ以テ名トナシ、奏シテ諸國ニ守護ヲ置キ、莊園ニ地頭ヲ置キ、皆其家人ヲ以テ之ニ任シ、自ラ請ウテ總追捕使及總地頭トナリ、諸國ニ令シテ租稅ノ滯納ヲ免シ、武士上番(交替京師ヲ守ル者)ノ年限ヲ減ジ、務メテ恩ヲ下民ニ布キ、又奏請シテ朝廷ニ議奏官十人ヲ置キ、己レニ善キ者ヲ以テ之ニ充テ、其奏請スル所ハ此輩ヲシテ議定セシメ、且ツ朝廷ノ大事必ズ鎌倉ト議シテ後施行セシメタリ、是ニ於テ幕府ノ基礎全ク整ヘ、天下ノ大權悉ク賴朝ノ手ニ歸セリ、

賴朝ノ範賴ヲ殺シタル次第、

義經ハ功ヲ恃ミテ賴朝ノ命ヲ用ヰザリシヲ以テ遂ニ逐ハレシガ、範賴ハ能ク命ヲ守リ、事毎ニ鎌倉ニ諮詢スルヲ以テ大ニ賴朝ノ親愛スル所タリ、嘗テ賴朝ノ富士野ニ獵スルヤ、伊藤祐泰ノ二孤

(七)

(曾我五郎十郎)工藤祐經ヲ斬リ、父ノ仇ヲ報ズルニ會シ、鎌倉訛傳シテ賴朝害ニ遭フトナス、政子聞キテ大ニ悲メリ、範賴之ヲ慰メテ曰ク、範賴此ニ在リ以テ意トスル勿レト、賴朝聞キテ之ヲ惡ミ、後鳥羽天皇ノ建久四年遂ニ之ヲ伊豆修禪寺ニ拘シ次ギテ之ヲ殺セリ、

北條時政ノ賴家ヲ殺シタル次第、

賴朝薨シテ後チ賴家征夷大將軍トナル、賴家遊宴ニ耽リテ政務ヲ省ミザリシカバ、其母政子北條時政大江廣元等ニ命ジテ庶政ヲ參決セシメタリ、土御門天皇ノ建仁三年賴家疾ムニ及ビ、政子其瘧ユベカラザルヲ度リ、時政(政子ノ父賴家ノ外祖)等ト議シテ全國ヲ兩分シ、關西三十八國ノ總地頭ヲ弟千幡ニ傳ヘ、關東二十八國ノ總地頭及ヒ天下ノ總守護ヲ子一幡ニ傳ヘシム、一幡ノ外祖比企能員政權ノ分離スルヲ憂ヒ、密ニ賴家ニ説キテ北條氏ヲ滅サンコ

(六)

トチ圖リ、事露ハレテ時政ノタメニ殺サル、是ニ於テ比企氏ノ舉族一幡ヲ奉シテ小御所ニ據ル、時政又兵ヲ遣ハシテ比企氏ヲ滅ホシ、并ニ一幡ヲ殺セリ、賴家病床ニアリテ一幡ノ死ヲ聞キ、大ニ怒リテ再ビ時政ヲ誅センコトヲ謀ル、謀又泄レシカバ時政之ヲ伊豆ノ修禪寺ニ幽シ、後元久二年人ヲシテ之ヲ殺サシメヌ、時政北條ニ幽セラレタル所以、

賴家死シ一幡モ亦死セシヲ以テ、政子時政等ト議シ、千幡ヲ立テ、征夷大將軍トシ名ヲ實朝ト改ム、時ニ實朝時政ノ第二ニ在リ、時政ノ後妻牧氏、陰ニ時政ニ勸メテ實朝ヲ殺シ、ソノ女婚平賀朝雅ヲ立テントス、政子之ヲ聞キテ大ニ驚キ、元久二年實朝ヲ時政ノ子義時ノ第二ニ遷シ、時政夫妻ヲ伊豆北條里ニ幽シ、義時ヲ以テ鎌倉ノ執權トナス、執權トハ元治元年始メテ時政ノ任セラレシ職ニシテ、執政長官ノ義ナリ、是ヨリ北條氏九代此職ヲ襲フ、

(九)

義盛ノ北條氏ヲ謀リタル所以及ビ其結果如何、

順徳天皇ノ建保元年、信濃ノ人泉親衡北條氏ノ專横ヲ憤リ、賴家ノ三男千壽丸ヲ奉シテ兵ヲ起シ、和田義盛ノ子義直義重及姪胤長等亦之ニ與ス、義時乃チ兵ヲ遣ハシテ之ヲ撃ツトス、時ニ義盛上總ニアリシカ、走セ歸リテ、己レノ功勞ニ依リ二子ノ命ヲ免サシコトヲ乞フ、實朝之ヲ釋ス、義盛大ニ悦ビ明日又更ニ胤長ノ命ヲ乞フ、義時其倔彊ヲ惡ミ、胤長ヲ縛シテ故ヲニ義盛ノ前ヲ過キテ之ヲ吏ニ屬セシカバ、義盛慚憤遂ニ兵ヲ舉ゲテ北條氏ヲ滅サントシ、軍ヲ三隊ニ分チ、二隊ヲシテ各義時廣元ノ第ヲ襲ハシメ、一隊ハ自ラ之ヲ督シテ實朝ヲ迎ヘントス、時ニ義時已ニ實朝ヲ擁シテ法華堂ニ入り、泰時(義時ノ子)等ヲシテ義盛等ヲ討ツメケレバ、義盛等遂ニ敗レテ一族皆自殺シテ和田氏亡ブ、

(一〇) 鶴岡ノ變トハ如何、

賴家ノ難ニ遭フ時、其子公曉(千壽ノ兄)猶幼ニシテ、難ヲ避ケ京都ニ匿レシガ、長ズルニ及ビテ義時ニ迎ヘラレテ鶴岡八幡社ノ別當トナル、公曉常ニ父ノ廢黜ヲ憤リ、實朝及ヒ義時ヲ殺シテ父ノ仇ヲ報ゼント欲ス、而ルニ順徳天皇ノ建久元年、實朝右大臣拜賀ノ禮ヲ鶴岡ニ行フニ會ス、其儀式夜ヲ以テス、公曉階下ニ隠レ、不意ニ出テ、實朝ヲ刺シ、其首ヲ取リテ逃レ、三浦義村ニ依リ、後義時ノ爲ニ殺サル、是ニ至リテ源氏ノ正統絶ユ、之ヲ鶴岡ノ變ト云フ、

(二)

源氏ノ興亡、

源氏ハ清和天皇ノ皇胤貞純親王ヨリ出テ、親王ノ子經基(六孫王)ニ至リテ源氏ノ姓ヲ賜ハル、世々軍功アリ威東國ニ振フ、平治ノ亂平氏ト兵權ヲ争フヤ、一敗殆ント其族ヲ亡シ、ガ、唯義朝ノ孤賴朝義經等尙幼ナルヲ以テ死ヲ免カレ、賴政宿將トナリテ朝ニ居

(三)

ルノミ、而ルヲ頼政一朝平氏ノ專横ヲ憤リ、以仁王ニ勸メテ兵ヲ舉ゲシヨリ、忽チ源氏中興ノ時機至リ、清盛ハ病ヲ得テ薨シ、宗盛ノ暗劣ニシテ其後ヲ繼グニ遇フ、初メ頼朝東方ノ一孤島ヨリ出テ、兵ヲ起スヤ、平氏ノ世嘗テ毫モ東國ノ武士ニ意ヲ用ヰザリシヲ以テ、東國皆源氏ノ舊恩ニ感シ、争ヒテ之ニ屬シ、兵勢大ニ振ヒ、遂ニ鎌倉ニ居テ定メ、次デ平氏ヲ亡ボシ鎌倉幕府ヲ創立スルニ至ル、然ルニ頼朝誤リテ凶險ナル北條時政ヲ信任セシヨリ、頼家ノ世ニ及ビテ北條氏奪權ノ勢稍、其基ヲ成シ、實朝ノ柔懦之ニ次グニ及ンテ遂ニ全ク源氏ノ正統ヲ亡ボシ、北條氏ヲシテ政權ヲ握ラシムルニ至レリ、

承久ノ變ヲ略記セヨ、

順徳天皇ノ承久三年四月帝位ヲ讓リ皇太子立ツ、之ヲ仲恭天皇トナス、是ニ於テカ後鳥羽・土御門・順徳ノ三上皇アリ、後鳥羽上皇

殊ニ英邁ニシテ、常ニ鎌倉ノ兵權ヲ握リ朝廷ヲ凌グヲ惡ミ、諸國ノ武士ヲ召シテ北面ニ備ヘ、又更ニ西面ノ武士ヲ置キ、院中ニ刀劍ヲ製セシメ、潜ニ時機ノ至ルヲ待チシカ、實朝害ニ遇ヒ源氏ノ正統斷絶セシヲ以テ、政柄復タ朝廷ニ歸スベシト思ヒ玉ヒシニ、北條義時更ニ頼經ヲ奉シテ號令スルコト舊ノ如シ、上皇益平ナラズ、時ニ上皇仁科盛遠ヲ西面ニ候セシメシニ、義時盛遠ノ關東ノ家人ニシテ、恣ニ院廳ニ仕ヘシヲ怒リ、其食邑ヲ沒收セシカバ、上皇特ニ命ヲ下シテ之ヲ復サシメントスト雖モ、義時勅ヲ奉ゼズ、上皇又寵妓龜菊ニ莊園ヲ賜ヒシニ、其地頭龜菊ヲ侮慢シタルヲ以テ其地頭ヲ免センコトヲ命ジタレモ義時亦命ヲ奉ゼズ、是ニ於テ上皇大ニ憤怒シ遂ニ誅伐ノ謀ヲナセリ、時ニ檢非違使三浦胤義京師ニ宿衛セシカ、事アリテ義時ヲ怨ミ、任滿ツルモ歸ラズ、上皇共ニ謀リテ院宣ヲ全國ニ下シ、義時ノ罪ヲ數ヘ、押松ヲシテ院宣ヲ

(三)

兩六波羅府創立ノ深意如何、

承久ノ亂以後、泰時時房留リテ京畿ヲ鎮シ、泰時ハ六波羅ノ北方ニ居リ、時房ハ南方ニ居ル、之ヲ兩六波羅探題ト稱シ、北條氏ノ世職トナル、蓋シ其名京師護衛ヲ假ルト雖モ、其實朝廷ヲ制シ時變ニ備フルナリ、

(四)

泰時ノ政、

後堀河天皇ノ元仁元年北條義時卒シテ子泰時執權トナリ、四條天皇ノ仁治二年ニ至リテ其職ヲ孫經時ニ讓リ、同仁治三年六月ニ至リテ卒シヌ、泰時性寛厚温雅識量人ニ過ク、嘗テ父義時ノ莊園ヲ分ツヤ泰時自ラ取ルコト甚マ薄シ、曰ク吾レ不肖ト雖モ忝ナクモ家職ヲ襲ク、給ラザルノ憂ナシ、唯諸弟得テ以テ足ラバ可ナリト、其在職十八年、貞永式目五十一條ヲ定メ、常ニ意ヲ政治ニ用ヰタリ、泰時初メ京師ニアリシ片梅尾ノ僧高辨ニ治國ノ道ヲ問フ、高辨曰ク治國ノ道ハ猶醫ノ疾ヲ治スルガ如シ、良醫ハ能ク其病源ヲ察シテ劑ヲ投ズ、故ニ必ズ治ス、國ヲ治ムル者其原ヲ察セズシテ徒ニ法令ヲ出スモ、其治得テ期スベカラズ、凡ソ國ノ治ラサルハ人欲之ヲ害スルニ由ル、子國政ヲ執ルニ當リテ躬自ラ率勵セバ何ノ成ラザルコトカアラント、泰時曰ク一人勉ルモ衆從ハザルヲ如何セント、曰ク子誠ニ能ク寡慾ナレバ、則人々徳ニ化シ風ニ嚮ハ

(二五)

ン、未ダ形正シクシテ影曲リ、改正シクシテ國亂ル、者アラズト、是ヨリ泰時躬ヲ節儉チ行ヒ以テ下ヲ率井、衣服器皿徹ルト雖モ改造スルコトナカリシカバ、數年ニシテ風化大ニ行ハレ、卒スルニ及ンテ上下之ヲ愛惜セリ、

時頼ノ政治ヲ述ベヨ、

北條時頼ハ紀元一千九百〇六年後醍醐天皇ノ寛元四年經時ニ代リテ執權トナリシ人ナリ、時頼心ヲ盡シテ時ノ將軍藤原頼嗣ヲ輔導シ、文武ノ道ヲ勵マシ貞觀政要一部ヲ寫シテ之ヲ進ム、時頼ノ職ニアルヤ、專ラ泰時ガ貞永式目ヲ守リ、鎌倉ノ舊制ニ從ヒ、天下大ニ治マレリ、時頼其職ヲ讓リテ後モ猶心ヲ政治ニ止メ、自ラ行脚僧トナリテ四方ヲ周遊シ、風俗ヲ觀察シ民ノ疾苦ヲ訪ヒ、若シ冤枉者アレバ切ニ事情ヲ問ヒ、書ヲ作りテ之ニ與ヘ、以テ證驗トナセリ、之ニ由テ郡國守宰人々皆勉勵シ、風化大ニ行ハレ、卒ス

ルニ及ンテ悲慕慟哭シテ髮ヲ削ル者甚タ多カリシカバ、令チ下シテ薙髮ヲ禁ズルニ至レリト云フ、

(二六)

青砥藤綱ノ事跡ヲ舉ゲヨ、

時頼執權職タリシ時、青砥藤綱ノ賢ヲ聞キ、奏シテ左衛門尉ヲ授ケ、引付衆トナセリ、藤綱嘗テ冤ヲ拯ヒシニ、其者大ニ喜ビ錢三百緡ヲ潛ニ其庭ニ置キテ去リシカバ、藤綱怒リテ曰ク、訟ヲ斷ズルニ平ヲ持スルハ豈特ニ汝ノ爲ノミナランヤ、苟クモ我所決當チ得バ主君宜ク吾ヲ賞セラルベシ、汝ノ貨何ゾ吾ヲ汚スチ得ント、還ヘシテ取ラズ、又嘗テ夜滑川ヲ過ギシ時、誤リテ錢十文ヲ水中ニ落シ、カバ乃チ錢五十文ヲ出シテ炬ヲ買ヒ、夫ヲ雇ヒテ之ヲ搜索セリ、人其得失相償ハザルヲ笑フ、藤綱曰ク十錢小ト雖モ、失ヘハ永ク世ノ寶ヲ損セン、五十錢ハ布キテ民間ニアリト、聞ク者嘆服ス、藤綱性施與ヲ好ミ、入ル所ノ俸祿悉ク貧困ヲ賑ハシ、自

(二七)

ヲ奉スルコト甚ダ薄シ、是ニ於テ奸吏跡ヲ斂メ風俗俄ニ改マリキトゾ、

三浦泰村族滅ノ顛末ヲ記セ、

初メ泰村ノ弟光村、廢將軍賴經ヲ護送シテ京師ニ至リ、潜ニ迎復ノ志アリ、泰村知リテ禁ゼズ、時賴ノ外祖安達景盛、泰村ト權ヲ爭ヒテ相惡メリ、依テ其異志アルヲ告ゲシガ、時ニ泰村ノ妻ハ時賴ノ妹ナリシヲ以テ敢テ之ヲ疑ハズ、後チ泰村ノ妻死スルニ會シ、時賴其家ニ至リシニ、夜擐甲ノ聲アルヲ聞キ、其變アルヲ慮リテ間カニ出テ去リヌ、泰村驚懼解謝シ時賴深ク之ヲ咎メズ、既ニシテ景盛族兵ヲ帥キテ泰村ヲ攻メ、時賴亦兵ヲ遣ハシテ泰村ヲ討チシカバ、泰村遂ニ支フルコト能ハズ、舉族法華堂ニ入りテ自殺シ三浦氏亡ブ、

(二八)

元兵來寇ノ顛末ヲ記セ

紀元一千九百二十八年、龜山天皇文永五年二月、支那元朝ノ使來リテ好チ通ゼンコトヲ求ム、蓋シ元ノ世宗忽必烈宋ヲ滅シテヨリ、餘勢ヲ以テ我日本ヲ征服セント欲セシナリ、朝廷鎌倉ニ命ジテ之ヲ議セシム、時ニ時宗執權タリ、元使ノ書辭無禮ナルヲ以テ、却ケテ受ケズ、同六年元使又來リテ書ヲ奉シテ答書ヲ求ム、對馬島拒テ入レズ、同八年元使趙良弼來リ書ヲ出シテ答書ヲ求ム朝廷答書ヲ草シテ之ヲ謙倉ニ示シ、ニ、時宗以テ國威ヲ墜ストナシ、乃チ良弼ヲ逐ヒ還サシム、同十一年元兵來リテ壹岐對馬ヲ攻掠シ、太宰府ニ寇ス、菊池武房其將ヲ斬リ船モ亦漂蕩ス、後宇多天皇ノ建治元年四月元使杜世忠・何文著等來リテ必ズ答書ヲ得ントス、時宗之ヲ斬リ沿海ノ兵備ヲ修ス、弘安二年元將夏貴范文虎等來リ部將ヲ太宰府ニ遣ハシテ通好ヲ求ム、時宗命シテ又其部將二人ヲ斬ル、元主聞キテ大ニ怒リ、同四年五月、范文虎・忻都・洪茶丘等ヲ

(二〇九)

將トシ、兵十餘萬・船艦數百艘ヲ帥キテ入寇ス、我が兵之ヲ壹岐對馬ニ防グ、利アラズ、六月賊兵進ミテ五龍山ニ據ル、北條實政兵ヲ督シテ奮戰ス、虜乃チ退キテ鷹島ヲ保ツ、七月大ニ風雷シ、賊艦皆破壊ス、我兵因テ奮擊シテ、賊兵ヲ殲滅ス、伏屍海ヲ蔽ヒ、生還スル者僅ニ三人ナリキトゾ、之ヲ弘安ノ役ト云フ、元主之ヲ聞キテ再ヒ大舉來寇セント欲セシニ其臣諫ムル者アリ乃チ止ミ、是レヨリ元復タ我カ邊ヲ窺ハズ、

鎌倉時代ノ佛教ハ如何、

古來佛教ハ數派ニ分レ、皆大ニ行ハレシカ、其後チ三論・法相・俱舍・成實・律・華嚴・ノ六宗漸ク衰ヘ、唯眞言・天台ノミ稍盛ニ行ハレタリ、源氏以降北條氏ノ時ニ及ンテ佛教大ニ盛ニ、禪宗・淨土宗・曹洞宗・一向宗・法華宗等ノ諸宗相繼キテ起レリ、禪宗ハ土御門天皇ノ時僧榮西ノ宋ヨリ歸リテ唱ヒシモノニシテ、淨土宗ハ後鳥羽天皇

(二一〇)

ノ時僧源空ノ唱ヒシ所ナリ、源空ハ始メ天台ヲ學ビ、又黒谷ノ叡空ニ從ヒテ名ヲ法然ト改メ、晩年往生要集ヲ讀ミテ大ニ悟ル所アリ、淨土專念宗ヲ立テ智恩院ニ寂ス、(後圓光大師ト諡ス)曹洞宗ハ禪宗ノ一派ニシテ、後深草天皇ノ時僧道元宋ヨリ歸リテ之ヲ唱フ、故ニ榮西ノ禪宗ヲ臨濟宗ト稱ス、一向宗ハ順徳天皇ノ時、源空ノ從弟親鸞ノ唱フル所ナリ、源空本願寺ヲ立テ、肉ヲ啖ヒ妻ヲ畜ヒ、其狀俗人ト異ナラズ、法華宗ハ龜山天皇ノ時僧日蓮法華經ニ因リテ創ムル所、身延山ヲ開キ又本門寺ヲ建ツ、時宗ハ後宇多天皇ノ時ニ始マリ、僧一遍ヲ開祖トス、常ニ諸國ヲ遍歴スルヲ以テ遊行上人ト云フ、此各宗ノ中禪宗ハ最モ上流ニ行ハレ、淨土宗一向宗・法華宗ハ遍ク民間ニ行ハレ、之ヲ三大宗ト云フ、

龜山上皇誓書ヲ貞時ニ賜ヒシ次第、

初メ、後嵯峨上皇龜山天皇ヲ愛シ、遺命シテ龜山天皇ノ後ヲシテ永

(三)

ク皇統ヲ受ケシメヌ、依リテ御嵯峨ノ崩ズルニ及シテ後宇多天皇立チ、龜山上皇政ヲ聽キ、後深草天皇ヲシテ與リ聞カシメヌ、後深草上皇之ヲ憤リ、哀チ時宗ニ求ム、時宗奏シテ伏見天皇ヲ立ツ、天皇ノ正應三年三月淺原爲頼夜宮ニ入リテ亂ヲ作シ宿衛ノ捕フル所トナリテ自殺セリ、世以テ龜山上皇ノ使フ所トナス、龜山上皇懼レテ誓書ヲ貞時(鎌倉執權)ニ賜ヒ事釋クヲ得タリ、

兩統更立ノ策、

伏見天皇ハ時宗ノ力ニ籍リテ立ツヲ得タリ、依リテ貞時ニ諭シテ曰ク、龜山帝在位ノ日、常ニ卿ガ祖先後鳥羽帝ヲ遠流セシヲ憤リ、慨然之ガ仇ヲ復セント欲セシモ、時幸ニ覺ナシ、若シ龜山帝ノ後ヲ立テバ必ズ其志ヲ繼ガン、卿宜ク之ヲ圖レト、貞時之ヲ信ジ、龜山ノ皇胤ヲシテ位ヲ嗣カシムルヲ欲セズ、遂ニ後伏見天皇ヲ立ツ、是ニ於テ~~必~~宇多上皇後嵯峨ノ遺詔ニ違フヲ讓ム、貞時遂ニ後深草

(三)

龜山兩統更立ノ策ヲ立テ、十年ヲ以テ限リトシ、先ヅ後宇多上皇ノ皇子後二條天皇ヲ立テ、事定ル、

無禮講及ビ其結果ハ如何、

後醍醐天皇鎌倉ノ專權ヲ憤リ、常ニ密ニ之ヲ討センコトヲ謀ル、會高時政ヲ失シ將士心ヲ離シ、カバ、藤原資朝源俊基等ト謀リテ稍豪傑ヲ收攬セリ、會スルモノ皆髻ヲ露ハシ髮ヲ散シ酒ヲ縱マニシ、以テ歡心ヲ結ビ名ケテ無禮講ト云フ、土岐頼兼多治見國長等與カル、既ニシテ事泄レ、高時兵ヲ遣ハシテ頼兼國長ヲ殺シ、資朝俊基ヲ執ヘ、遂ニ後醍醐天皇ヲ廢センコトヲ謀ル、帝誓書ヲ高時ニ賜ヒテ事釋ク、是ヲ無禮講ノ顛末トナス、

(三)

元弘ノ亂及ビ北條氏ノ滅亡ヲ記セ、
後醍醐天皇ノ元弘元年帝皇子護良親王ト謀リ北條氏ノ討伐ヲ議スルコト益急ナリ、是ニ於テ後伏見法皇使ヲ鎌倉ニ遣ハシ具サニ帝

(二四)

建武ノ中興ヲ略記セヨ、

ノ謀ヲ告ゲシカバ高時大ニ怒リ、二階堂貞藤等ヲ遣ハシ、兵三千ヲ率テ京師ヲ攻メシム、帝乃チ服ヲ變ジテ陰ニ南都ニ幸シ尋テ笠置山ニ幸シ玉ヒ、藤原師賢ヲシテ鸞輿ニ乘リ伴ハリテ帝ト稱シ叡山ニ赴カシム、六波羅ノ鎮將北條仲時、乘輿延曆寺ニ入ルト聞キ、兵ヲ遣ハシテ之ヲ攻ム、護良親王撃チテ之ヲ却ク、時ニ帝笠置ニアリ、楠正成ヲ召シ勤王ノ兵ヲ舉ゲシメヌ、明年笠置陥リテ帝隱岐ニ徙サレ、其他謀ニ與スルノ公卿等皆遠流ニ處セラル、之ヲ元弘ノ亂ト云フ、後正成赤坂千早ノ諸城ヲ築キ、勤王ノ師大ニ振ヒ、賊將新田義貞足利尊氏等歸順シ遂ニ北條氏ヲ亡ホスニ至レリ、

後醍醐天皇幼ニシテ穎悟、位ニ即クニ及ンテ北條氏ヲ亡サンコトヲ謀リ、事成ラズシテ隱岐ニ徙サレ玉ヒシガ、幾モナク源顯忠ト

(二五)

共ニ夜潜ニ遁レテ柴舟ニ御シ、名和港ニ至リテ名和長年ニ依リ玉ヒヌ、長年帝ヲ船上山ニ迎ヘ、近國勤王ノ師ヲ集メテ之ヲ衛レリ時ニ義貞尊氏等並ニ北條氏ニ叛キテ之ヲ亡シ、カバ、帝乃チ伯耆ヲ發シテ京ニ入り、新帝ヲ廢シテ位ニ復シ玉フ、帝是ヨリ政ヲ勵ミ文武并ビ用サテ復關白ヲ置カズ、地方ノ政治ニハ國司守護ヲ並ヒ設ケ、朝廷ニハ決斷所ヲ置キテ雜訴ヲ理セシメ、記録所ヲ置キテ武士ヲシテ參直セシメ、大事ハ帝親ラ之ヲ裁決シ、又武者所ヲ置キ新田氏ヲ以テ頭人トナシ京師ヲ番衛セシメタリ、是ニ於テ護良親王ヲ征夷大將軍ニ任シ、皇子義良親王ヲ陸奥ニ、成良親王ヲ鎌倉ニ遣ハシテ東北ヲ鎮撫セシメ、輔佐ノ官トシテハ參議北畠顯家ヲ陸奥守トシテ義良ニ屬セシメ、左馬頭足利直義ヲ執權トシテ成良ニ屬セシメヌ、是實ニ建武元年ナリ、

鎌倉時代武家屋敷ノ体裁如何、又玄關・床ノ起原如何、

(二六)

古代武家屋敷ノ体裁ハ表ニ大門アリ、其外處々ニ小門アリ、大門ヲ入りテ塀中門ヲ過キ、直ニ客殿ニ至ルノ構造ナリ、客殿ハ主客對面ノ所ナレバ亦對面所トモ云ヘリ、後世ノ如キ玄關ノ設アルコトナシ、玄關ハ古代佛寺ニノミアリシナリ、床モ同シク僧家ノモノナリシニ佛教ヲ崇奉スル人ノ家宅ニハ書院ヲ立テ、佛書ヲ講シ、床ヲ造リテ佛像ノ畫ヲ掛ケ、花瓶香爐等ヲ置キシヨリ、後ニハ常人ノ家ニモ床ヲ造リ、玄關ヲ設クルコト、ナレリ、

茶及ビ葡萄ヲ初メテ植エシ時代并ニ茶會ノ初ヲ問フ、

弘仁年中江州崇福寺ノ僧永忠自ラ茶ヲ點シテ嵯峨天皇ニ獻ゼシコトアリ、尋キテ畿内・近江・丹波等ノ諸國ニ茶ヲ植エシメシガ其生殖ハ詳ナラズ、後鳥羽天皇ノ建久二年僧榮西・宋ニ渡リ茶種ヲ得テ歸朝ノ後コレヲ筑前早良郡ニ植エタリ、コレ西國ニ茶ヲ植エタル始ナリト云フ、高弁上人其種ヲ京ノ梅尾ニ分チ植エ、其後宇治

ニ移シテ漸ク諸國ニ弘マレリ、茶會モ鎌倉時代ニ禪學ノ僧支那ヨリ傳習シ來リ、後世ニ至リテ其儀大ニ流行セリ、甲州葡萄ハ文治二年ノ頃ヨリ處々ニ植エ始メシモノナリト云フ、

第三 南北朝時代

(二七)

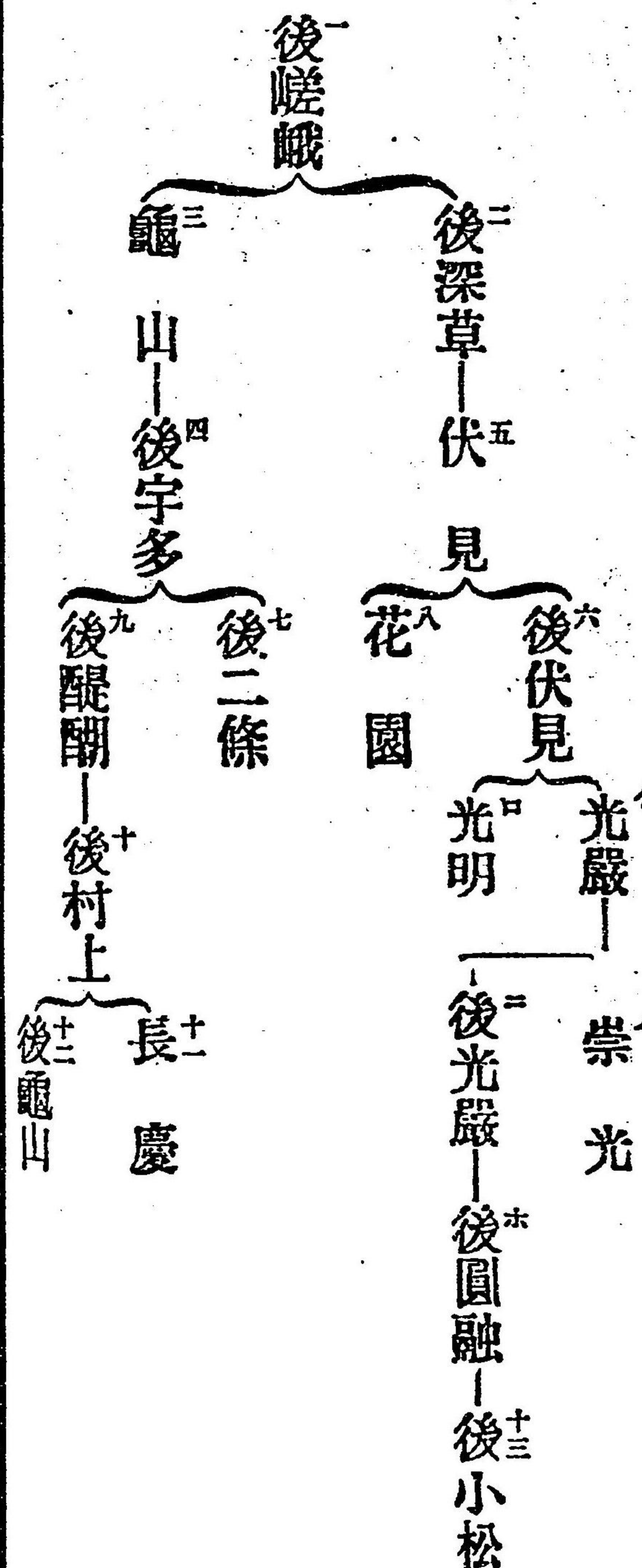
南北朝分立、

南北朝ノ分立其原因スル所、遠ク後深草龜山兩帝繼位ノ争ニアリ、此争ヤ遂ニ貞時更立ノ策ニ依テ平穩ニ歸シタリト雖モ、後醍醐天皇立チ邦良太子タルニ及ンテ稍迭立ノ約ヲ破ラントセシニ、幾モナクシテ邦良薨ゼシカバ高時遂ニ量仁親王ヲ立テ、太子トナセリ、是レ迭立ノ約ニ從フナリ、時ニ高時驕傲政ヲ失シタルヲ以テ、帝乃チ北條氏ヲ亡サント欲シ、事成ラズシテ隱岐ニ遷サレ、量仁親王帝位ニ即ク光嚴帝是レナリ後チ勤王ノ師大ニ振ヒテ後醍醐帝

(三)

京師ニ歸リ、光嚴帝ヲ廢シテ帝位ニ復ス、建武ノ中興是ナリ、既ニシテ帝政ニ怠リ、天下怨望スル者多ク、尊氏遂ニ反シテ京師ヲ陷レ、光嚴帝ノ弟豐仁親王ヲ立ツ、光明帝是ナリ、時ニ後醍醐帝吉野ヲ以テ行在所トナシ玉ヒケレバ、是レヨリ吉野ヲ南朝ト稱シ、京師ヲ北朝ト稱ス、南北兩立是ニ至リテ成ル、

後嵯峨帝以後、後深草龜山兩統迭立ノ次第ヲ圖示セヨ、



(二)

大塔宮ノ略傳、

尊雲法親王ハ後醍醐帝ノ第三子ナリ、天姿穎敏、帝特ニ之ヲ愛シ、太子邦良ノ薨スルニ及ンテ立テ、之ヲ太子トナサント欲ス、高時堅ク迭立ノ約ヲ取リテ親王ヲ立テシメズ、故ニ遂ニ僧トナリ延曆寺坐主ニ補セラレ大塔ニ居ル、因テ大塔宮ト稱ス、蓋シ親王ノ延曆寺ニ入ルハ僧徒ノ心ヲ結ビ、其力ヲ籍リテ北條氏ヲ除カント欲スルニアリ、是レヨリ常ニ帝ト審議シ、頻ニ北條氏ヲ圖リヌ、元弘ノ亂帝容易ニ笠置ニ遁カル、ヲ得タル者、全ク親王ノ謀ニ依ル、初メ高時帝ノ親王ト共ニ己レヲ謀ルヲ知リ、大ニ怒リテ帝ヲ遠島ニ遷シ、親王ヲ弑セントセシニ、親王幸ニ逃レテ十津川ニ匿レ、髮ヲ畜ヘテ名ヲ護良ト改メ、後吉野ニ據リ赤松則村ヲシテ義ヲ唱ヘシメヌ、是レヨリ官軍聲勢日ニ益振フニ至レリ、建武中興ノ業成ルニ及ビ、親王任セラレテ征夷大將軍トナル、初メ尊氏ノ京師

(三)

ニ克ツヤ護良ノ威名ヲ忌ミ、窃カニ之ヲ除カンコトヲ圖リシニ、護良モ亦尊氏ノ謀ヲ知り、自ラ請ヒテ大將軍トナリ、兵權ヲ握リテ尊氏ヲ誅セント欲ス、尊氏深ク之ヲ嫉ミ、妃藤原氏ニ結ビ、陰ニ親王ヲ陷レンコトヲ謀ル、建武元年十一月親王遂ニ事ヲ舉ゲントシテ兵ヲ徵シケレバ、尊氏誣奏シテ曰ク、大將軍廢立ヲ謀ルト、妃藤原氏傍ヨリ之ヲ贊シケレバ、帝怒リテ親王ヲ宮中ニ囚ヘ、後鎌倉ニ徙シテ窖中ニ幽シ、足利直義之カ監タリ、明年七月遂ニ直義ノ爲メニ殺サル、時ニ年二十八、

尊氏義貞ノ功勞及ビ賞賜ノ差等如何、
足利新田二氏共ニ源家ニ屬シ、義貞ノ祖義重、尊氏ノ祖義康ハ並ニ義家ノ孫ニシテ兄弟ナリ、而シテ元弘ノ亂ニ當リテ義貞ハ鎌倉ノ強敵ニ當リテ之ヲ斃シ、尊氏ハ微力ノ六波羅ニ向ヒテ之ニ克チタルノミ、二人ノ功勞固ヨリ同日ノ論ニアラザルナリ、然ルニ尊

(三)

氏ハ官左兵衛督鎮守府將軍ニ至リ昇殿ヲ聽サレ、義貞ハ僅ニ左馬助タルニ過ギズ、何ソ顛倒ノ甚クシキヤ其他賞賜ノ不公平大概此類ナリ、是レ建武中興ノ其終ヲ善クセザル所以ナリ、

尊氏ノ叛

尊氏ハ險凶狡猾ニシテ、北條氏ノ將ニ亡ビントスルヤ、去リテ官軍ニ從ヒ、後醍醐帝ノ京師ニ還リ、中興ノ業ヲ開クニ及ンデ、准后藤原氏ニ結ヒテ重賞ヲ辱クスルモ矜貴自ラ居リ、意望尙厭カス、必ス源賴朝ノ比ヲ得ント欲シ、常ニ時變ヲ窺ヒ、弟直義モ亦之ガ爲ニ計畫セリ、時ニ中興ノ政府ハ組織完備シ、能ク文武官ヲ并用シタリト雖モ、北條氏ノ時ヨリ武士ハ常ニ勢ヲ得テ、公卿ヲ見ルコト婦女ノ如クナリシニ、間ニ無功ノ公卿ニシテ却リテ其賞ヲ受クル多キヲ見テ心平ナラズ、當時内謁頻ニ行ハレ、土木盛ニ起リ政常ナカリシカバ、衆情憤怨シ復タ武門ノ治ヲ思フニ至レリ、尊

氏此時ニ乘シテ陰ニ武人ヲ懷ケ、護良親王ヲ陷レ、以テ時機ノ至ルヲ待テリ、建武二年北條時行鎌倉ニ反スルニ及ビテ自ラ往キテ之ヲ伐タント請フ、帝之ヲ許ス、尊氏又征夷大將軍ニ任セラレシコトヲ乞フ帝許サズ、尊氏怒リ辭セズシテ發ス、諸武人ノ皇室ヲ怨望スル者爭ウテ之ニ從ヘリ、尊氏直義ト合シテ時行ヲ走ラシ遂ニ鎌倉ニ入ル、帝乃チ勅シテ師ヲ還サシム、尊氏勅ヲ奉セズ、此ニ至リテ府ヲ開キ、自ラ征夷大將軍關東管領ト稱ス、帝震怒尊氏ノ官爵ヲ奪ヒ、義負ニ命シテ之ヲ討セシメヌ、獨リ如何ンセン當時皇室ハ衆望ノ離ル、所ニシテ、有爲ノ武士皆足利氏ニ從フチ、忠臣楠氏父子新田諸族等皆斃レ終ニ足利氏ヲシテ霸業ヲ遂ケシムニ至レリ、

(三)

楠正成ノ事跡ヲ舉ゲヨ、

元弘年間後醍醐帝北條氏ヲ圖リ、出テ、笠置ニ幸スルヤ、楠正成

召サレテ行在ニ至リ、討賊ノ命ヲ受ケヌ、正成ハ左大臣橘諸兄ノ末裔ニシテ、世々金剛山ノ下ニ住セリ、性英邁義烈兵ヲ用ウル神ノ如シ、命ヲ受ケテヨリ赤坂千窟ノ諸城ヲ築キ、數々奇計ヲ用ヰテ賊ヲ敗リ、四方正成ノ風ヲ聞キテ之ニ應ズルモノ多ク、遂ニ北條氏ヲ亡シ、建武中興ノ大業ヲ奏セリ、識者皆正成ヲ推シテ首功トナス、然ルニ帝准后ノ内奏ヲ容レ、却リテ之ヲ尊氏義貞ノ後ニ置キ、僅ニ檢非違使河内守ニ拜セシノミ、延元元年正月尊氏鎌倉ニ據リテ反シ、大舉西上スルヤ正成義貞ト謀リテ之ヲ九州ニ逐ヘリ、同五月尊氏弟直義ト九州ノ兵ヲ發シ水陸並ヒ進ムニ及ビ、義貞之ヲ兵庫ニ防ゲル利アラズ、朝廷乃チ正成ヲシテ赴キ援ハシメントス、正成奏シテ曰ク、今賊衆ヲ盡シテ來ル、其銳鋒當ルベカラズ、如カズ車駕再ビ叡山ニ幸シ、尊氏等ヲシテ縦マ、ニ京師ニ入ラシメ、臣義貞ト狹ミ擊チテ之ヲ壓ニセンニハト、參議藤原清忠

(三)

之ヲ聽カズ、正成乃チ拜辭シテ櫻井驛ニ至リ、其子正行ニ恩賜ノ刀ヲ與ヘ、諭スニ討賊ノ事ヲ以テシ、進ミテ兵庫ニ至リ湊川ニ陣ス、時ニ直義ノ陸兵二十餘萬ニシテ正成ハ僅七百騎ヲ有スルニ過ギズ、正成腹背敵ヲ受ケ、弟正季ハ縱横奮戰シ、殆ト直義ヲ護ントスルニ至ル、然レモ尊氏ノ兵其後ニ迫ルニ會ヒ、轉シテ之ト戰ヒ、血戰數十合終ニ正季ト共ニ斃ル、時ニ年四十三、天皇追悼シテ正三位左近衛中將ヲ贈ル、

新田義貞ノ事跡ヲ問フ、

新田義貞ハ上野ノ人源義家ノ裔ナリ、初メ北條氏ニ事ヘシガ、元弘ノ亂纏リテ勤王ノ志ヲ起シ鎌倉ヲ亡シ、功ヲ以テ左馬助ニ任ゼラレ、上野播磨ノ守護職ヲ兼ヌ、尊氏叛スルニ及ンテ義貞討賊ノ事ヲ委任セラレ、屢寡兵ヲ以テ尊氏ノ大軍ヲ敗リ、尊氏ガ九州ノ兵ヲ擧ゲテ東上シ、正成湊川ニ戰死スルニ及ビテ京師ニ還リ、帝

ヲ奉シテ叡山ニ據ル、尊氏東寺ニ據リテ行在ヲ犯シ、并義貞等戰ウテ之ヲ敗リ、進ミテ東寺ニ迫ル、然レモ衆寡敵セズ竟ニ敗レ還ル、尊氏佯リ降り車駕京師ニ還ランコトヲ請ヒ帝之ヲ許ス、義貞聞キテ大ニ驚キ、走セテ其非ヲ諫ム、帝乃チ義貞ニ勅シテ曰ク、賊勢甚々銳ク天未タ朕ニ幸セズ、我軍屢窮危ニ陥ル、故ニ權リニ和ヲ講シ以テ時變ヲ待ントス、汝宜ク太子(恒良)ヲ奉シテ北國ヲ經略シ以テ恢復ヲ圖ルベシト、義貞感泣シ、明日弟義助ト太子及ヒ尊良親王ヲ奉シテ越前ニ赴ク、時ニ延元元年十月ナリ、翌年足利高經・高師泰等大兵ヲ帥キテ金崎城ヲ攻ム城中糧盡キ遂ニ陥リ尊良親王自殺シ、太子賊ノ奪フ所トナル、義貞退キテ杣山城ヲ保テリ、此時ニ方リテ四方勤王ノ師稍振ヒ、義貞ノ軍威亦漸ク盛ナリ、乃チ進ミテ高經ヲ足羽城ニ攻メ七月藤島ヲ攻ム、義貞自ラ五十騎ヲ帥キテ進ミ、賊兵三百ニ田中ニ遇フ、賊四面ヨリ亂射シテ、

(三)

義貞ノ肩間ニ中ツ、義貞乃チ自刎シテ死ス、時ニ年三十八、賊屍
ヲ檢シテ錦囊中ノ詔書ヲ得、始テ其義貞ナルヲ知レリト云フ、
楠正行ノ事跡、

正行ハ正成ノ子ナリ、父ト櫻井ニ訣別シテ河内ニ歸リシガ、正成
湊川ニ死シテ人其首ヲ河内ニ送ルニ及ビ、正行之ヲ見テ大ニ悲ミ、
直チニ起チテ持佛堂ニ入り自刃セントセリ、其母驚キテ之ヲ止メ
テ曰ク、先君特ニ汝ヲ殘シテ郷ニ歸ラシメタル者、豈斯ノ如キ行
アラシメンガ爲ナランヤ、唯賊ヲ亡シテ叡慮ヲ安セシメンガ爲ノ
ミト、其刀ヲ奪ウテ泣キ且諫ム、正行感泣ス時ニ年十一、是ヨリ
一意興復ヲ謀リ、日夜軍事ヲ習フ、湊川ノ敗後後醍醐帝ノ穴生ニ
幸スルヤ、正行和田正朝等ヲ隨ヘテ奉迎シ、吉野ヲ以テ行宮トス、
帝正行ヲ正四位下ニ叙シ帶刀ニ任シ後父ノ官ヲ襲ウテ左衛門尉河
内守トナラシム、後村上天皇ノ正平二年ニ至リ、正行兵ヲ攝津ニ

出シ、尊氏ノ將細川顯氏・山名時氏等ヲ敗リ兵勢大ニ振フ、翌三
年正月尊氏・高師直師泰ヲシテ兵八萬ヲ帥テ來リ撃タシム、是
ニ於テ正行一族ヲ率テ行在ニ至リ、奏シテ曰ク、臣亡父ノ遺命
ヲ奉シ、日夜國讐ヲ報復スルヲ以テ念トナス、然レモ稟性多病徒
ニ婦女ノ手ニ死シテ不忠不孝ニ終ランコトヲ恐ル、今賊大舉來犯
スト聞ク、是臣カ命ヲ効スノ秋ナリ、伏シテ願クハ一タヒ天顏ヲ
拜シテ行クヲ得ント、帝簾ヲ掲ケテ正行等ヲ視、之ヲ慰諭シテ
曰ク、朕大ニ汝父子ノ忠ヲ嘉ミシ、實ニ汝ヲ以テ股肱トナス、必
ズ自愛シテ敢テ輕々シク死スルコト勿レト、正行嗚咽垂泣シ、出
テ、後醍醐帝ノ廟ニ謁シ、告別シテ其壁上ニ將士ノ名ヲ遺シ、一
首ヲ加フ、曰クかへらじとかねて思へは梓弓なき數にいる名をぞ
どぶむるト、遂ニ進ミテ四條畷ニ陣シ、三百騎ヲ以テ突進シ、師
直ノ中軍ヲ衝ク、衆皆奮戰シ、一以テ百ニ當ラサルナシ、賊兵萎

(三五)

靡シ死屍山ヲナス、此日血戰朝ヨリ夕ニ至リ、卒死シ馬斃レ、餘
 所五十餘人ニ過ギズ、正行大呼シテ敵ヲ衝キ直ニ師直ニ迫ル、
 賊四周シテ矢ヲ放チ正行全身矢ヲ被リ疲困進ムコト能ハズ、終ニ
 正時ト相刺シテ死ス、時ニ年二十二、從兵悉ク之ニ殉ス、正行ノ
 弟正儀後チ復タ河内ニ據リテ能ク戰フ、南朝一時ノ安ヲ保ツチ得
 タルハ蓋シ楠氏父子ノ功ナリ、

明德ノ役トハ如何、

初メ山名時氏五州ノ守護タリシガ、時氏死スルニ及ビテ、子師義
 時義地ヲ山陽ニ略シ、義理氏清南海ヲ取リ、山名氏ノ領スル所十
 州ニ跨ルニ至ル、世呼テ六分一氏ト云フ、將軍義滿之ヲ惡ミ、常
 ニ之ヲ誅鋤セント欲ス、時義ノ二子時烈氏幸分テ但馬伯耆ノ守護
 チ襲フ、師義ノ子滿幸氏清ト共ニ之ヲ義滿ニ讒ス、義滿乃チ二人
 チ遣ハシ時烈氏幸チ攻メシメ之ヲ走ラシ、其地チ二人ニ分與ス、

(三六)

南北朝ノ合一、

明德(北朝)二年十月時烈氏幸京師ニ入り冤ヲ訴フ、義滿乃チ氏清
 チ見テ旨ヲ諭サント欲セシニ、氏清義滿ヲ見ザリシカバ義滿之
 チ怒レリ、時ニ滿幸罪ヲ獲テ出雲ノ守護ヲ罷メラレシカバ時烈氏
 幸ノ邑モトニ復セリ、是ニ於テ滿幸氏清相共ニ兵ヲ舉ゲテ反シ義
 理亦之ニ應ジ進ンテ男山ニ陣シヌ、義滿乃チ自ラ堀川ニ陣シ諸
 將ヲ遣ハシテ之ヲ伐タシム是ニ於テ大内義弘ハ氏清ヲ敗リテ之
 殺シ、細川頼元ハ滿幸ヲ撃チテ之ヲ走ラセ亂平ク、是チ明德ノ役
 ト云フ、

南北朝分裂ノ當初ハ南朝モ亦盛ニシテ、大和・河内・紀伊・伊賀・伊
 勢・美濃・尾張・遠江・越前・越中・越後・信濃・上野・武藏・出雲・伯耆・備後・
 備中・安藝・石見・播磨・伊豫・淡路・常陸・陸奥等ノ諸將士多ク南朝ニ屬
 セシカ、正成・義貞・正行等漸次戰死スルニ及ビテ官軍益衰へ、後龜

山天皇ノトキニ至リテハ、南朝ノ僅ニ恃ミトセシ千窟城モ陥リ、唯
 僅ニ帝統ノ名ヲ一隅ニ存スルノミ、足利氏モ亦久シキ兵革ニ倦ミ
 シカバ、遂ニ往時ノ如ク後深草龜山兩統ノ迭立ヲ約シテ南北兩朝
 ノ和議成リ、南朝ノ後龜山帝入京シテ神器ヲ北朝ノ後小松帝ニ傳
 フ、延元元年(紀元一千九百九十六年)ヨリ此ニ至ルマデ南朝ハ三
 代(後醍醐後村上後龜山)北朝ハ四代(光明崇光後光嚴後圓融)ヲ經
 テ相分カル、コト五十七年、是ニ至リテ兩朝一ニ歸セリ、

第四 足利時代

(三)

足利幕府ガ鎌倉管領ヲ置キタル所以及ビ其結果如何、
 初メ尊氏覇府ヲ鎌倉ニ立テント欲セシガ南朝ノ吉野ニ在ルヲ以
 テ、京師ヲ去ルヲ危ミ、先ヅ室町ニ居ヲ定メテ霸業ヲ開キ、別ニ
 子基氏ヲ鎌倉ノ管領トナシテ東國ヲ鎮セシメ、兼ネテ室町ノ藩屏

(三)

タラシメタリ、蓋シ關東ノ足利氏ニ叛スルノ眞アリタルニヨルナ
 リ、是ヨリ基氏大ニ東國ノ士心ヲ得、相傳ヘテ孫滿兼ニ至ル、此
 時鎌倉ノ兵勢室町ニ倍シ、萬事室町ニ擬シ天下二人ノ將軍ヲ生ズ
 ルニ至リ、室町ノ威令關東ニ行ハレズ、大内義弘ノ室町ニ叛スル
 ヤ、管領滿兼謀ヲ通シテ將軍義滿ヲ圖ルニ至リケレバ、室町ノ藩
 屏却リテ室町ノ煩ヲナスニ至リヌ、

應永ノ役トハ如何、

紀元二千五十九年後小松天皇ノ應永六年大内義弘亂ヲ作ス、初メ
 今川貞世筑紫ヲ鎮セシ時、義弘之ニ説キテ曰ク、方今ノ勢弱者ハ
 誅セラレ強者ハ禍ヲ免ル、公何ソ我及ヒ大友氏ト兵ヲ連ネテ以テ
 自ラ強クセザルト、貞世聽カズ、義弘慙懼遂ニ貞世ヲ義滿ニ讒ス、
 義滿乃チ貞世ヲ召還シ義弘ヲ以テ之ニ代フ、義弘ノ兵力日ニ強ク
 遂ニ反チ謀リ兵ヲ擧ゲテ和泉堺浦ニ據ル、是ニ於テ土岐詮直ハ尾

(三)

張ニ起リ、京極某ハ近江ニ起リ、山名時清ハ丹波ニ起リテ之ニ響
應セリ、義滿乃チ親ヲ男山ニ軍シ、畠山基國・斯波義將・細川頼元
ヲ遣ハシ、兵三萬ヲ將非テ之ヲ攻メシメ、義弘ヲ斬リ詮直時清等
ヲ討チ悉ク之ヲ平ゲタリ、時ニ鎌倉管領足利滿兼、義弘ト謀ヲ通
シ東西並ビ起リテ京師ヲ攻メントセシニ義滿ノ探知スル所トナリ
テ事成ラズ、是ヲ應永ノ亂ト云フ、

足利氏國體ヲ辱シメタル事柄ヲ問フ、

三代將軍義滿ハ後小松天皇ノ應永八年使テ明ニ遣ハシ、金千兩馬
十匹及ビ兵器扇紙等ノ物ヲ奉リ書辭甚ダ恭シ、明年明主義滿ヲ封
シテ日本國王トナスニ及ビ、義滿喜ビテ之ヲ受ケタリ、是レ國體
ヲ辱シムルノ大ナルモノニ非ズヤ、八代將軍義政ハ銀閣寺ヲ建テ
、國用給セザルニ及ビ、明ニ哀願シテ錢ヲ乞フコト三回、終ニ錢
十萬貫ヲ賜ハラバ我國用足ルベシト哀求スルニ至リテハ、何ノ辭

(三)

ヲ以テ之ヲ評スベキヤヲ知ラズ、足利氏ノ國體ヲ辱シムル茲ニ至
リテ極レリト云フベシ、

關東管領足利氏ノ亡滅、

四代將軍足利義持ノ薨ズルヤ職ヲ繼グベキ者ナカリケレバ、衆相
議シテ鎌倉ノ管領持氏ヲ立テントセシニ、畠山滿家闖チ石清水祠
ニ探リテ義持ノ同母弟僧義圓ヲ立ツ、將軍義教即チ是ナリ、是ヨ
リ持氏心平ナラズ、常ニ曰ク吾レ何ソ還俗將軍ニ屈センヤト、執
事上杉憲實之ヲ諫ムレモ聽カズ、後互ニ相惡シ、是ニ於テ兵ヲ
發シテ憲實ヲ攻メントセシカバ憲實出テ、上野ニ走リ、急チ義教
ニ告ゲタリ、義教乃チ兵ヲ遣ハシテ持氏ヲ伐ツ、持氏ノ兵散亡シ
ケレバ窮迫シテ出テ降り後遂ニ自殺シテ事平ク、基氏管領タリシ
ヨリ是ニ至ルマデ四代(基氏氏滿兼持氏)ニシテ亡ク、

嘉吉ノ亂

足利五代將軍義教赤松貞村ヲ寵シ赤松滿祐ノ領國ヲ削リテ之ニ與ヘントセシカバ、滿祐怒リテ子教康ト謀リ、嘉吉元年六月兵三百ヲ第中ニ伏セテ義教ヲ襲シ、宴酣ナル時、遂ニ義教ヲ弑シテ火ヲ邸ニ縱チ相率テ其邑播磨ニ奔リ、足利直冬ノ孫義尊ヲ立テ、主トナシ城ニ據リテ反旗ヲ舉ケヌ、是ニ於テ細川持之細川持常・赤松貞村・山名持豐・山名熈高・等急ニ白旗城ヲ圍ミケレバ、城中糧盡キテ戰フコト能ハズ、士卒逃亡シ、滿祐ノ一族六十餘人皆自殺シ、教康伊勢ニ走リテ國司北畠持康ノ爲メニ誅セラレ、事全ク平ギヌ之ヲ嘉吉ノ役ト云フ、

(三)

應仁ノ亂ノ顛末ヲ記セ、

應仁ノ亂其原因スル所三アリ、八代將軍義政其弟義視ヲ立テ、嗣トナシ、其、誓ヒテ曰ク若シ男ヲ舉ゲバ僧トナサント、乃チ細川勝元ヲシテ義視ヲ輔ケシメヌ、然ルニ子義尙ヲ生ムニ及ビ、其母

之ヲ僧トナスニ忍ビズ、山名持豐(宗全)ニ托ノ之ヲ擁立セシメシコト其ノ一原因ナリ、勝元初メ子ナキヲ以テ(宗全)ノ子ヲ養ヒテ嗣トナシ、已ニシテ勝元ノ夫人男ヲ生ミケレバ、即チ養子ヲ出シテ僧トナシ、宗全ノ怒ヲ招キタルコト其二原因ナリ、畠山政長ハ畠山義就ト家督ヲ爭ヒ、斯波義廉ハ斯波義敏ト繼承ヲ爭ヒシニ、政長義敏ハ勝元ニ頼リ、義就義廉ハ宗全ニ依リタルコト其三原因ナリ、是ニ於テ應仁元年終ニ兩者ノ破裂ヲナシ、勝元宗全共ニ兵ヲ起シテ相戰フニ至レリ、勝元ハ二十二州ノ兵十萬餘ヲ發シ、宗全ハ二十五州ノ兵十五萬ヲ召シ、勝元ハ東ニ陣シ持豐ハ西ニ陣シ、京中戰鬪己ム時ナシ、東軍毎ニ利ヲ失ヒシガ、勝元ガ將軍義政ヲ擁シ、又天皇及上皇ヲ軍中ニ迎フルニ及ビ東軍屢利ヲ得ルニ至レリ、西軍モ亦繼テ義視ヲ奉シタレバ恰モ將軍兄弟相爭フノ外觀ヲ呈セリ、斯クテ文明五年持豐勝元相尋テ卒シ、未ダ幾クナラズ、

(三)

諸將亦散歸セシヲ以テ争擾始メテ靜平ニ歸シヌ、應仁以降是ニ至リテ十一年、京師兵馬ノ區トナリ文武ノ第宅皆兵燹ニ罹レリ、

足利時代文學ノ有様ヲ問フ、

戰亂ノ時代ニ文學ノ衰退スルハ自然ノ勢ニシテ鎌倉末ヨリ足利時代ニ及ビテハ文學全ク衰へ殆ト滅絶セントスルニ至リ、文筆ノ事ニ堪フル者ハ、僅ニ五山ノ僧徒ニ過ギザリシト云フ、是時ニ當リテ僅ニ文學ノ脈ヲ傳へタルハ、足利學校・金澤文庫及ヒ僧徒ノ私塾アリシノミ、

(三)

足利時代ノ德政トハ如何ナルコトゾ、

德政トハ一切負債ヲ償ハザルノ法令ナリ、中古ノ頃既ニ此法令ヲ出シタルコトアレバ、ソハ朝廷仁政ノ一トシテ租税ノ滞納セシモノナドチ、凶年ニ當リテ一切免除シテ償ハシメザルノ法ナリキ、然ルニ足利時代ニ至リテハ、大ニ其意義ヲ異ニシ全ク暴政ノ一ト

(三)

我が國耶蘇教ノ起原如何、

天正ノ頃、葡萄牙人・西班牙人等豊後ニ來リ耶蘇教ヲ弘メシニ大友義鎮之ヲ信シ漸ク九州ニ傳播セリ、是レ我が國ニ於ケル耶蘇教ノ起原ナリ、

(三)

足利時代家屋ノ構造如何、

當時ハ總テ豪華ヲ好ミ、花御所・金閣・銀閣ノ建築アリ、通常ノ家

(三七)

屋ニハ唐破風ヲ附シ檜皮ヲ以テ其屋根ヲ葺クコト上等社會ニ行ハレタリ、下民ノ屋根ニハ藁葺・萱葺・とりふき家根・ナド行ハレタリ、とりふき屋根トハ板ヲ并ベテ其上ニ石或ハ木片ヲ載セタルモノナレバ、家根ノ勾配ヲ低クセザレバ危シト云フ、

^{カミシモ}上下ノ起原如何、

上下ト稱セシハ、後世ノ麻上下ニ限ルニアラズ、素袍直垂其他

ノ裝束等皆上下共ニ具シタルヲ上下ト呼ビシナリ、足利氏ノ頃始

メテ肩衣半袴ノコト見エタリ、コレ後世麻上下ノ起原ナルベシ、

衣服ニ附スル紋章ノ起原如何、

(三六)

衣服ノ絞ハ上代ニハ必ズ五ツノ制アリシニアラズ、天皇ノ御袍ニ

桐竹鳳凰麒麟ノ織紋アリ、又赤色ノ御袍ニハ唐草ニ菊ノ御紋ア

リ、後世朝廷ノ徽號ニ用ヰル菊桐ハ御袍ノ紋ヨリ出デシモノナル

ベシ、臣下ノ袍モ亦家々ニ定マレル紋アリテ皆其服ノ總体ニ附ケ

タルモノナリ、武家ノ絞ハ初メ旗幕等ノ徽號ニ用ヰ、後ニ至リテ衣服ニモ附クルコト、ナリシナリ、

(三九)

後北條氏ノ興亡、

伊勢長氏ハ平維盛ノ遠孫ナリ、應仁中義親ノ伊勢ニ走ルヤ長氏之

ニ從ヒテ伊勢ニ赴キシガ、義親京師ニ歸ルモ長氏尙留リテ伊勢ニ

アリ、時ニ將軍義政政ニ怠リ將士離叛シ、權臣山名細川各私黨ヲ

立テ戰爭止ム時ナシ、長氏人トナリ聰敏明決大志ヲ懷キ、幕政ノ

衰頽ニ乘シテ天下ヲ圖ラント欲シ、陰カニ財ヲ散シテ豪傑ニ結ビ、

先ツ關東八州ヲ定メテ大業ヲ舉ゲント欲シ、後土御門天皇ノ文明

八年奮然諸將ヲ帥ヰテ駿河ニ至リ今川義忠ニ依ル、義忠卒スルニ

及ンテ其子氏親ヲ輔ケテ功アリ、將士長氏ヲ推シテ八幡山ノ城主

トナス、後長氏徙リテ高國寺城ニ居リ陰ニ伊豆ヲ取ラントス、會

左兵衛督源政知其子茶々丸ノ爲メニ弑セラレシガ、長氏今川氏

(四)

河中島ノ戰如何、

ノ兵ヲ併セテ伊豆ニ入り茶々丸ヲ誅シ(後土御門天皇延徳三年)遂ニ伊豆ニ留リテ恩威ヲ布キ、盡ク伊豆ヲ從ヘテ居テ韮山城ニ定メ、韮山素ト北條氏アリ、長氏其女ト婚シ、氏ヲ改メテ北條ト稱シ、髮ヲ削リテ早雲ト號ス、長氏遂ニ相摸ヲ取ランコトヲ圖リシモ箱根ノ險ヲ憚リテ未ダ發セズ、明德四年欺キテ遂ニ小田原ヲ陷レシカバ、近隣ノ豪傑其威風ヲ望ミテ來屬スル者太々多ク、後柏原天皇ノ永正十五年ニ至リテ全ク相摸ヲ得ルヲ取タリ、早雲卒シテ後チ、子氏綱孫氏康皆ヨク父祖ノ遺業ヲ守リ、兩上杉氏ヲ亡シテ威關東ニ振フ、氏康ノ孫氏直ニ至リ羽柴秀吉ノ攻ムル所トナリテ國亡フ、

世ニ著名ナル河中島ノ戰爭トハ、則チ武田信玄上杉謙信ノ二豪傑ガ甲越ノ兵ヲ舉ゲテ雌雄ヲ爭ヒシ一大激戰ナリ、故ニ今先ツ武田

上杉二家ノ祖ヨリ説キ進ンテ本題ニ入ラン、武田信玄初メ晴信ト稱ス、新羅三郎源義光ノ遠孫ナリ、父ヲ信虎ト云フ、信虎嘗テ少子信繁ヲ愛シ信玄ヲ廢セント欲セシヲ以テ、信玄常ニ愚人ノ態ヲ装ウテ自々晦マシ、陰ニ駿河ノ國主今川義元ニ依リ、其力ヲ藉リテ父信虎ヲ逐ヒ、甲斐ニ自立セリ、時ニ天文七年ナリ、是ヨリ信玄ハ信濃ノ數城ヲ取り、武田氏ノ威北方ニ振ヘリ、上杉謙信ハ平良文ノ遠孫長尾爲景ノ第四子ナリ、父爲景謙信ヲ愛セズ以テ僧ト爲サント欲ス、謙信肯テ僧ノ事ヲ學バズ、爲景死スルニ及ビ兵ヲ起シテ越後椽尾城ニ據リ、兄晴景ト戰ツテ之ヲ殺シ、遂ニ越後ノ主トナル、是レ天文十六年ノコナリ、時ニ信濃ノ村上義清信玄ノ爲メニ追ハレ、遁レテ越後ニ來リ、謙信ニ謁シテ其救援ヲ請ヘリ、謙信之ヲ諾シ信玄ヲ伐タントス、是レ河中島戰爭ノ原因ナリ、天文十六年十月信玄謙信共ニ信濃ニ入り、河中島ニ至リ水ヲ挾ンテ

陣ス、兩軍戰フコト卯ヨリ未ニ至リ勝敗未ダ決セズ、謙信兵ヲ分チ上流ヲ渡リテ信玄ノ後ヲ襲ヒ、大ニ信玄ノ軍ヲ敗リ、多ク將士ヲ殺セリ、謙信ノ兵モ亦死傷頗ル多シ、乃チ引キ歸ル、是ヲ河中島第一ノ戰トス、弘治二年三月信玄既ニ盡ク信濃ヲ定メ謙信ト復河中島ニ對陣セリ、信玄夜兵ヲ派シテ越軍ノ後ヲ襲ハントセシニ、謙信大霧ニ乘シテ直ニ甲軍ノ營ニ迫リシカバ軍不意ニ驚キ大ニ潰エタリ、時ニ甲斐ノ別軍ハ越陣ノ後ニ出デシニ、營中隻騎ナクシテ河中島ノ戰聲雷ノ如クナリシカバ、乃チ歸リテ越軍ノ後ニ出デタリ、是ニ於テ甲斐ノ本軍勢ヲ得テ返リ戰ヒ、越軍大敗甲軍疲レテ復々追撃セズ、是ヲ河中島第二ノ戰トス、同年八月謙信復々河中島ニ出ヅ、信玄敢テ出デ戰ハズ、薄暮越軍營ヲ掃ウテ將ニ去ラントスルモ、信玄其謀アルヲ知リテ敢テ追撃セズ、天明ニ及ンテ果シテ越軍ノ陣ヲ嚴ニシテ待ツヲ見ル、信玄乃チ伏兵ヲ山間ニ設

(四)

ケテ戰ヲ挑ミシニ、謙信之ヲ追撃セシガ亦兵ヲ收メテ歸リヌ、是ヲ河中島第三ノ戰トス、今川義元甲越連年兵結ビテ解ケザルヲ憂ヘ、爲ニ和ヲ媾ゼシメタレバ、和議忽チ破レテ永祿四年兩軍西條山ニ戰ヘリ、斯クテ兵ヲ交フルコト前後五回、勝敗未ダ決セズ、兩將相尋ギテ病死セシヲ以テ事息ミタリ、

嚴島ノ戰ヲ舉ゲヨ、

弘治元年陶晴賢ノ其主大内義隆ヲ弑スルヤ、義隆書ヲ遺シテ元就ニ託スルニ陶氏ヲ討スルヲ以テセリ、元就乃チ朝ニ請ヒテ晴賢ヲ討スルノ詔ヲ得、書ヲ遠近ニ移シテ兵ヲ集メ、諸子ト謀リテ曰ク、彼ノ兵三萬我兵五千、衆寡懸絶與ニ平地ニ戰フベカラズト、乃チ嚴島ニ城キテ以テ晴賢ヲ待テリ、晴賢兵二萬戰艦千餘艘ヲ帥テ來リテ嚴島ヲ攻ム、城兵堅ク守リテ屈セズ、元就別ニ自ラ精兵三千ヲ帥テ草津ニ至リ、晴賢ト海ヲ隔テ、陣セシガ、一夜大風雨ニ

(四)

會シ潜ニ船ヲ發シ、浪ヲ破リテ直チニ賊陣ノ背ニ出ヅ、賊軍風雨
 ナ恃ンテ備ヲ設ケズ、元就ノ俄ニ鼓噪シテ進ムヲ聞キ、大ニ驚キ
 テ暗中ニ相撃チ、遂ニ大敗シテ晴賢自殺セリ、是ヲ嚴島ノ戰ト云
 フ、是ヨリ元就ノ威關西ニ振フ、

桶峽ノ戰

織田信長ハ平重盛ノ後裔ニシテ父ヲ信秀ト云フ、信長幼ニシテ英
 武、父信秀死スルノ後尾張諸城ヲ攻略シテ稍志ヲ得タリ、永祿三
 年今川義元已ニ駿遠參ヲ定メ、餘勢ヲ以テ進ミテ尾張ニ入ル、鷲
 津丸根ノ守將急ニ信長ニ告グ、信長赴キ援ハント欲シ夜宴ヲ設ケ
 テ將士ヲ饗シ、黎明單騎鞭ヲ揚ゲテ發ス、能ク從フ者僅ニ十餘人、
 熱田祠ニ至ル比ヒ千人ヲ得タリ、行々諸城ノ兵ヲ發シ兵凡ソ三千
 許ニ至ル、東望スレバ鷲津丸根ノ二城方ニ火起リシヲ以テ將士遂
 巡セリ、信長益馬ニ鞭チテ進ミ勝ヲ一舉ニ制セントス、時ニ義元

(三)

桶峽ニ陣シ雷雨ヲ賴ミテ備ヲ設ケズ、信長乃チ鼓旗ヲ伏セ馳セテ
 桶狹ニ至リ、高丘ヨリ義元ノ營ヲ窺ヒ、馬上槍ヲ揮ヒテ走セ下ル、
 義元ノ軍大ニ驚キ、狼狽出ヅル所ヲ知ラズ、毛利秀高進ンテ義元
 ナ斬リ、義元ノ軍遂ニ大ニ敗ル、是ヲ桶峽ノ戰ト云フ、是ヨリ信
 長ノ名天下ニ振フ、

三形原ノ戰

徳川家康・武田信玄ヲ撃タンコトヲ欲シ、謙信ト好チ通シ夾ミテ之
 ナ攻メンコトヲ約ス、元龜三年四月謙信兵ヲ信濃ニ出シ遙ニ家康
 ナ援フ、十二月信玄進ミテ三形原ニ陣シ濱松城ニ迫リシカバ、家
 康出テ戰ハントセシニ、信長ノ將佐久間信盛諫メテ曰ク、信玄ハ
 老將ナリ輕シク戰フ勿レト、家康曰ク嚮ニ信玄小田原ヲ攻メテ城
 下ニ迫リシハ氏康出テ戰ハザリシカバ、世以テ怯トナセリ、今ヤ
 敵兵我城下ニ迫レルニ敢テ一矢ヲ發セザルハ丈夫ニアラズト、諸

(四)

將固ク諫メテ止ム、既ニシテ信玄伴リ退キシヲ以テ家康出テ、三形原ニ陣シ敵兵ヲ撃退セシニ、信玄乃チ奇兵ヲ以テ横サマニ家康ノ軍ヲ撃チシカバ家康遂ニ大敗シテ濱松ニ歸リ命ジテ城門ヲ開放セシメタリ、敵軍逃ルヲ追ウテ城下ニ逼リ、城門ノ閉ヂサルヲ見テ伏アラソコヲ恐レ、敢テ入ラズ、家康依リテ免ル、ヲ得タリ、本能寺ノ變トハ如何、

織田信長已ニ諸國ヲ平ゲ、其將羽柴秀吉ヲシテ、中國ヲ定メシメントス、天正十年秀吉兵ヲ進メテ高松城ヲ圍ミシニ、毛利輝元數萬騎ヲ帥キテ來リ援セシカバ、秀吉急ニ信長ニ告ゲテ援兵ヲ求メヌ、信長乃チ大ニ兵ヲ徵シ、池田信輝明智光秀等ヲシテ先ヅ發セシメ、子信忠ト共ニ繼ギ進ミテ京師ニ至リ本能寺ニ館セリ、初メ信長將士ヲ遇スルニ禮節ヲ設ケズ、光秀屢爲メニ罵辱セラレ、心窃ニ之ヲ怨メリ、信長曾テ森蘭丸ニ向ツテ三歳ノ後チ志賀郡ヲ與フルコ

(四)

トヲ約セリ、時ニ志賀郡ハ光秀ノ領ナリケレバ、光秀聞キテ以爲ラク、三歳ノ後我必ズ誅セラレント、此時ニ當リ光秀亦命ゼラレテ信長ノ西征ニ從ヒシガ、丹波ニ入りテ愛宕山下ニ宿セシト、卒然傍人ニ問ウテ曰ク、本能寺ノ溝深サ幾尺ト、衆聞キテ之ヲ異メリ、既ニシテ光秀悉ク丹波ノ兵ヲ發シ、命ヲ奉シテ西秀吉ヲ援フト宣言シ、道ヲ扞ケテ桂川ヲ渡リ、颯言シテ曰ク敵ハ本能寺ニアリト、衆始メテ其叛スルヲ知ル、黎明光秀本能寺ヲ襲フ、信長大ニ怒リ、弓ヲ手ニシテ出テ蘭丸以下拒ギ戰ヒシガ、既ニシテ信長火ヲ放チテ自殺シ、蘭丸以下百餘人皆力戰シテ之ニ死セリ、信忠變ヲ聞キ馳セテ本能寺ニ赴カントシ、煙焰天ヲ蔽フヲ見テ乃チ轉シテ二條城ニ入り、亦光秀ノ圍ム所トナリテ自殺セリ、是ヲ本能寺ノ變ト云フ、

羽柴毛利和親ノ顛末ヲ問フ、

天正十年羽柴秀吉高松城ヲ圍ミ毛利輝元ト相持セリ、輝元・秀吉ノ
 援兵將ニ至ラントスルヲ聞キテ、和ヲ請ヘリ、秀吉之ヲ許シ將ニ
 共ニ盟結セントス、會本能寺ノ變報至ル、秀吉之ヲ秘セズ具ニ其
 變ヲ告ゲテ曰ク、事已ニ此ニ至ル、公等猶和セント欲スルカ、我
 ナ撃タント欲セバ今日ニ若クハナシト、輝元大ニ喜ビ諸將ヲ會シ
 テ和戰ヲ議セシニ、皆曰ク機乘ズベシト、隆景獨從ハズシテ曰ク、
 應仁以降此ニ百餘年、亂極リテ治ニ就クノ期將ニ至ラントス、必
 ス豪傑ノ出テ、之ヲ一掃スル者アラン、吾秀吉ヲ見ルニ其人ニ非
 ザルナキヲ得ンヤ、何ゾ知ラン信長ノ死スル秀吉一統ノ機ナルコ
 トナ、殊ニ見ヨ具サニ變故ヲ告ゲテ秘スルコトナキナ、是レ決シ
 テ常人ノ度ニアラザルナリ、徒ニ後ノ禍ヲ招カンヨリハ和シテ前
 途ノ榮ヲ共ニセンニハ如カズト、輝元之ニ從ヒ使ヲ遣シ喪ヲ弔シ
 且好ヲ修ス、後秀吉ノ天下ヲ一統シテ關白ニ任ゼラル、ヤ、輝

(四)

銃砲ノ傳來、
 元從四位ニ叙セラレ、天正十六年參議ニ任ゼラレ、慶長二年從三
 位權中納言ニ任ゼラレ、一族顯官ニ昇ルモノ甚ダ多キニ至レリ、

(五)

天文十二年葡萄牙ノ人種子島ニ來リ鳥銃ヲ傳フ、島主兵部丞時堯
 大ニ喜ビ、其術ヲ學ブ、後和泉堺ノ商人橋屋又三郎種子島ニ至リ
 其術ヲ學ブ、是ヨリ鉄砲大ニ行ハレ、元龜天正時代ヨリ已ニ戰陣
 等ニモ用ヰラレタリ、大砲ノ渡來セシハ尙是ヨリ十年許ノ後ニア
 リ、昔時鉄砲ヲ呼ビテ種子島ト云フ者ハ、蓋シ其始メ來リシ地名
 ナ以テ名ケシナリ、
 山崎ノ戰トハ如何、

天正十年光秀ノ信長ヲ弑スルヤ、諸將敢テ先ツ討賊ノ師ヲ發スル
 者ナカリシニ、秀吉ノ毛利氏ト和シテ兵ヲ引キテ至ルヲ聞クヤ、
 皆大ニ喜ビ悉ク尼崎ニ會シテ戰ヲ議セリ、此役高山友祥先鋒タリ、

(四)

中川清秀・池田信輝・丹羽長秀・織田信孝之ニ次グ、光秀之ヲ聞キテ大ニ驚キ、自ラ洞嶺ニ至リ遂ニ進ミテ淀城ニ入ル、翌日秀吉諸將ヲ帥キテ光秀ト山崎ニ戰フ、光秀大ニ敗レ走リテ勝龍城ニ入ル、秀吉ノ軍追ウテ之ヲ圍ム、城兵散亡シテ僅ニ百人ヲ餘スノミ、光秀夜ニ乘シ圍ヲ潰シテ北ニ走リ、小栗樓ニ至リ土兵ノ殺ス所トナル、餘黨尋キテ皆誅ニ伏シ事平グ、之ヲ山崎ノ戰ト云フ、

賤岳戦争ノ顛末ヲ記セ、

天正十年織田氏ノ諸將光秀ヲ亡シテ織田氏ノ所領ヲ分ツヤ、秀吉國最モ富ミ兵最モ強シ、織田信孝之ヲ忌ミ、柴田勝家・瀧川一益等ト謀リ、秀吉ヲ除カント欲ス、秀吉聞キテ堅ク織田信雄ト結ビ、信孝ヲ岐阜ニ攻メシニ、信孝兵少キヲ以テ伴リテ和ヲ乞ヒ勝家一益等モ亦明年ヲ待チテ共ニ秀吉ヲ夾ミ攻メント欲シ、伴リテ和ヲ請フ、秀吉併ニ之ヲ許シタレモ其策ヲ知レルヲ以テ、突然兵ヲ率

キテ長濱ヲ攻メ、勝家ノ義子勝豐ヲ降ダシ、越前ノ要路ヲ絶チ以テ勝家ノ膽ヲ奪ヒ、明年正月一益ヲ伊勢ニ攻ム、勝家之ヲ聞キ佐久間盛政ヲシテ出テ、柳瀬ニ陣セシム、秀吉諸將ヲ留メテ一益ニ備ヘ、自ラ諸軍ヲ帥キテ柳瀬ニ赴キ、連珠砦ヲ築キテ自ラ長濱ニ屯ス、四月秀吉信孝ヲ攻メ大垣ニ至ル、盛政赴キ援ハントスレモ秀吉ノ諸砦相連續シテ道路通ゼズ、山路將監盛政ニ語リテ曰ク、敵ノ諸壘皆堅シ、獨リ中川清秀ノ壘賤嶽ノ麓ニアリ以テ破ルベシト、盛政之ニ從ヒ夜ニ乘シテ賤嶽ヲ襲ヒ守將ヲ殺シ、勝ニ乘シテ備ヲ設ケズ、勝家之ヲ患ヒ、盛政ヲ召還セントセシモ盛政之ニ應ゼズ、時ニ秀吉岐阜ヲ圍マント欲セシガ、盛政ノ尙去ラザルヲ聞キテ大ニ喜ビ、自ラ兵一萬五千ヲ率キテ馳セテ賤嶽ニ向ヒ盛政ヲ撃ツ、秀吉ノ部將・加藤清正・福島正則・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・糟屋武則・片桐且元・戰ツテ大ニ盛政ヲ破リ、逃グルヲ逐ヒテ遂ニ

之ヲ北莊ニ捕フ、尋ギテ勝家ハ自殺シ一益ハ降り、信孝信雄等ハ
迫マラレテ自殺シ、近畿粗定マレリ、之ヲ賤ヶ岳戰爭ノ顛末トナ
ス

第五 豐臣時代

(四九)

豐臣秀吉ノ幼時ヨリ海内統一マデノ略歴ヲ舉ゲヨ、
秀吉ハ尾張國中村ノ農彌助ノ子ナリ、幼字ヲ日吉ト云フ、彌助死ス
ルノ後チ、母同里ノ筑阿彌ニ嫁シタルヲ以テ日吉亦之ニ從フ、筑
阿彌之ヲ僧トナサントセシモ日吉敢テ僧事ヲ學バズ、依リテ遣ハ
シテ人ノ奴トナス、至ル所僅ニ數日ニシテ去レリ、十六歳ノ時日
吉遂ニ遠江ニ至リ松下之綱ノ家僕トナリ、名ヲ木下藤吉郎ト改ム、
藤吉織田信長ノ豪雄ヲ慕ヒ仕ヘテ之カ奴トナリ勤仕甚々勉メケレ
バ、信長ノ眷遇日ニ厚シ、幾モナクシテ進ミテ吏トナリ、屢奇功

ヲ顯ハシ擢テラレテ部將トナリ、姓名ヲ變ジテ羽柴秀吉ト稱ス、
天正五年信長秀吉ヲシテ毛利氏ヲ討タシメシト之ニ謂ツテ曰ク、
若シ功成ラバ中國ヲ以テ汝ニ賞セン、汝進ミテ九州ヲ取ルベシ、吾
亦之ヲ助ケント、秀吉謝シテ曰ク、中國ヲ得ルコト最モ易シ、願
クハ中國ヲ以テ近臣ノ功アル者ニ與ヘヨ、臣ハ勢ニ乗ジテ九州ヲ
平ゲン、君一歳ノ收入ヲ賜ラハ則チ足レリ、然ラバ臣糧食ヲ畜ヘ
兵艦ヲ造リ、海ヲ渡リテ朝鮮ヲ討タン、請フ朝鮮ヲ以テ臣ニ與ヘ
ヨ、臣復々朝鮮ノ兵ヲ率キテ直チニ明國ニ入り四百州ヲ蕩平シ、
三國ヲ合一シテ以テ君ノ威武ヲ發揚セント、後信長ノ弒ニ遇フヤ、
歸リテ光秀ヲ誅シ、柴田・瀧川・佐久間等ヲ平ケテ北國ヲ定メ、長曾
我部ヲ降シテ四國ヲ平ケ、竟ニ織田氏ニ代リテ天下ニ號令シ累進
シテ關白太政大臣從一位ニ至リ、豐臣ノ姓ヲ賜ハル、天正十五年
自ラ兵ニ將トシテ西征シ、島津氏ヲ降シテ九州ヲ平ラゲ、復々小

(五)

田原ヲ攻メテ北條氏ヲ亡シ、是ニ至リテ天下全ク一統セリ、秀吉兵ヲ起シテヨリ此ニ至ルマテ僅ニ十數年ナリト云フ、

豊臣氏第一回朝鮮征伐ノ顛末如何、

秀吉已ニ天下ヲ一統シ、更ニ明國ヲ征服セント欲シ、乃チ對馬守宗義智ヲシテ朝鮮王ニ説キ、我軍ヲ導キテ明ニ入ラシメントス、王從ハズ、義智還リテ朝鮮ノ形勢ヲ告ゲ且ツ其地圖ヲ獻ゼリ、天正十九年秀吉竟ニ意ヲ征韓ニ決シ、關白職ヲ養子秀次ニ譲リ、自ラ大閣ト稱シ、肥前名護屋ニ至リ、陣營ヲ造リテ之ニ居ル、先ツ水軍ノ將九鬼義隆ヲシテ巨艦數艘ヲ造ラシメ、又中國四國ニ課シテ各船艦ヲ造リ、糧兵ヲ出サシム、乃チ浮田秀家ヲ以テ元帥トシ、毛利輝元ト共ニ先ツ對馬ニ屯セシメ、征韓ノ諸將ヲ部署シテ八隊トナセリ、小西行長加藤清正共ニ其先鋒タリ、黒田長政・大友義純・島津義弘・毛利高政・福島政則・長曾我部元親・蜂須賀家政・生駒親政、

小早川隆景・毛利秀包・立花宗茂等之ニ次グ、其兵凡ソ十三萬餘、別ニ水軍アリ、九鬼義隆・脇坂安治・加藤嘉明・來島康親之ニ將タリ、其兵凡ソ五千二百人、又遊軍アリ其兵凡ソ六萬餘、舳艫相銜ミ旌旗天ヲ蔽ウテ名護屋ヲ發ス、時ニ後陽成天皇ノ文錄元年四月ナリ、諸將ノ朝鮮ニ渡ルヤ各其向フ所ヲ定メ、清正ハ感鏡道ヨリ、行長ハ平安道ヨリ、黒田長政ハ慶尙道ヨリ、蜂須賀家政ハ忠清道ヨリ、小早川隆景ハ黃海道ヨリ、森忠政ハ江原道ヨリ、毛利輝元ハ全羅道ヨリ進ム、我陸軍向フ所敵ナク清正ノ如キハ竟ニ二王子ヲ擒ニスルニ至レリ、然ル朝鮮水軍ノ將李舜臣最モ水戰ニ熟シ、我軍屢利アラズ、朝鮮急ヲ明ニ告グルニ及ビ、明主神宗其將祖承訓・史儒算ヲ遣ハシテ韓軍ヲ援ハシメシガ、軍大ニ敗レテ儒算ハ死シ、承訓ハ身ヲ以テ免レタリ、時ニ李如松ト云フ者アリ、明朝第一ノ武將ト稱セラル、神宗乃チ如松ヲシテ大軍ニ將トシ來リ援ハシム、

(五)

我軍戰ツテ利アラズ、行長・秀家・三成等皆敗走セシニ、小早川隆景・立花宗茂・毛利秀包等留リテ大ニ碧蹄館ニ血戰シ、如松ノ大軍ヲ敗リ、如松僅ニ身ヲ以テ免レタリ、如松碧蹄館ノ敗ニ懲リ、越人沈惟敬ヲシテ和ヲ請ハシメケレバ秀吉乃チ朝鮮ノ王子以下ヲ放還スルコト、慶尙・忠清・全羅ノ三道ヲ割キテ我ニ與ヘ年々入貢スルコト、秀吉ヲ國王ニ封冊スルコト等ノ七條ヲ約シテ其請ヲ許シ、外征ノ諸軍ヲ召還セリ、是ヲ第一役ノ顛末トナス、

淺野長政ガ秀吉ノ親ヲ海ヲ渡リテ外征セントセシヲ諫メタル次第ヲ問フ、

秀吉・沈惟敬ノ請ヲ許シ、行長・如安ニ命ジテ惟敬ト共ニ明ニ赴カシメシニ、明主・如安ヲ疑ヒテ近ツカシメズ、爲メニ久シク歸國スルコトヲ得ザリキ、是ニ於テ秀吉惟敬ニ欺レタルヲ知リ、諸將ヲ會合(名護屋ノ營)シテ家康ヲシテ内國ヲ守ラシメ、自ラ海ヲ渡リ

テ明ヲ滅サンコトヲ告ゲヌ、淺野長政進ミテ曰ク殿下ハ狐憑ノミト、秀吉怫然刀ヲ扣ヘテ曰ク吾ガ狐憑タル、說アルカト、長政對ヘテ曰ク說アリ、タトヒ說ナキモ臣ハ固ヨリ死ヲ辭セズ、願フニ天下纔ニ定リ人民皆休息無事ヲ希フニ當リ、殿下故ナクシテ外征ヲ企テ、父子兄弟ヲシテ骨ヲ海外ニ曝サシメ哭泣ノ聲日々ニ絶エズ、加之人民皆漕轉ニ疲レ、賦役ニ苦マザルハナシ、然ルコト今殿下趾ヲ舉ケンカ、六十州ノ寇賊人民ノ困難ニ乘シテ蜂起セン、徳川公アリト雖モ、恐ラクハ之ヲ鎮メ難カラシ、左レバ殿下未ダ釜山ニ達セザルニ、根本ノ地ハ早ク他人ノ物トナラン、是レ豈最モ親易キ所ニアラズヤ、殿下之ヲ察セズ、狐憑ニ非ズシテ何ゾ、諺ニ云フ、鼈人ヲ食ハントシテ却リテ人ニ食ハルト、殿下ノ謂ヒナランカト、秀吉益怒リテ之ヲ殺サントセシガ、前田利家蒲生氏郷等辨解シテ事ヤムヲ得タリ、而シテ其親征モ亦遂ニ止メリ、

(五)

第二回朝鮮征伐ノ顛末如何、

慶長元年明及ヒ朝鮮ノ使者來リシニ、朝鮮ハ其道ニテ獻ゼザリシカバ、秀吉怒リテ其使者ヲ見ズ、獨リ明ノ使者ヲ伏見城ニ延見セリ、使者伏シテ冊文冕服ヲ奉ル、秀吉侍吏僧承允ヲシテ冊文ヲ讀マシメシニ、冊文中汝ヲ封シテ日本國王トナスノ句アリケレバ、秀吉大ニ怒リテ冊書ヲ裂キ、即夜使ヲ逐ヒ還シ、西南四道ニ令シテ兵十四萬人ヲ發シ、明年二月ヲ以テ悉ク名護屋ニ會セシメ再ヒ朝鮮ヲ伐ツ、小早川秀秋ヲ元帥トナシ、毛利秀元・浮田秀家ヲ副トナシ、黒田孝高ヲ參謀トス、兩先鋒及ヒ諸將皆前役ノ如シ、朝鮮前役ニ懲リ所在奔竄スルノミ、明大ニ兵ヲ募リ、邢玠・楊鎬・麻貴等ヲ以テ將トナシ、來リテ朝鮮ヲ救ハシム、我軍轉戦シテ復々國都ニ迫リシニ時正ニ嚴寒ニシテ進ムニ便ナラズ、清正退キテ蔚山ヲ守リ、行長退キテ順天ヲ守ル、巳ニシテ明將邢玠等軍ヲ分チテ

(五)

關ヶ原合戦ノ顛末如何、

三トナシ、諸道ノ援路ヲ絶チ大兵ヲ集メテ蔚山ヲ圍ミ、持久ノ謀ヲナス、城中食盡キ馬ヲ殺シテ之ヲ食フ、加フルニ大雪酷寒兵卒或ハ指ヲ墮スニ至ル、諸將蔚山ノ急ヲ聞キ道ヲ分チテ赴キ助ケ、内外夾ミ伐チテ大ニ明兵ヲ破レリ、既ニシテ秀吉ノ計至リケレバ諸將乃チ兵ヲ收メテ歸ル、時ニ慶長三年十一月ナリ、
關ヶ原合戦ノ顛末如何、
秀吉薨シテ後徳川家康・伏見ニ在リテ天下ノ事ヲ決シ、前田利家・秀頼ヲ奉シテ大坂ニ居ル、石田三成竊ニ利家ヲ奉シテ家康ヲ除カントセシガ、適マ利家卒シテ計ナラズ、既ニシテ加藤・黒田・福島等三成ヲ嫉ム者家康ニ黨シ、毛利・浮田・上杉・佐竹・島津等三成ニ與シ兩黨水火ノ如シ、三成職ヲ解キテ其邑ニ返リ相約シテ家康ヲ伐タント謀ル、慶長五年家康令チ上杉景勝ニ下シテ其入覲ヲ促シ、ニ景勝令チ奉セズシテ却テ家康ノ罪ヲ數ヘタリ、家康乃チ諸將ヲ率

井テ景勝ヲ征シ、親將鳥居元忠等ヲ留メテ伏見城ヲ守ラシメヌ、
 三成此機ニ乗シ檄ヲ諸將ニ傳ヘ、秀頼ノ命ヲ唱ヘテ家康ヲ討ツ、
 毛利島津等先ツ伏見城ヲ攻メテ城將元忠ヲ斬ル、時ニ家康下野小
 山ニ在リテソノ報ヲ聞キ、先ツ親將ヲ會シテ攻守ヲ議セリ、井伊直
 政席ヲ回シテ速ニ群雄ヲ掃蕩スルノ策ヲ進ム、家康乃チ之ヲ外附
 ノ諸將ニ詢ル、福島政則首トシテ之ヲ贊シ、淺野・黒田・池田・細川
 等亦之ヲ贊シケレバ議乃チ定ル、家康乃チ正則ヲ先鋒トナシ、池
 田直政・本多忠勝ヲ監軍トナシ、諸軍相率井テ西上セシメ、次子秀
 康ヲ留メテ景勝ニ當ラシメヌ、是ニ於テ東軍ハ西上シ、西軍ハ東
 下シテ關ヶ原ニ會セリ、西軍總テ十二萬八千、東軍七萬五千、九
 月十五日黎明戰端ヲ開ケリ、東將本多忠勝井伊直政等ハ西將小西
 行長島津義弘ト戰ヒ福島正則ハ浮田秀家ト戰ヒ、黒田長政ハ石田
 三成ト戰ヒ、田中吉政加藤嘉明等ハ大谷吉隆ト戰ヒ、勝敗未ダ決

(一五)

豐臣時代ノ外交如何、

セズ、日既ニ午ナラントス、西軍頗ニ秀秋ノ會戰ヲ促セドモ秀秋
 應ゼズ、東軍亦秀秋ノ軍ヲ翻スヲ待チシニ秀秋躊躇シテ來ラズ、
 家康使ヲ遣リテ之ヲ促スニ及ビ秀秋遂ニ山ヲ下リ吉隆ノ軍ニ逼レ
 リ、家康是ニ於テ諸軍ニ令シ、鼓噪シテ合擊セシメシカバ、西軍
 遂ニ大敗シ三成行長走リテ捕ハレ、義弘薩摩ニ逃レ歸ル、始メ西
 軍ニ與スル者三十六國其餘成敗ヲ觀望スル者亦各地ニ徧シ、大捷
 ヲ聞テ四方皆心ヲ家康ニ歸シ、旬月ノ間ニ六十餘國盡ク定ル、家
 康乃チ使ヲ大坂ニ遣ハシテ秀頼母子ヲ慰諭シ、三成行長ヲ斬リ、
 浮田長曾我部ノ封ヲ收メ、毛利氏ノ六國ヲ削リテ長防二州ヲ與ヘ、
 上杉景勝ノ封會津百萬石ヲ收メテ米澤三十萬石ヲ與ヘ、佐竹美宣
 ノ封常陸八十萬石ヲ收メテ秋田二十萬石ヲ與ヘタリ、是ヲ關ヶ原
 戰爭ノ顛末トナス、



(一五)

是ヨリ先キ足利氏ノ末造ニ當リ、西洋人ノ東洋ニアルモノ我ガ九州・豐後・薩摩・肥前等ニ交通ヲ始メヌ、後豐臣秀吉耶蘇教ヲ禁シテ其徒ヲ殺シ、ト同時ニ葡萄牙人ノ貿易ヲ禁シタレモ、長崎人等既ニ外國貿易ノ利ヲ悟リタレバ、頻リニ貿易センコトヲ請ウテ止マズ、文祿四年遂ニ之ヲ許セリ、此間西洋ノ器物ヲ傳フルモノハ、多ク時計地圖地球儀等ヲ齎シタリキト云フ、又我ガ國人モ常ニ大船ヲ出シテ臺灣・廣東・阿瑪港・東京・安南・呂宋・占城・柬埔寨・暹羅・咬囉吧^{カンボヂヤ}等ニ渡航シテ中外ノ貨物ヲ貿易セリト云フ、

豐臣氏ノ改定シタル田制如何、
古ハ田地幅十二步長三十步即チ三百六十步ヲ以テ一段トナシ、ニ、豐臣氏ニ至リテ之ヲ廢シ三十步ヲ以テ一畝トシ、三百步ヲ以テ一段トナシ、三千步ヲ以テ一町トナセリ、是レ年貢諸役ヲ增課センガ爲メノ改定ナリト云フ、

(一六)

豐臣時代ノ建築術ハ如何、

松永久秀天主教ヲ好ミ、城ヲ大坂ノ志貴ニ起シテ天主ヲ祭り、始メテ天主閣ヲ起セリ、其閣凡ソ七層、高サ七丈餘ナリ、秀吉ノ大坂城ニモ亦天主閣ノ設アリ、然レモ秀吉ハ其教ヲ信ゼシニハアラズ、築城ノ術ハ織田氏ガ西洋ヨリ傳ヘテ安土城ヲ建築セシニ始マリ、秀吉ノ大坂城ヲ築クニ當リテハ、總ベテ巨大ナル花崗石ヲ用井、中ニハ方數十尺ニ渉ルモノアリ、以テ當時建築術ノ大ニ進歩セシヲ見ルベシ、

(一七)

月代^{ツキヤキ}ノ起原如何、

古ハ貴賤トモニ月代ヲ剃ルコトナシ、尤モ病ノ爲メナドニテ額上ノ毛ヲ殘シテ中央ヲ丸ク剃リ、其上ヲ額ノ毛ヲ以テ蔽ヒ置クコトナキニアラズ、是レ王朝ノ頃ヨリ行ハレタルモノナルガ、額上ノ髮マデモ剃去ルコトハ應仁ノ頃、武士等ガ冑ヲ冠リテ逆上ニ苦シ



ミシヨリ起リシモノナリト云フ、

第六 德川時代

(一五)

德川家康ノ略傳ヲ舉ゲヨ、

德川家康ハ三州岡崎城主德川廣忠ノ子ナリ、廣忠ノ時ヨリ駿河ノ今川氏ニ屬シ尾張ノ織田氏ト兵ヲ構ヘヌ、故ニ家康幼ニシテ今川氏ノ質トナリシガ後岡崎ニ歸リ、今川義元ノ桶狹ニ戰死スルニ及ビテ遂ニ織田信長ニ屬シ、信長本能寺ニ斃レテ政權豐臣氏ニ歸スルニ及ビ、家康又從ツテ豐臣氏ノ客將トナレリ、然レモ小牧山ノ一戰ヨリ其勢力隱然秀吉ヲ壓シ、北條氏亡ブルニ及ビテ其故地悉ク家康ノ有ニ歸シ、江戸城ヲ築キテ根據地トナセリ、秀吉ノ薨後、家康ノ威望獨リ盛ナリシニ石田三成等之ヲ嫉ミ、兵ヲ舉ゲテ家康ヲ圖リシカバ、家康之ヲ關原ノ一戰ニ破レリ、是ニ於テ天下ノ大

勢既ニ家康ニ歸セリ、元和元年七月遂ニ豐臣氏ヲ亡シ、翌年四月ニ至リテ薨ズ、年七十五、

(一五)

家康大坂城ノ富實ヲ憂ヘテ如何ナル計ヲ案出セシカ、

秀吉嘗テ金馬數十ヲ造リテ之ヲ大坂城ニ藏メ、以テ不時ノ軍資ニ充テシメタリシガ、家康大坂城ノ富實ナルヲ憂ヘ、計ヲ以テ之ヲ失ハシメンコトヲ欲シ、遂ニ秀頼ニ諭シテ、秀吉ガ建立セシ方廣寺ノ大佛ヲ修造セシメタリ、是ニ於テ其費ス所鉅萬兩ノ多キニ達シ遂ニ金馬ヲ鎔解シテ之ヲ費スニ至レリ、

(一六)

方廣寺鐘銘事件ノ大略ヲ問フ、

鐘銘事件トハ方廣寺ノ鐘銘ニ國家安康ノ文字アリシヲ、家康ハ以テ己ガ名字ヲ削リテ呪咀スルモノトナシ、俄ニ命ジテ慶賀ノ式ヲ停メシメタル事件ヲ云フナリ、是ヨリ先キ家康ハ如何ニモシテ豐臣氏ヲ亡サント欲シタレモ、其口實トナスベキモノナキニ苦シミ

(二六)

タリ、此時ニ方リテ鐘銘事件ノ起リタルガ如キハ會以テ家康ノ奸謀ヲ見ルニ足ルベキノミ、何トナレバ鐘銘ヲ作リタルモノハ東福寺ノ僧清韓ニシテ、之ヲ命ジタルモノハ家康ノ謀主天海僧正ナレバナリ、故ニ家康ハ片桐且元ノ百方之ヲ辯解セシモ、斷乎トシテ之ヲ聽カザリシノミナラズ、且元大坂ニアルルハ己ガ計略ノ行ハレ難キヲ慮リ、計ヲ以テ且元ト秀頼ノ生母淀君トノ間ヲ離間シ、且元ヲシテ其邑茨木ニ走ラシメタリ、

鐘銘事件ノ起リシ且元カ立テタル三策ヲ舉ゲヨ、

且元三策ヲ立テ、以爲ラク、淀君ヲ納レテ質トナスハ上策ナリ、秀頼ヲシテ往キテ江戸ニ居ラシムルハ中策ナリ、大坂ヲ避ケテ他ニ徙ルハ下策ナリ、三策ノ内一ヲ行ハ、東西ノ間必ズ平穩ナルベシト、然ルニ家康ハ計ヲ以テ且元ヲ離間シ、其計ヲシテ行ハレザラシメタリ、

(二七)

大坂冬陣トハ如何、

家康ノ大坂ヲ亡サント欲スルヤ既ニ明ナリ、大坂ノ君臣タルモノ豈ニ晏然タルヲ得ンヤ、是ニ於テ大野治長等、秀頼淀君ニ勸メテ兵ヲ舉ゲシム、真田幸村、長曾我部盛親等、浮浪ノ士集ルモノ六萬餘人、然レモ領地ヲ有スル諸侯ハ一人モ之ニ赴クモノナシ、家康秀忠自ラ進ミテ大坂城ヲ攻ム、其兵凡ソ十五萬人、城固クシテ數旬拔ケズ、家康人ヲ遣リテ和ヲ勸メ、其城濠ヲ填メシメテ歸ル、之ヲ大坂冬陣ト云フ、時ニ慶長十九年十月ナリ、

(二八)

大坂夏陣トハ如何、

冬陣ノ和議既ニ成リテ互ニ兵ヲ解キシガ、大坂ノ客兵ハ衣食ヲ得ベキ所ナキヲ以テ更ニ再舉テ秀頼母子ニ勸メシカバ、元和元年マタ兵ヲ舉ゲテ十五萬人ヲ得タリ、家康兵ヲ出シテ之ヲ圍ムコト去歲ノ如シ、時ニ治長淀君ノ寵ヲ恃ミテ驕恣ナリ、軍議爲メニ屢變

(一六四)

シ、將士皆和セズ、東軍進ミテ城ヲ圍ミ火ヲ放チシカバ、秀頼・淀君・治長等皆自殺シテ事平ゲリ、之ヲ大坂夏陣ト云フ、家康ノ東本願寺ヲ立テタル深意如何、

秀吉ノ西伐ニ當リ、眞宗ノ門徒・薩摩ノ路ヲ通シタルヲ以テ、本願寺光佐ハ寺ヲ京ノ六條ニ建ツルコトヲ許サレタリ、後光佐死スルニ及ビ、二子光壽光昭アリ、光昭ノ母ハ美人ナリシカバ其身ヲ秀吉ニ委テテ光昭ヲ門主トナセリ、關ヶ原ノ戰ニ當リテ光壽・家康ニ内應セシカバ、家康・光壽ハ門主タルベキモノナリトテ、別ニ寺ヲ六條ノ東ニ立テ東本願寺ト云ヒ、國內ノ門徒ヲ東西ニ寺ニ分屬セシメヌ、是レ家康ガ本願寺ノ強大制シ難キヲ以テ其勢力ヲ分タシガ爲メノ策ナリキトゾ、

(一六五)

江戸ノ參勤交代トハ如何、家康既ニ天下ノ大權ヲ掌握シ藤堂高虎ノ議ヲ以テ諸侯ノ藩邸及ヒ

(一六六)

質ヲ江戸ニ置クコトヲ命ジ、慶長十四年諸侯ノ妻子悉ク江戸ニ至ル、是ニ至リテ幕府ニ參勤スル者一年ハ江戸ニ留リ、一年ハ其邑ニ歸ルノ制ヲ定メヌ、之ヲ參勤交代ト云フ、

島津家久ノ琉球ヲ征シタル顛末ヲ記セ、是ヨリ先琉球我國ニ屬シ、足利義教ノ時島津氏ノ附庸トナリ、秀吉ノ世ニ及ビテ屢入朝セシガ、秀吉明國ヲ攻メントセシ時琉球王尙寧ヲシテ其旨ヲ明ニ通ゼシメ、又兵ヲ出シテ朝鮮ノ軍ニ會セシメントセシニ、尙寧懼レテ來ラズ、之ヨリ久シク入貢ヲ闕ケリ、島津家久入貢ヲ促セドモ來ラズ、是ニ於テ將軍秀忠ニ請ヒテ、其將新納一氏ヲ遣ハシテ之ヲ伐タシメ、國王尙寧及ビ王子大臣數十人ヲ擒ニシテ還リヌ、幕府乃チ琉球ヲ以テ家久ニ賜ヘリ、時ニ慶長十四年ナリ、

(一六七)

我が國人ノ地球ヲ一周シタル始ヲ問フ、

(六)

慶長十六年伊達政宗其臣支倉常長等ヲ遣シテ羅馬ニ使セシメシガ、常長等先ツ呂宋ニ至リ、太平洋ヲ渡リテ墨是哥ニ至リ、又大西洋ヲ渡リテ西班牙ニ達シ、遂ニ羅馬ニ至リテ法王ニ謁シ、七年ノ後地球ヲ一周シテ歸リヌ、之レ我國人地球一周ノ始ナリ、
 德川時代儒學勃興ノ次第、
 家康ノ伏見ニ在ルヤ、嘗テ藤原惺窩ヲ聘シテ其講演ヲ聽キシガ、惺窩退隱スルニ及ビ、其門人林信勝ヲ聘用シテ顧問トナス、是ニ於テ儒學大ニ興ル、將軍綱吉大ニ儒學ヲ好ミ、列侯ノ邸第ニ臨ミテ自ラ書ヲ講ゼシカバ諸侯亦之ニ倣ヒ儒士ヲ聘シ儒學大ニ行ハレ、物徂徠・伊藤仁齋前後輩出シテ各一家ノ說ヲ立ツルニ至レリ、而シテ林氏ノ奉ズル所ハ程朱ノ說ナルヲ以テ、德川氏ノ世ヲ終ルマデ、侯伯ノ學校ヲ設クルモノ、大概程朱ノ學ヲ宗トセザルナシ、

(五)

日光廟修築ノ次第ヲ問フ、
 家康ノ駿府ニ薨スルヤ、之ヲ駿河ノ久能山ニ葬リシガ、將軍秀忠之ヲ下野ノ日光山ニ改葬セリ、朝廷乃チ號ヲ賜ヒテ東照宮ト云フ、後寛永十三年ニ至リ、將軍家光之ヲ修理シテ華麗ヲ極メ、大小名ヲシテ其役ヲ助ケシメ、爲メニ七十萬兩ヲ費セリ、金碧粲然今尙ホ我國ノ壯觀タリ、朝鮮和蘭等ノ諸外國亦器財ヲ獻ズ、
 將軍家光ガ幕府ト諸侯トノ關係ヲシテ君臣ノ如クナラシメタル次第ヲ問フ、

(七)

家光ノ將軍職ニ就クヤ、外様大名(モト德川氏ノ臣下ニ非ザル諸侯ヲ云フ)ヲ召シテ曰ク、我が父祖ハ卿等ノ力ニヨリテ天下ヲ定メタリ、故ニ卿等ヲ遇スルニ客禮ヲ以テシタレト、家光ニ至リテハ則チ然ラズ、生レナガラニシテ天下ノ主タリ、卿等ヲ遇スルニ客禮ヲ以テスルコト能ハズ、今後ノ待遇ハ譜代大名(モト德川氏

ノ臣下タル諸侯ヲ云フト同一ナルベシ、卿等モシ心ニ快カラズンバ宜シク國ニ就キテ熟慮三年以テ去就ヲ決スベシト、諸大名懾服セザルナク、是ヨリ德川氏ノ勢益盛ナリ、

(七)

寛永ノ三輔トハ誰ナルカ、

寛永ノ三輔トハ德川家光ヲ助ケタル酒井忠世・土井利勝・青山忠俊ノ三人ヲ云フナリ、

(七)

德川氏ノ錢制ヲ一定セシ次第ヲ記セ、

是ヨリ先キ鎌倉幕府ノ頃ニ當リ、民間通用ノ錢貨多クハ唐宋間ノ渡來錢ヲ用ヰ、足利氏ノ末年ヨリ明ノ永樂・洪武等ノ錢ヲ用ヰルコト多カリシカバ、我が九州地方ニ於テ私ニ之ヲ鑄造スルモノアリ、錢制更ニ一定スル所ナシ、德川氏ニ至リ慶長元和年間新錢ヲ鑄シカ其數多カラズ、寛永十三年ニ至リテ從來ノ雜錢ヲ改鑄シテ寛永通寶錢ヲ造レリ、是ヨリ錢制ホゞ一定セリト云フ、

(七)

天草一揆、

元和十四年小西行長ノ遺臣益田好次等、天主教徒ノ潜伏スル者ヲ嘯集シ、其子四郎時貞ヲ推シテ盟主ト爲シ、肥前有馬ノ故城ニ據リテ亂ヲ起ス、家光・板倉重昌ヲ遣リ、西海ノ侯伯ヲ帥ヰテ之ヲ攻メシメ、尋テ又松平信綱ヲ遣リシカバ、重昌戰ツテ之ニ死セリ、年ヲ踰エテ城中糧盡ク、諸軍機ニ乘シテ攻撃シ、遂ニ之ヲ陷レ、男女三萬人ヲ斬リ、是ヨリ益天主教ヲ嚴禁セリ、

(七)

正雪ノ亂、

慶安四年由井正雪反ヲ謀リテ誅ニ伏ス、正雪ハ駿河ノ人博覽ニシテ才辨アリ、槍術家丸橋忠彌等ト黨ヲ結ビ幕府ノ顛覆ヲ謀ル、家光薨ズルニ及ビ其喪ニ乘シテ事ヲ舉ゲント欲シ自ラ駿府ニ赴キ、忠彌ト東西并ヒ起ラントス、期ニ臨ミテ事覺ハル、幕府吏ヲ遣リテ忠彌ヲ捕ヘ、又駿府城代ヲシテ正雪ヲ捕ヘシメントス、正雪事ノ

成ラザルヲ知リテ自殺ス、是ニ於テ忠彌等二十餘人ヲ品川ニ磔シ、事平ク、

(一七)

德川綱吉ヲ犬公方ト稱スル所以ヲ舉ゲヨ、

德川綱吉嗣子ナキヲ憂ヘ、佛者ノ言ヲ信ジテ殺生ヲ禁シ、又巳ガ生歳ノ成年ニ當レルヲ以テ、犬ヲ殺傷スルコトヲ禁ゼリ、コレヨリ禁ニ觸ル、モノ年々數百人ニ及ビ、誤リテ犬ヲ殺シタルガ爲メニ死ニ處セラル、者アルニ至レリ、世人之ヲ苦ミ、綱吉ヲ稱シテ、犬公方トナセリ、

(一八)

赤穂義士ノ變トハ如何、

元祿十四年綱吉勅使ヲ饗スルノ日ニ當リテ、接待赤穂侯淺野長矩、高家吉良義英ノ禮ナキヲ怒リ、斫リテ其額ニ傷ケ、營中刀ヲ拔クノ罪ニ坐シ、封ヲ沒シ死ヲ賜ハリシガ、十五年冬長矩ノ遺臣大石良雄等四十七人、夜吉良氏ノ第ヲ襲ヒテ義英ヲ斬リ長矩ノ仇ヲ報

ゼリ、之ヲ赤穂義士ノ復讐ト云フ、

(一九)

享保寛政ノ治トハ如何、

德川氏ノ治享保ヲ首トシ寛政之ニ次ク、享保ハ吉宗ノ治世ナリ、吉宗心ヲ政治ニ用井、綱吉以來ノ弊政ヲ改革シ、儉素以テ下ヲ率ウ、故ニ吉宗ヲ德川氏中興ノ主ト稱ス、寛政ハ家齊ノ治世ナリ、吉宗ノ孫家治田沼意次ヲ寵任シテ奢侈ヲ極メ、租稅ヲ重クセシヲ以テ天下之ヲ苦シミシガ其子家齊立ツニ及ビ、白川侯松平定信ヲ用井テ意次ヲ貶シ、再ヒ弊政ヲ釐革セリ、之ヲ寛政ノ治ト云フ、

(二〇)

德川氏極盛ノ時代、

德川幕府創立以來家康秀忠ヲ除クノ外ハ、世々ノ將軍一トシテ太政大臣ニ任ゼラレタルモノ無カリシニ、家齊將軍トナルニ及ビテ太政大臣ニ任ゼラレタリ、時ニ太平殆ト二百年、家齊在職四十年ヲ踰エ其初政ニ反シテ奢侈ヲ極メ、列侯モ亦競ヒテ虚飾ノ風ヲ倣

(七)

ヒ、上下安逸優游日ナ消シ四民驢呼シテ其至治ヲ稱セリ、是ヲ幕府極盛ノ時代ト爲ス、

回向院ヲ立テタル所以如何、

明曆三年江戸大ニ火アリ、城郭市街延焼セザルモノ幾ト希ニシテ住民ノ焚死十萬八千餘人ニ及ビ、悲惨ノ狀見ルニ忍ビザルモノアリ、其屍ヲ埋葬シテ一寺ヲ建テタルモノ、是レ即チ兩國橋畔ノ回向院ナリ、

(八)

德川光圀ノ略傳ヲ舉ゲヨ、

德川光圀ハ水戸ノ城主ナリ、英明ニシテ學ヲ好ミ、明朝ノ遺民朱舜水ヲ聘シテ大ニ閩藩ノ文學ヲ振起シ、又大ニ我が國ノ古籍ヲ集メ學士ヲシ大日本史等ノ書ヲ作ラシメ、皇統ノ正系ヲ立テ、臣民ノ分義ヲ明ニセリ、元祿五年光圀補正成ノ碑ヲ湊川ニ建テ題シテ嗚呼忠臣楠子之墓ト云ヘリ、是ヨリ村童牧兒モ亦楠氏ノ人トナ

(六)

リヲ知リテ、其精忠ヲ欽慕スルニ至レリ、光圀最モ心ヲ藩政ニ留メ、租稅ヲ薄クシ窮乏ヲ恤ミ、孝節ヲ表シ治績大ニ舉ガリヌ、後退隱シテ小庵ヲ西山ニ結ビシヲ以テ世人之ヲ西山公ト稱ス、

山田長正ノ事跡ヲ問フ、

山田長政ハ伊勢山田ノ人ナリ、倜儻ニシテ大志アリ、時ニ國內既ニ太平ニ歸シ、大小諸侯各々其封土ヲ守リ、豪傑ノ士復々志ヲ逞クスルノ地ナキヲ見、遂ニ奮ヒテ海外ニ渡リ暹羅國ニ至ル、時ニ大坂ノ敗兵及ビ浮浪ノ士來リ住スルモノ八千餘人、其所チ日本街ト云フ、會暹羅大ニ亂レ、國王之ヲ制スルコト能ハズ、長政乃チ日本入二千ヲ募リテ國王ヲ助ケ、伐チテ亂賊ヲ平ケ、功ヲ以テ六昆國(暹羅ノ屬國)ノ王ニ封セラル、長正久シク外國ニアリト雖モ未ダ嘗テ本國ヲ忘レズ、常ニ駿府ノ淺間社ニ戰勝ヲ祈リシガ、寛永二年駿河ノ商人ノ暹羅ヨリ歸航スルモノニ托シテ戰艦ノ圖ヲ奉納

(三)

濱田彌兵衛ノ事跡ヲ舉ゲヨ、
 濱田彌兵衛モ亦長正ト同時代ノ人ナリ、長崎ニ生ル、之ヨリ先キ
 彌兵衛ノ友人末次平藏ト云フ者アリ、人ヲシテ絲ヲ明ニ買ハシメ
 シニ、其船ノ臺灣島ニ泊セシキ、和蘭人ノ其地ニアルモノ悉ク其
 財物ヲ掠メタリ、濱田彌兵衛之ヲ聞キ、壯士ヲ率テ臺灣島ニ航
 シ、和蘭人ノ酋長ヲ捕ヘテ其罪ヲ責メ、其掠ムル所ノ貨物ヲ倍シ
 テ之ヲ償ハシメ、爾後決シテ劫略セザルヲ誓ハシメ、其質子ヲ携
 ヘテ長崎ニ歸レリ時ニ寛永五年ナリ、
 我ガ國人ノ海外ニ渡航スルモノ全ク中絶シテ長ク鎖國トナリシ所
 以如何、
 徳川氏ノ初世ノ頃マデハ、我ガ國人ノ大艦ニ乗シテ海外ニ渡航ス
 ルモノ甚タ多ク、航海ノ業大ニ開ケタリシガ、徳川幕府ハ耶蘇教

(三)

ヲ嚴禁シ、外國船渡來ノ港ヲ長崎ノ一港ニ限り、葡萄牙人三百人
 ヲ阿瑪港ニ放逐シ、遂ニ國人ノ海外ニ渡航スルヲ禁シ、又三艘ノ
 大船ヲ造ルヲ禁シタリ、是レ寛永十三年ノコトナリトス、是ヨリ
 國人ノ海外ニ航スルモノ全ク絶エテ長ク鎖國トナリシハ誠ニ惜ム
 ベキノ至リナリトス、

(四)

宗門帳トハ如何ナルモノゾ、
 徳川幕府ハ島原ノ亂アリテヨリ以來、耶蘇教ヲ以テ大禁トナシ、
 更ニ令ヲ下シテ全國ノ士民貴賤下ナク、必ズ其宗旨ヲ定メ、名籍
 ニ署シテ耶蘇教ニ歸セザルコトヲ誓ハシメタリ、之ヲ記入シタル
 帳簿ヲ名ケテ宗門帳ト云ヒ、人ノ生死アルゴトニ必ズ之ヲ宗門帳
 ニ記入シ、毎年地方ノ代官ト諸寺院トヲシテ宗門帳ヲ進呈セシメ
 タリ、

(五)

後光明天皇ノ御事跡ヲ舉ゲヨ、

天皇英明ニシテ學ヲ好ミ又武術ヲ嗜ミ玉ヘリ、京都所司代板倉重宗奏シテ曰ク、武技ハ天子ノコトニアラズ、幕府聞カバ必ズ喜バシト、天皇聽カズ、重宗復タ奏シテ曰ク陛下之ヲ止メ玉ハズバ、臣ハ幕府ニ謝スベキ辭ナシ、只割腹シテ死センノミト、天皇曰ク、朕未ダ武士割腹ノ狀ヲ見ヌ、將ニ壇ヲ南殿ニ築キテ之ヲ見ント、重宗愧謝シテ止メタリト云フ、天皇以爲ラク申世以降伊勢物語源氏物語等ノ書ヲ重シテ徒ニ詠歌ニ耽ルハコレ皇道ノ衰フル所以ナリトテ、其書ヲ座側ニ置カセ玉ハズ常ニ朝山素山ヲ召シテ經書ヲ講ゼシメ玉ヘリト云フ、

(六)

那波道圓ガ徳川頼宣ヲ諫メタルコトヲ擧ゲヨ、
紀伊侯徳川頼宣剛武ナリ、嘗テ佩刀ヲ以テ罪人ヲ斬ル、左右皆其手練ヲ讚セリ、賓師那波道圓獨リ曰ク、人君タルモノ手カラ人ヲ斫リテ心ニ快キカ、古人コレヲ爲セルモノアリ、桀紂コレナリ、

(七)

吾邦ニモ亦職業トシテ罪人ヲ斬ルモノアリ、之ヲ穢多ト稱シテ最モ人ノ賤ム所ナリト、頼宣過テ謝シテ厚ク褒賞ヲ加ヘタリト云フ、
備前侯池田光政ノ事跡ヲ問フ、

(八)

池田光政英才アリ、熊澤蕃山ヲ用サテ田ヲ拓キ學ヲ興シ、領内大ニ治メレリ、光政嘗テ治術ヲ板倉勝重ニ問フ、勝重答ヘテ曰ク、國ヲ治ムルノ道ハ、鹽鼓ヲ四角ノ器ニ入レ飯匙モテ之ヲ受クルガ如シト、光政暫シ默考シテ曰ク、左レバ飯匙ノ届カザル所ハ之ヲ如何スベキカト、勝重曰ク公ノ明敏恐シハ尙察ニ過ギント、光政ノ徳ヲ布キ惠ヲ流セルハ、勝重ノ言ニ悟ル所アルニ據レリト云フ、
徳川氏ノ諸侯排置方及ビ其旨意ヲ問フ、
徳川氏ハ許多ノ諸侯ヲ分チテ家門・譜代・外様ノ三種トナセリ、家門大名ノ大ナルモノヲ尾張・絶伊・永戸・越前・會津等各道樞要ノ地ニ封シテ幕府ノ藩屏トナシ譜代及ビ外様ノ大名ヲ其間ニ封シ、其領地

(一八)

キテ大名ノ地ト界ヲ接セシメタリ、徳川氏ガ斯ク諸侯ヲ排置シタルモノハ、一ノ大名アリテ徳川氏ニ叛カントスルモ、他ノ大名ノ其後ニ備フルガ爲メニ叛クコト能ハザラシメ、又互ニ連衡セント欲スルモ家門譜代郡代代官等ノ其間ニ介在スルガ故ニ其意ヲ達セザラシメントノ旨意ニ外ナラザルナリ、
徳川氏ノ頃將軍大名ノ鹵簿ハ如何、
將軍及ビ大名ノ外出スルハ、群士皆弓ヲ取り銃ヲ肩ニシ、槍ヲ樹テ旗號ヲ標シテ隨行セリ、士分以下ノ者ニシテ之ニ途ニ逢フハ赤足ニシテ地ニ拜伏セシメタリ、
武士ノ特權如何、
徳川氏ノ頃武士タルモノハ皆兩刀ヲ腰間ニ挿ミ、若シ平民ニシテ禮ヲ失フモノアルハ、直ニ之ヲ斫ルコトヲ許サレタリ、故ニ當

(一九)

時ノ武士ハ皆傲然トシテ平民ヲ凌暴セリト云フ、
徳川吉宗ノ大岡忠相ヲ登用セシ所以如何、
大岡忠相初メ伊勢ノ山田奉行タリ、時ニ山田ノ人、隣邑松坂ノ人下相争セテ多年決セズ、奉行ノ代ルゴトニ之ヲ訴ヘタリ、奉行ハ山田ノ人ノ直ナルヲ知レテ、松坂ハ紀伊侯ノ領地ナルガ故ニ其威ヲ懼レテ之ヲ決セザリシナリ、忠相ノ山田奉行トナルヤ、直ニ之ヲ裁決シテ松坂ノ人ヲ罰セリ、此時吉宗ハ尙ホ紀伊ニアリシガ、之ヲ聞キテ竊ニ忠相ノ剛直用ウベキヲ思ヒ、將軍トナルニ及ビ、首トシテ之ヲ登用シ江戸町奉行トナセリ、

(二〇)

大鹽ノ亂、
天保七年陰雨連月諸國大ニ飢ニ細民死スル者多シ、而シテ大吏豪富救助ニ意ナシ、大坂町奉行ノ屬吏大鹽平八郎之ヲ憐ミ、悉ク家什書籍ヲ鬻キテ貧民ニ施シ、奉行跡部良弼ニ説キテ賑恤ヲ行ハシ

(二一)

大鹽ノ亂、
天保七年陰雨連月諸國大ニ飢ニ細民死スル者多シ、而シテ大吏豪富救助ニ意ナシ、大坂町奉行ノ屬吏大鹽平八郎之ヲ憐ミ、悉ク家什書籍ヲ鬻キテ貧民ニ施シ、奉行跡部良弼ニ説キテ賑恤ヲ行ハシ

(一五)

メシトセシニ、良弼之ヲ聽カザリシカバ、平八郎大ニ怒リ其子格之助等ト河内攝津ノ民ヲ煽動シテ亂ヲ作シ、旗幟皆書スルニ救民ノ二字ヲ以テセリ、總勢凡ソ五百人、火ヲ大坂市中ニ放チ、進ミテ町奉行所ニ迫ラントス、城代土井利位奉行跡部良弼等ト兵ヲ發シテ之ヲ拒キ、大ニ之ヲ破リ平八郎父子ヲ誅ス、此役市舎兵火ニ罹ル者凡ソ一萬八千餘、時、天保八年二月ナリ、

徳川氏ノ王室ニ對スル政略ハ如何、

元來徳川氏ハ陽ニ王室ヲ尊崇スト雖モ、陰ニハ務メテ之ヲ抑制セリ、是レ幕府ヲ安寧ヲ亂サントナシテ恐レテナリ、今其抑制方ノ一端ヲ舉ゲン、幕府ヨリ禁裏附二人、仙洞附三人ヲ置キ、宮門ヲ守リ、出入ヲ監察シ、宮庭内外ノ動靜ヲ觀察シ、乘輿服御ヨリ飲食賜與ヲ供給ニ至ルマデ、一切之ヲ管理セシメタリ、故ニ朝廷事アレバ、禁裏附仙洞附之ヲ京都所司代ニ報ジ、所司代ハ之ヲ江

(一六)

戶ニ報ズルコトナセリ、制肘ノ方法至レリト云フベシ、然ルニ賢君明相ノ朝廷ニ出ヅルコトアレバ、百計シテ之ヲ退ケ更ニ憚ル所ナシ、後水尾天皇ノ御讓位ノ如キハ、幕府ノ所爲ニ出テタルモノト見エ、御讓位ノトキ親ヲ殿壁ニ書シタル御製ニ曰ク、蘆原や茂げらばしげれ、おのかまゝ、逆も道ある世にあらはこそト御憂憤ノ狀以テ想見スベシ、其他西國大名ノ江戸ニ參勤スルニ當リテハ、京都ヲ過グルコトヲ得ルモ、天皇ニ拜謁スルヲ許サマルガ如キハ、諸侯ノ天朝ヲ奉シテ幕府ヲ謀ルコトヲ恐レテノ處置ナリトス、

慶長元和以降男女外出ノ所ノ風俗如何、

慶長元和ノ頃ニハ男女ノ外出ニ深編笠ヲ冠リ、笠ノ前面兩眼ノ處ニ穴ヲ穿チテ觀覽ニ便ナラシメ、幼童及ビ少年ハ、天和貞享ノ頃マデハ其形菊花ニ似タル笠ヲ戴ケリ、之ヲ桔梗笠ト云フ、婦人ノ外出ニハ必ずかつぎ又ハ深編笠塗笠等ヲ被リ、其面ヲ顯ハサマル

ヲ禮トシ、萬治ノ頃ヨリかつぎ着クルコト止ミテ覆面ノ上ニ編笠ヲ戴ケリ、元録年中ニ至リ、女ノ塗笠止ミテ漸ク菅笠ニ變シ安永年中日傘ノ製アリテ菅笠モ亦止ミ、漸ク簪ノ華美ヲ盡スニ至レリ、

(一九)

慶長前後ノ夜具如何、

夜着ハ慶長ノ頃ヨリ出デシモノニテ、其以前ニハ寢卷ト稱シテ常衣ノ稍大ナルヲ身ニ纏ヒ、其上ニ蒲團ヲ蔽ヘシモノナリト云フ、絹木綿ノ足袋ハ何時頃ヨリ出來シカ、

(二〇)

足袋ハ古來革製ニテ上流ノ婦人ハ紫ノ染革ヲ用シガ、延寶ノ頃ヨリ絹木綿ノ製ニ變ゼリト云フ、

(二一)

徳川吉宗ノ治績如何、

吉宗ハ徳川中興ノ名將軍ナリ、聰明果決ニシテ能ク前代ノ弊政ヲ改メ、務メテ儉約ヲ行ヒ賢良ヲ用シ、又大ニ文武ノ技藝ヲ奨勵

(二二)

徳川中興ノ際諸藩ノ治績アルモノヲ舉ゲヨ、

吉宗中興ノ際諸藩ノ治績アルモノハ、熊本及ビ米澤ノ二藩ヲ以テ最トナス、熊本藩主細川重賢仁恕ニシテ學ヲ好ミ、最モ心ヲ政事ニ用シ、其臣堀平太ヲ擢ンデ、家老トナシ委ヌルニ藩政ヲ以テシ門地ヲ問ハズシテ賢才ヲ登用セシカバ、治化隣國ニ及ベリト云フ、米澤ノ藩主上杉治憲、恭儉ニシテ學ヲ好ミ、名儒細井徳民ヲ聘シテ弊政ヲ改メ惠政ヲ施シ、每郷ニ社倉ヲ設ケ穀ヲ貯ヘシメタリ、故ニ天明ノ大饑饉ニ當リテモ、封内ノ民一モ飢エタルモノナカリ

シト云フ、

(一九)

我が國洋學傳來ノ次第ヲ問フ、

我が國ニテ洋書ヲ讀ミ洋書ヲ譯スルハ、新井白石ヲ以テ最初トナス、白石先ニ蘭書ヲ習讀シ、又外國人ニ就キテ萬國ノ地理ヲ問ヒ大ニ感發スル所アリ、將軍吉宗ニ請ヒテ蘭書ヲ譯セリ、之ヨリ先キ耶蘇教禁制以來、一意其侵入ヲ悞レテ一切洋書ノ講讀ヲモ禁シタリシガ、吉宗ニ至リテ敎書ニ非ザル限ハ之ヲ許シ、カバ洋書ヲ講修スルノ道亦開ケタリ、吉宗嘗テ和蘭ノ圖書ヲ見テ其精密ナルニ感シ、寛保二年青木文藏ニ命シテ蘭書ヲ學バシメ、爾後洋學ヲ修ムルモノ益々多シ、

(二〇)

寛政ノ政トハ如何、

之レヨリ先キ田沼意次オキツクノ專横ニヨリテ幕府ノ政大ニ衰ヘシガ、家齊將軍トナルニ及ビ、先ヅ意次ヲ黜ケ、松平定信(樂翁公)ヲ擧ゲ

(二一)

寛政ノ三助トハ誰ナルカ、

テ老中ノ首坐トナセリ、定信賢明ニシテ才學アリ、出精シテ政ヲ行ヒ前代ノ弊政ヲ除キテ一ニ吉宗ノ遺法ヲ守リ、勤儉ヲ主トシ人材ヲ登用シ、文武ノ道ヲ獎勵セシカバ、徳川氏ノ政再ビ盛ナリ、後世之ヲ寛政ノ政ト云フ、

(二二)

國學復興ノ次第ヲ叙セヨ、

松平定信執政トナルニ及ビ、名儒柴野彥助(栗山)古賀與助(精里)尾藤良助(二州)ヲ擧ゲテ敎授トナシ、大ニ學校ヲ興シテ文敎ヲ盛ニセリ、世ニ之ヲ稱シテ寛政ノ三助ト云フ、皆博學篤行ノ名儒ニシテ漢學ハ此三人ニ至リテ其盛ヲ極メタリ、
國學復興ノ次第ヲ叙セヨ、
足利氏ノ頃ヨリ天下大ニ亂レテ、復タ文學ヲ事トスルモノナク、國學ノ如キモ殆ント其命脈ヲ斷絶セントスルノ有様ナリキ、徳川氏ノ治世ニ及ビ、漢學ハ漸ク盛ナルニ至リシモ、國學ヲ研究スル